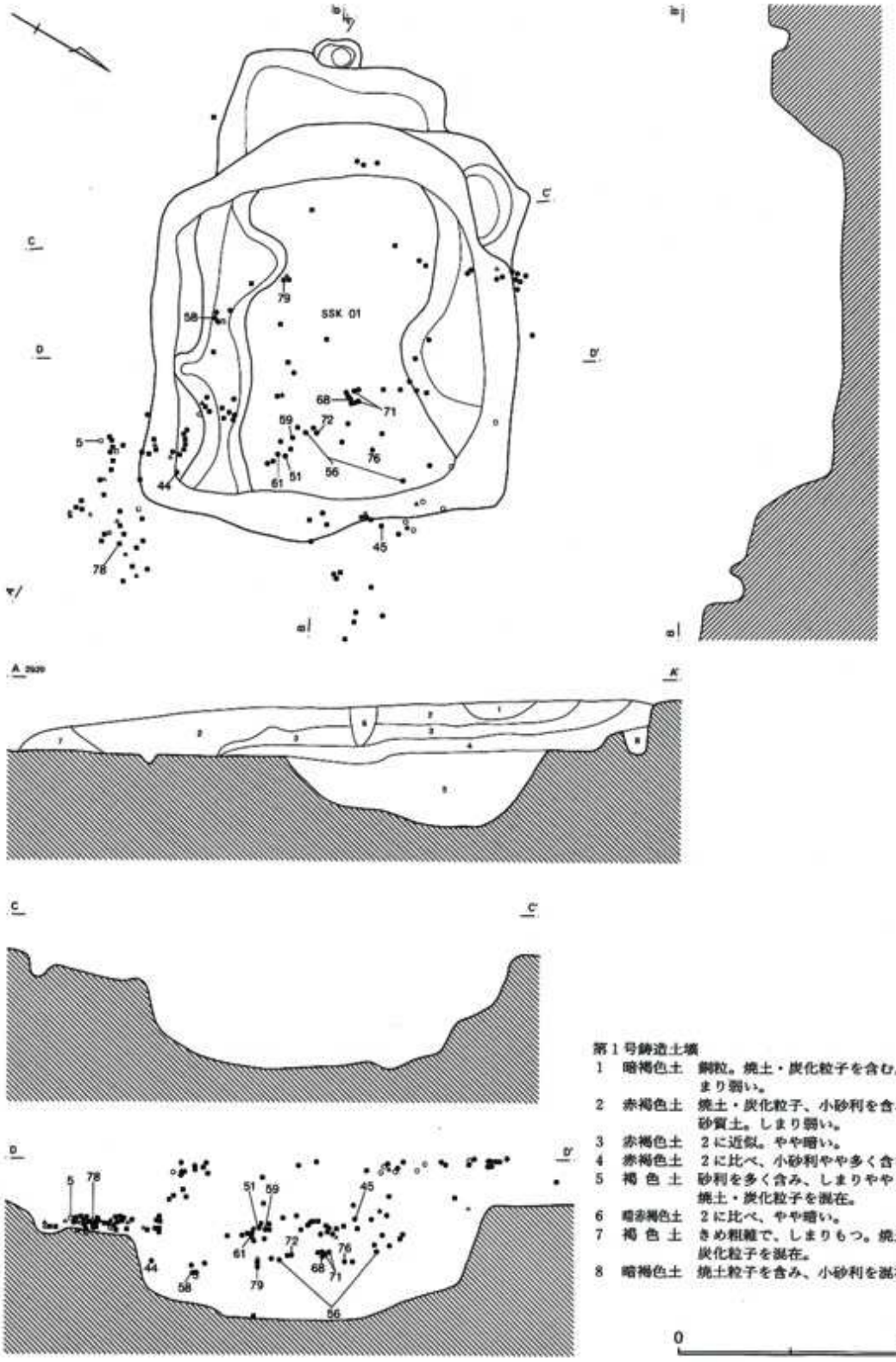
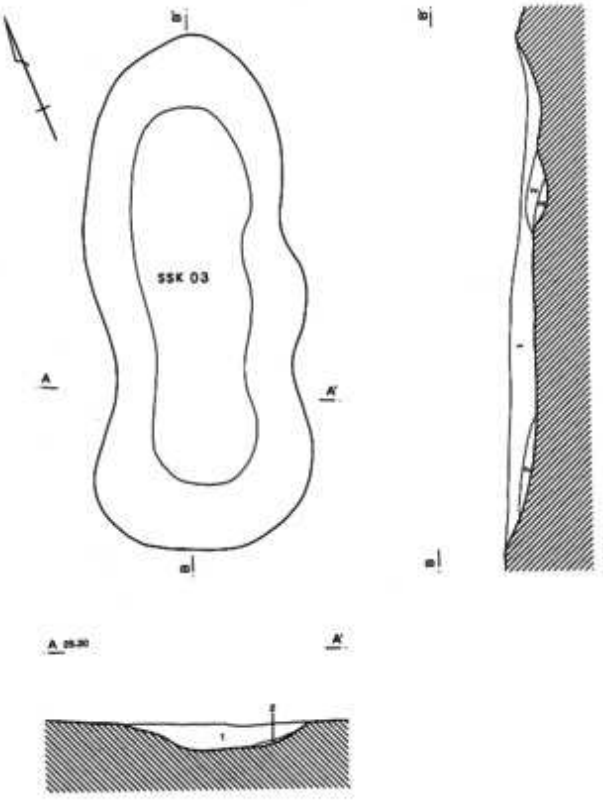
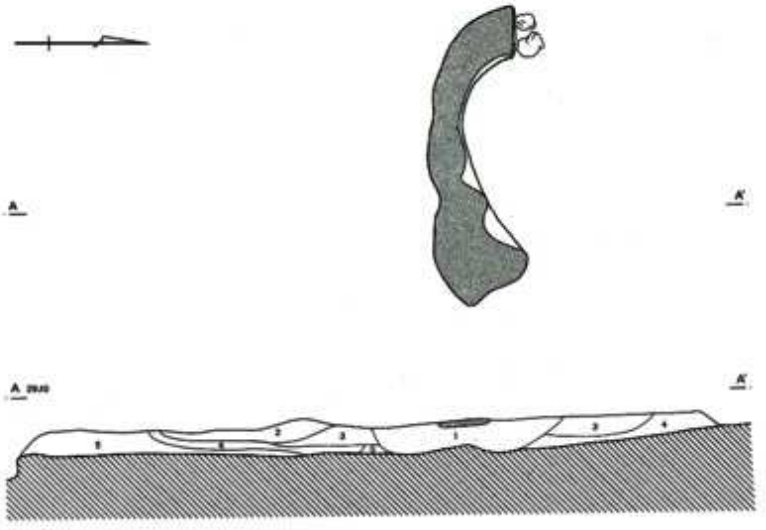


第267図　第８群第１号鋳造土壙



第２号鋳造土壙
1　黒褐色土　炭化物を多量、焼土塊を疎らに含む。
2　黒褐色土　炭化物を少量含む。
第３号鋳造土壙
1　黒褐色土　焼砂、炭化物、焼土塊を含む。
2　赤褐色土　焼土。
3　黒褐色土　焼土粒子、炭化物、鉄滓含む。

円形還元状遺構



円形還元状遺構
1　赤褐色土　焼土・炭化粒子を多く含み、しまり弱く、砂質土多い。
2　赤褐色土　焼土、炭化粒子を多く含み、しまりややもつ。
3　赤褐色土　焼砂。
4　明褐色土　焼砂、焼土塊、炭化粒子を多く含む。
5　暗褐色土　焼土・炭化粒子を含む。

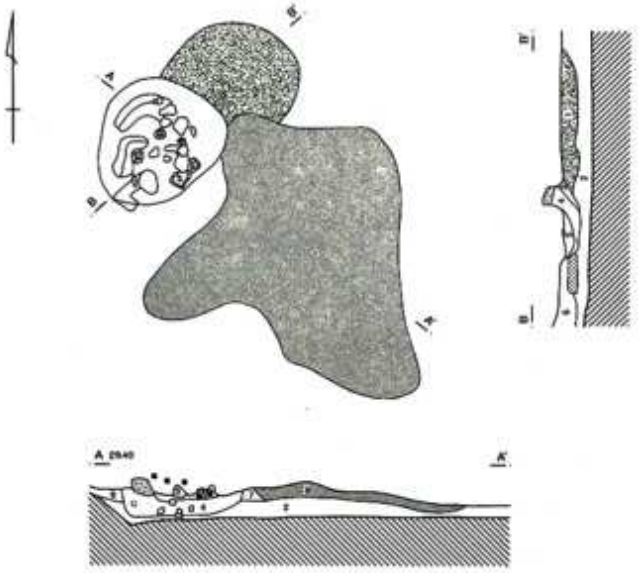
0　1m

第268図　第８群第２・３号鋳造土壙・円形還元状遺構

第１号炉（第269図）

本炉は第４号鋳造土壙内に検出された。土壙西寄りの北西コーナーに位置する。周辺には第２号炉、炉体１号や第８・９・15号廃滓を確認した。

炉は貼床された整地層の第２層を掘り込んで構築されている。第４・５層が本炉の掘り方埋土と考えられる。形態は円形の掘り方をもち、中心にこぶし程の大きさの礫を伴い炉壁は環状に検出された。中心部分と南側では炉壁の検出は希薄であった。大きさは掘り方の直径47cm、深さ８cmである。炉の大きさは直径約38cm程と推定できる。北側には炭化物の堆積層が見られる。南東側には焼土砂が広く堆積している。



第１号炉

1	黒褐色土	炭化物を多量、焼土粒子を少量含む。
2	黒褐色土	炭化物、焼土粒子を少量含む。
3	暗褐色土	ローム・焼土粒子を微量含む。
4	暗褐色土	焼土塊、焼土粒子、炭化物を含む。
5	暗褐色土	炭化物、焼土粒子を含む。
6	暗褐色土	砂質ローム、小砂利を含み、ハード。
7	暗褐色土	砂質ローム、焼砂を少量含む。
8	黒褐色土	炭化物、焼土粒子、焼砂含む。

0　1m

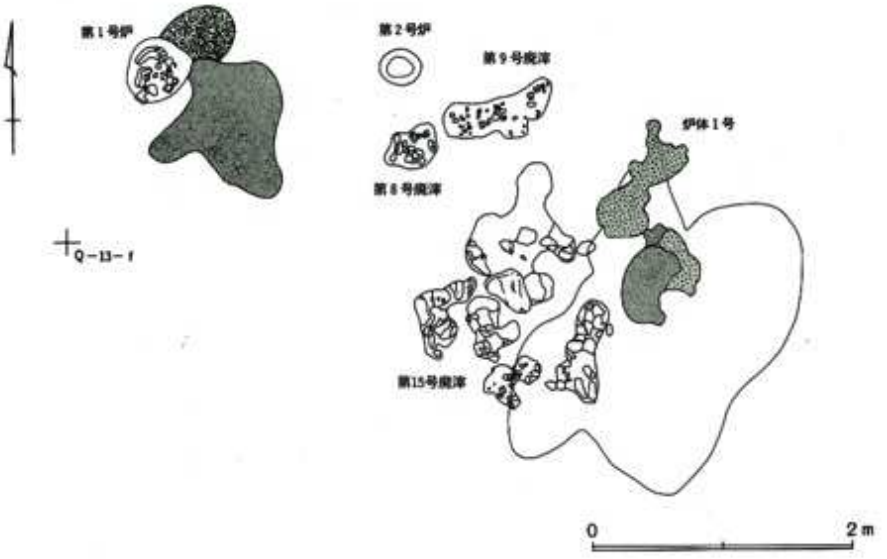
第269図　第８群第１号炉跡

第２号炉（第272図）

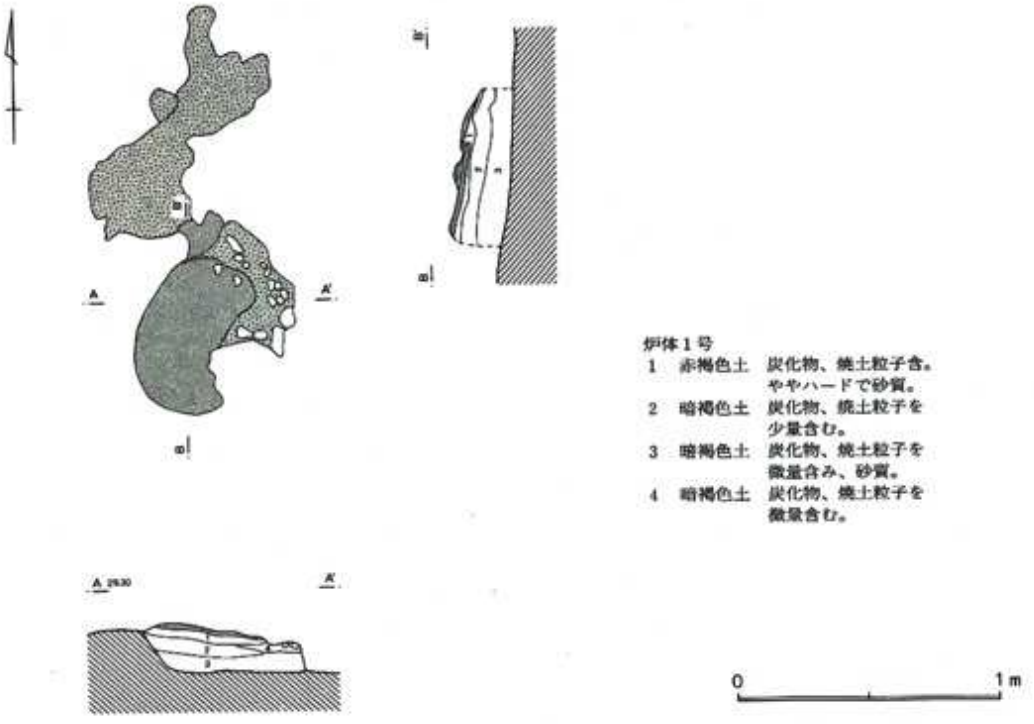
本炉は第１号炉と同様に第４号鋳造土壙内に検出し、第１号炉の東側1.80mのところに位置する。南東側には第８・９・15号廃滓や炉体１号を確認した。形態は円形をし、規模は直径32cmである。掘り込みは持たず、炉中央には砂質の灰を多量に含む暗灰色土とその下層には砂質焼土を多量に含む赤褐色土を覆土にもつ。地床炉であり、機能としては鋳型の乾燥・焼成に使用したか、或いは、小型の溶解炉底部の跡とも見られるが正確な所は不明である。

炉体１号（第271図）

炉壁片をまとめて検出した部分である。西側に存在する第15廃滓も大きな炉壁片が多く認められ関連するものと考えられる。南側には焼土の堆積部分も検出された。



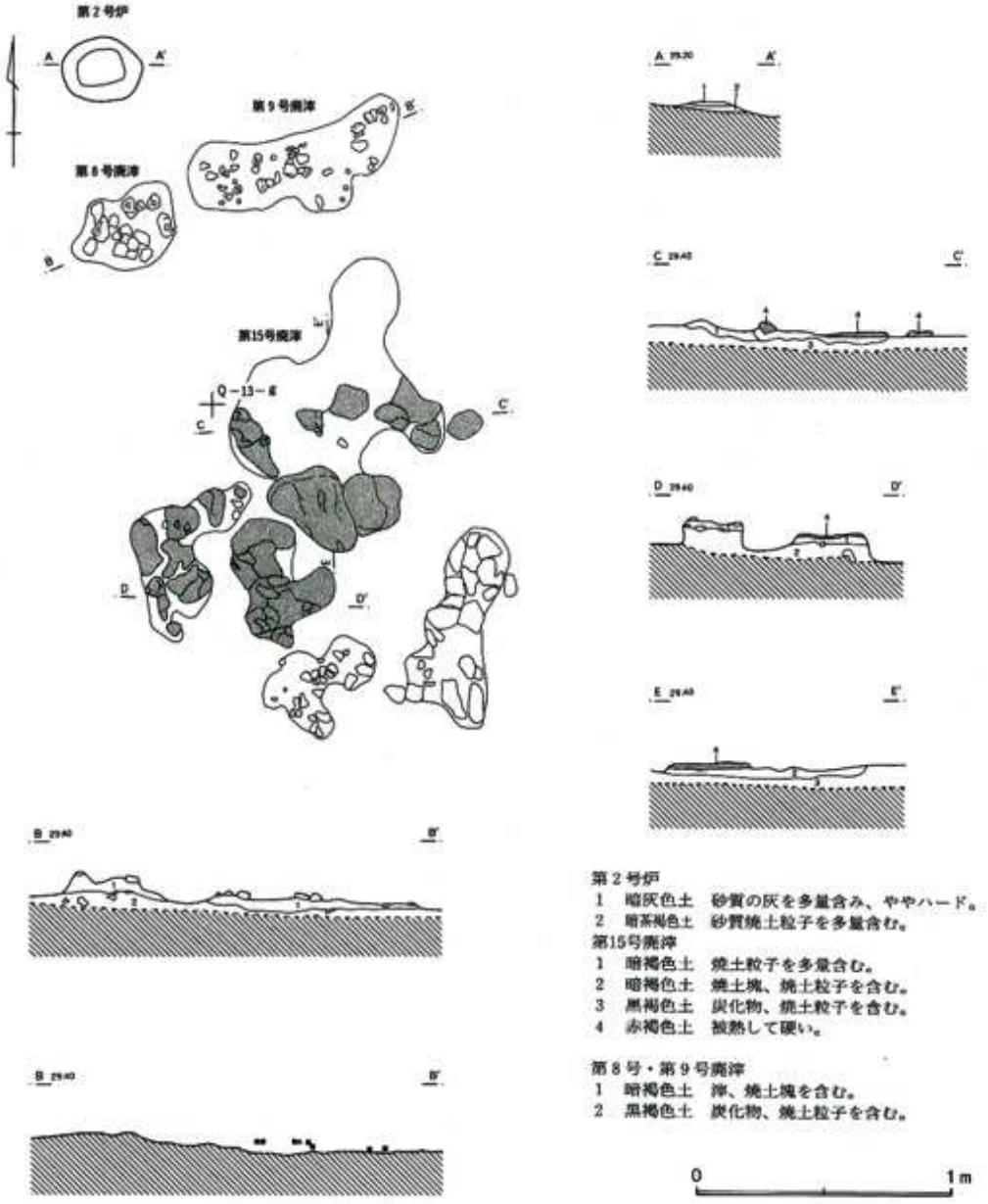
第270図　第8群第1・2号炉跡



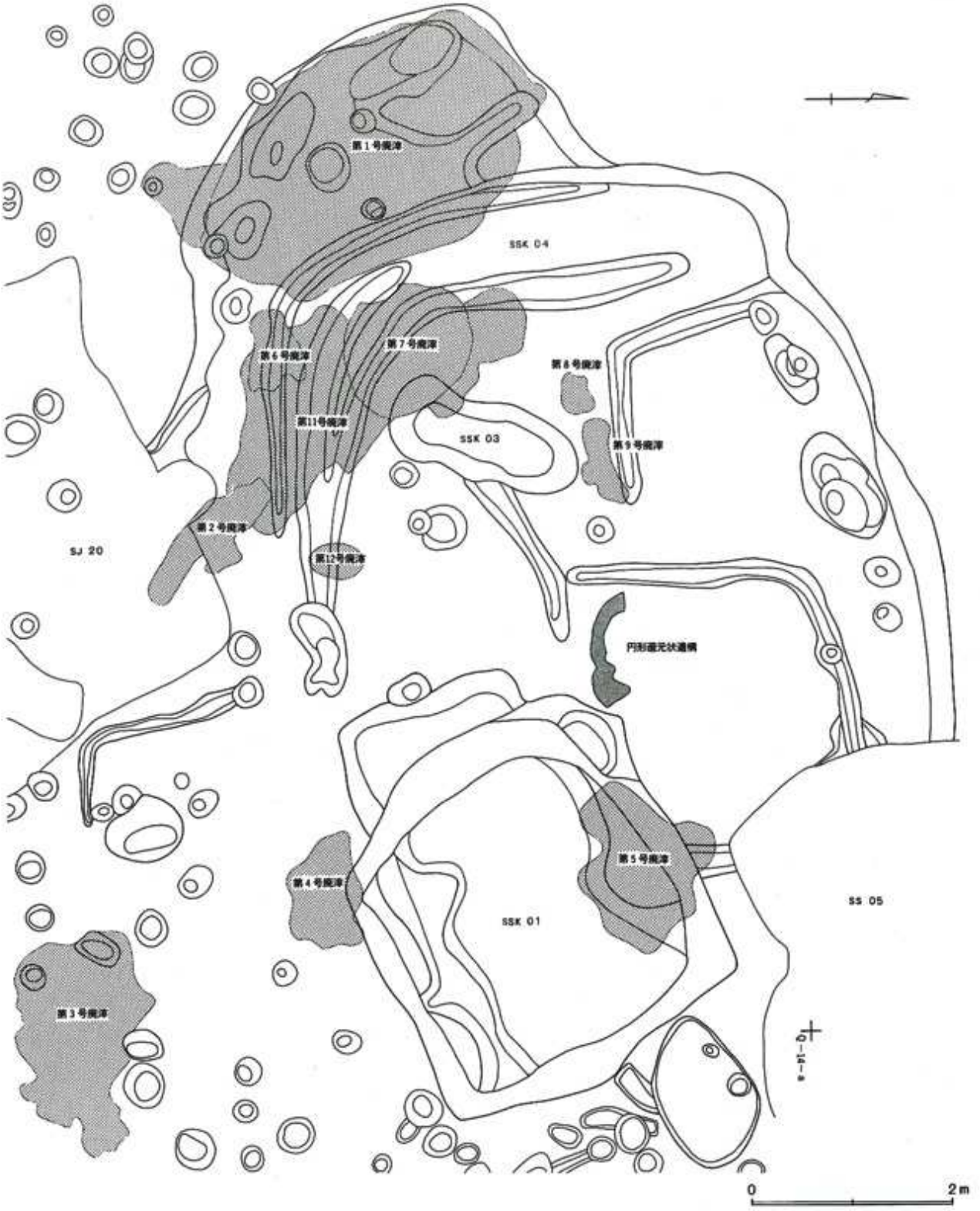
第271図　第8群炉体1号

第１～21号廃滓（第273図～275図）

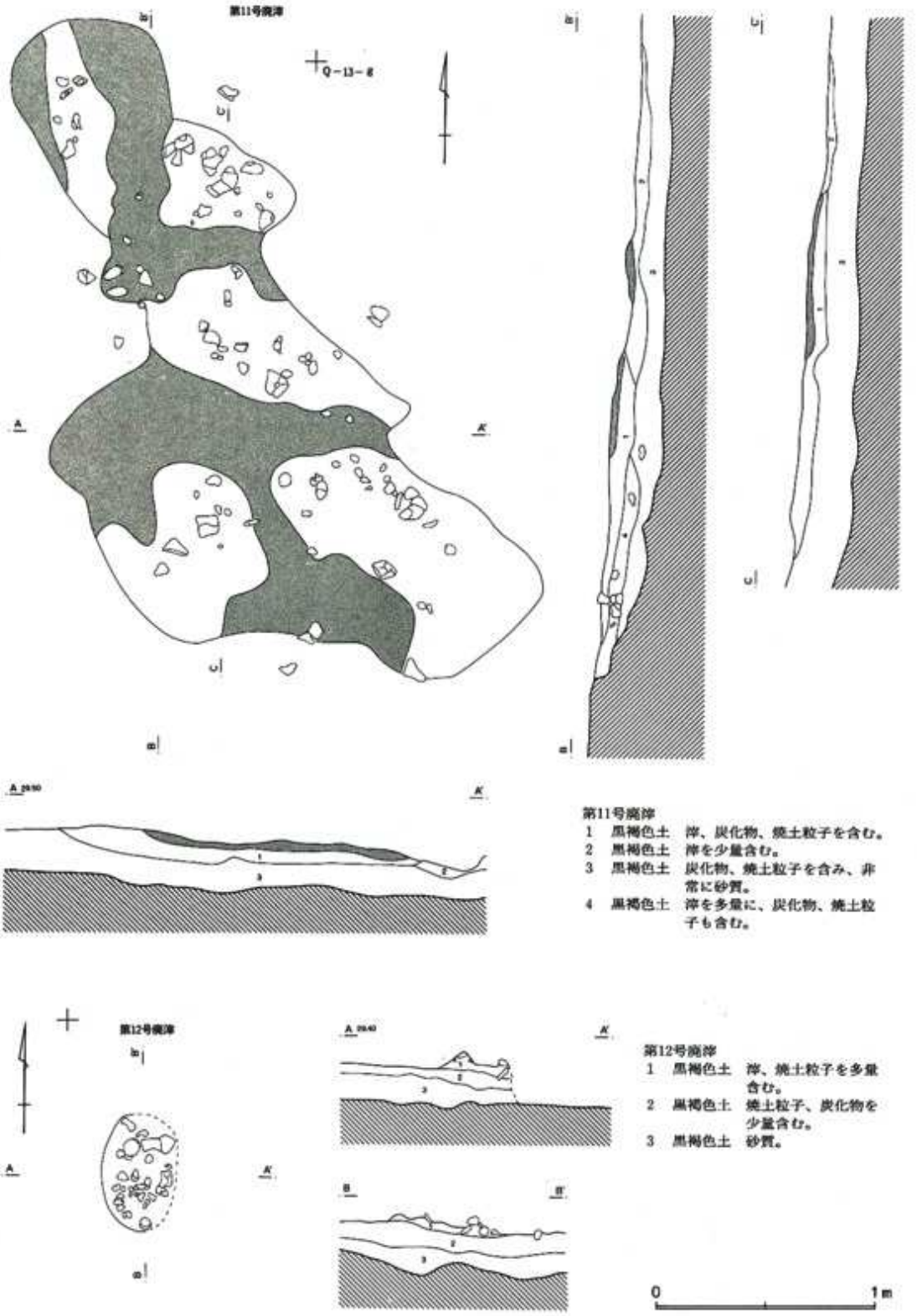
１～21号廃滓は整地面からいずれもやや高い位置の覆土中から確認された。層位や廃滓のまとまりごとに番号を付したため、21号廃滓まで認められた。このうち、第１号廃滓がもっとも規模が大きく、第16・19号廃滓は小量の規模であった。このことは、１回の操業による廃滓、あるいは幾度も廃滓場として利用されるなど様相を違えていると考える。検出した遺物は、炉壁・羽口の溶解遺物と鉄塊・鉄滓・木炭・白色滓・石の廃滓遺物を多く含みこれらに混じって鋳型が出土しているが、極めて少ない。



第272図　第８群第２号炉跡・第８・９・15号廃滓



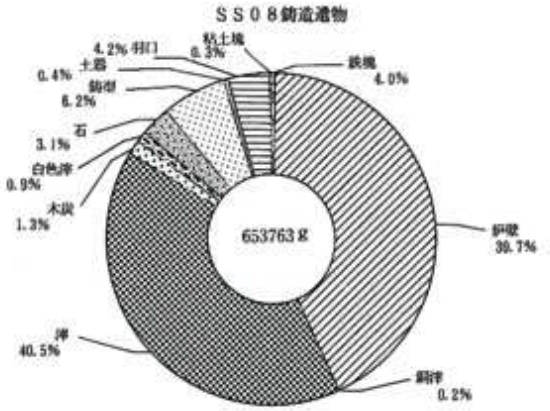
第273図　第8鋳造遺構群廃滓分布図(1)

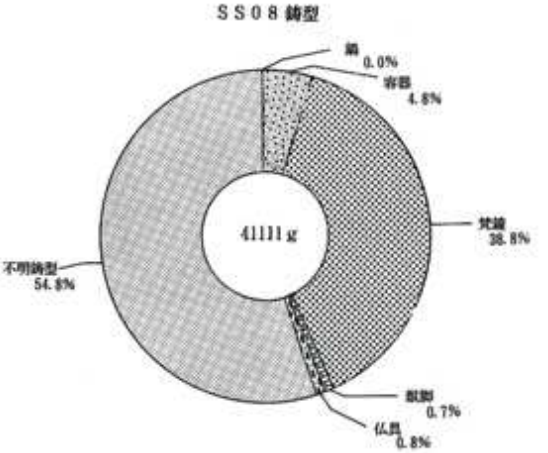


第274図　第８群第11・12号廃滓

第275図　第8鋳造遺構群廃滓分布図(2)

第30表　第８鋳造遺構群遺物計量表(1)

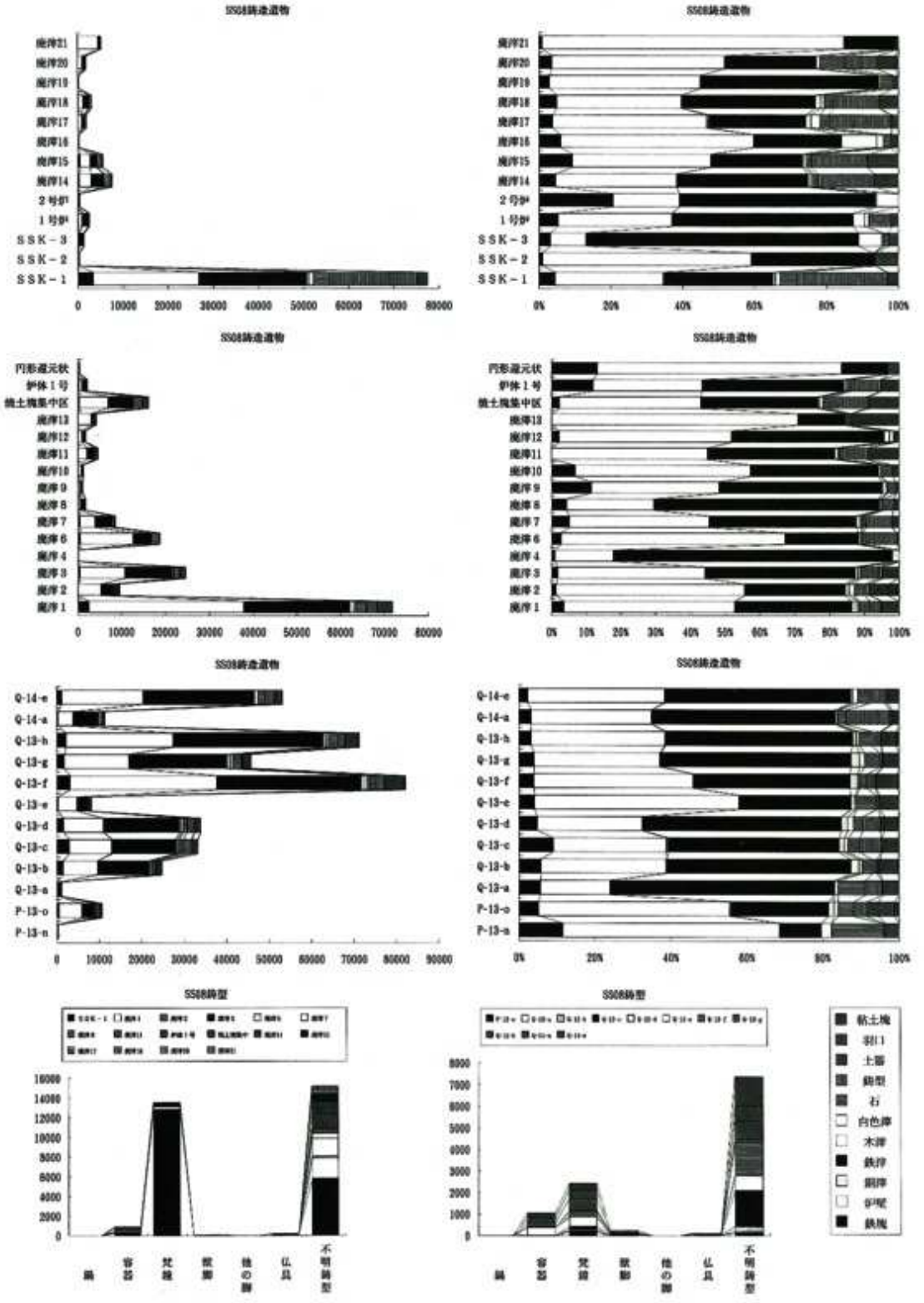




小番号	鉄塊	炉壁	銅滓	鉄滓	木炭	白色滓	石	鋳型	土器	羽口	粘土塊
ＳＳＫ－１	3414	23388	239	23456	621	962	3706	19220	292	2148	40
ＳＳＫ－２	4	227	0	133	0	0	1	0	0	25	0
ＳＳＫ－３	46	144	1	1103	96	5	20	0	0	40	0
１号炉	138	833	2	1321	85	30	186	0	0	50	0
２号炉	85	76	0	224	2	25	0	0	0	0	0
廃滓14	350	2590	4	2810	72	46	90	1216	0	509	0
廃滓15	525	2202	6	1452	27	43	65	887	0	492	0
廃滓16	23	206	0	93	38	7	8	0	0	0	5
廃滓17	74	841	16	529	27	50	47	338	10	32	0
廃滓18	152	1070	0	1157	43	32	75	398	0	185	0
廃滓19	10	145	0	172	2	0	12	0	0	5	0
廃滓20	67	938	0	495	20	1	128	182	0	95	20
廃滓21	47	4467	0	775	15	0	7	17	0	0	0
廃滓１	2572	35369	35	24056	1255	275	2332	2403	88	3569	0
廃滓２	130	5263	0	3798	129	140	309	137	0	520	365
廃滓３	456	10434	12	10609	239	179	1258	307	3	1172	0
廃滓４	2	35	0	186	4	0	0	0	0	0	0
廃滓６	536	12153	0	3961	149	15	90	1822	0	132	0
廃滓７	445	3492	0	3862	114	35	95	660	11	166	0
廃滓８	79	464	0	1188	10	5	10	53	0	30	0
廃滓９	130	421	0	537	14	2	30	0	0	9	0
廃滓10	92	682	0	497	10	0	45	0	0	25	0
廃滓11	0	2120	0	1723	0	46	20	383	0	431	0
廃滓12	41	926	0	818	30	20	0	0	10	20	0
廃滓13	6	3108	0	587	17	7	45	0	0	614	0
焼土塊集中	380	6630	0	5490	80	150	300	1720	160	1400	0
炉体１号	273	719	0	929	12	10	32	195	0	118	0
円形凹元状	64	338	0	65	0	0	0	0	15	0	0
P-13-n	46	226	0	43	11	0	54	0	2	14	0
P-13-o	543	5394	49	2743	150	127	433	363	319	449	135
Q-13-a	67	218	0	702	0	10	86	52	1	51	0
Q-13-b	1444	8157	77	12016	527	211	621	322	210	1141	98
Q-13-c	2967	9920	218	14928	459	361	983	1888	31	1465	35
Q-13-d	1638	9392	44	17732	577	500	818	1550	466	1189	93
Q-13-e	340	4472	1	2437	92	32	425	39	43	418	0
Q-13-f	3172	34455	161	33815	1685	395	1589	1748	278	4555	316
Q-13-g	1810	15173	106	22951	1010	658	1805	270	162	1815	89
Q-13-h	2230	25215	111	35131	706	548	2351	1621	123	2752	592
Q-14-a	360	3606	2	5486	60	21	246	1302	60	206	0
Q-14-e	1229	19154	72	25964	286	760	1682	2018	395	1560	34
合計	25981	254702	1159	264757	8658	5708	19983	41111	2534	27382	1766

小番号	鍋	容器	梵鐘	獣脚	他の脚	仏具	不明鋳型	日用品小計	仏具小計	鋳型合計
ＳＳＫ－１	0	278	12836	65	0	217	5824	0	13396	19220
廃滓１	9	55	270	0	0	10	2059	9	335	2403
廃滓２	0	0	1	0	0	0	136	0	1	137
廃滓３	0	0	257	0	0	0	50	0	257	307
廃滓６	0	0	48	0	0	0	1774	0	48	1822
廃滓７	0	113	0	0	0	0	547	0	113	660
廃滓８	0	0	14	0	0	0	39	0	14	53
廃滓11	0	0	9	0	0	0	374	0	9	383
炉体１号	0	0	0	0	0	0	195	0	0	195
焼土塊集中	0	350	20	10	0	0	1340	0	380	1720
廃滓14	0	6	0	0	0	0	1210	0	6	1216
廃滓15	0	0	0	0	0	0	887	0	0	887
廃滓17	0	0	17	0	0	0	321	0	17	338
廃滓18	0	112	34	0	0	0	252	0	146	398
廃滓20	0	0	27	0	0	0	155	0	27	182
廃滓21	0	0	0	0	0	0	17	0	0	17
P-13-o	0	0	196	0	0	33	134	0	229	363
Q-13-a	0	0	9	0	0	0	43	0	9	52
Q-13-b	0	0	73	0	0	0	249	0	73	322
Q-13-c	0	10	146	46	0	32	1654	0	234	1888
Q-13-d	0	367	449	0	0	37	697	0	853	1550
Q-13-e	0	0	10	0	0	0	29	0	10	39
Q-13-f	0	0	218	25	0	0	1505	0	243	1748
Q-13-g	0	54	47	24	0	14	131	0	139	270
Q-13-h	0	167	570	15	0	0	869	0	752	1621
Q-14-a	0	219	400	0	0	0	683	0	619	1302
Q-14-e	0	228	299	121	0	0	1370	0	648	2018
合計	9	1959	15950	306	0	343	22544	9	18566	41111

第31表　第８鋳造遺構群遺物計量表(2)



遺物

鋳造遺物は全て分類し計量を行った。その結果、鉄塊25981g、炉壁254702g、銅滓1159g、鉄滓264757g、木炭8658g、白色滓5708g、石19985g、鋳型41111g、土器2554g、羽口27382g、粘土塊1766gを計量した。遺物の大半は第1号鋳造土壙と第4号鋳造土壙の覆土中から出土したものである。特徴としては鋳型の殆どが第1鋳造土壙の梵鐘鋳型で占められる。廃滓からは梵鐘と仏具関連の容器鋳型を検出した。滓はやや緑色気味の滓やブルー色の滓、そして、緑青を吹く滓を検出した。この、銅滓と共に白色滓の検出が特徴である。

土器は1～7である。1・3は龍泉窯系の青磁碗、2は白磁碗、4は常滑系の鉢、5は常滑系の甕底部である。7は瀬戸の刷り絵をもつ皿である。

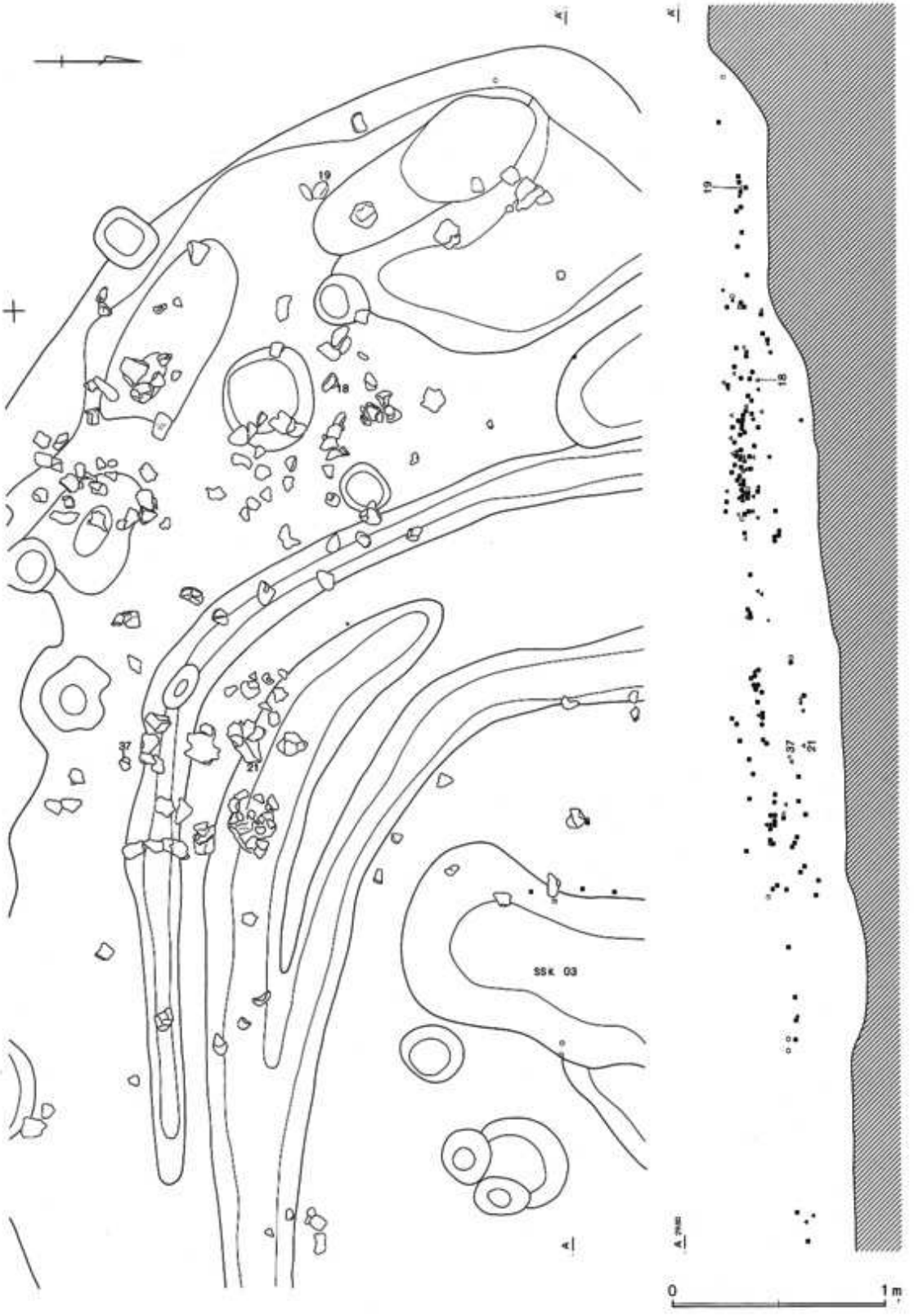
炉壁は8～15である。8は溶解面が黒色でやや鈍い色調である。炉壁粘土は還元され青灰色をしている。また、裏面は平滑であり砥石として炉壁片を転用している。このような使用方法は製品のバリ取りが考えられ、10・13・15の炉壁片の裏面にも同様の痕跡が見られる。9は溶解面が白色滓で覆われており微粒の緑青が吹く。10は溶解面が8と同様黒色でやや光沢をもち、赤茶色の付着物が認められる。11は、内面が溶解し、その面に点々と最大5㎜、多くは2㎜前後の緑青を吹いた青銅の粒が半分顔をのぞかせている炉壁片である。側面は全面破面。裏面も本来の厚さではなく、1㎝強の厚味にガラス化した内面と共に剝離した炉壁である。内面の色調は、黒色のガラス化した部分と、薄く紅色の酸化気味の部分からなる。裏面の非溶解の炉壁部分は、灰褐色に酸化し、砂粒を混じえる胎土である。ガラス質の表面には、1ケ所、長さ3㎝程の木炭痕が残る。なお、表面を丁寧に観察すると、直接は、緑青が見えていないが、青銅粒と推定される黒色の粒が点在する。本資料は、ガラス化した表面のたれ具合を見て上下方向で正置すると、平らな端部から内側に屈曲する壁となる。この屈曲面は、側面より見ると緩やかに円弧を描いており、その内壁は全体が黒色ガラス化している。つまり、本資料は、青銅用の溶解炉の、羽口を支えるカバー粘土から炉体にかけての、正面右側の部品であろうと推定される。裏面の非溶解の炉壁中にも1ケ所、緑青を吹いた粒子が見られる。表面の青銅粒子は、破面から見る限り、表面から3㎜内外に大多数が集中する。

羽口は16～37である。このうち33は鍛冶窯の羽口であるが、他はいずれも、溶解炉の羽口と考えられる。推定径3.7～20.6㎝まちまちの大きさのものを検出した。内面は送風を常に受けていたためか酸化状態であることが想定され赤褐色の粘土面を残す。外面は溶解炉内に突き出しているため、溶解物の付着が見られる。羽口端部は当初の整形された平坦面を残すものが多く、送風の影響も受け湯滓の付着は見られず、ざらざらした青灰色の細かな粒が一面に付き還元状態であることがわかる。

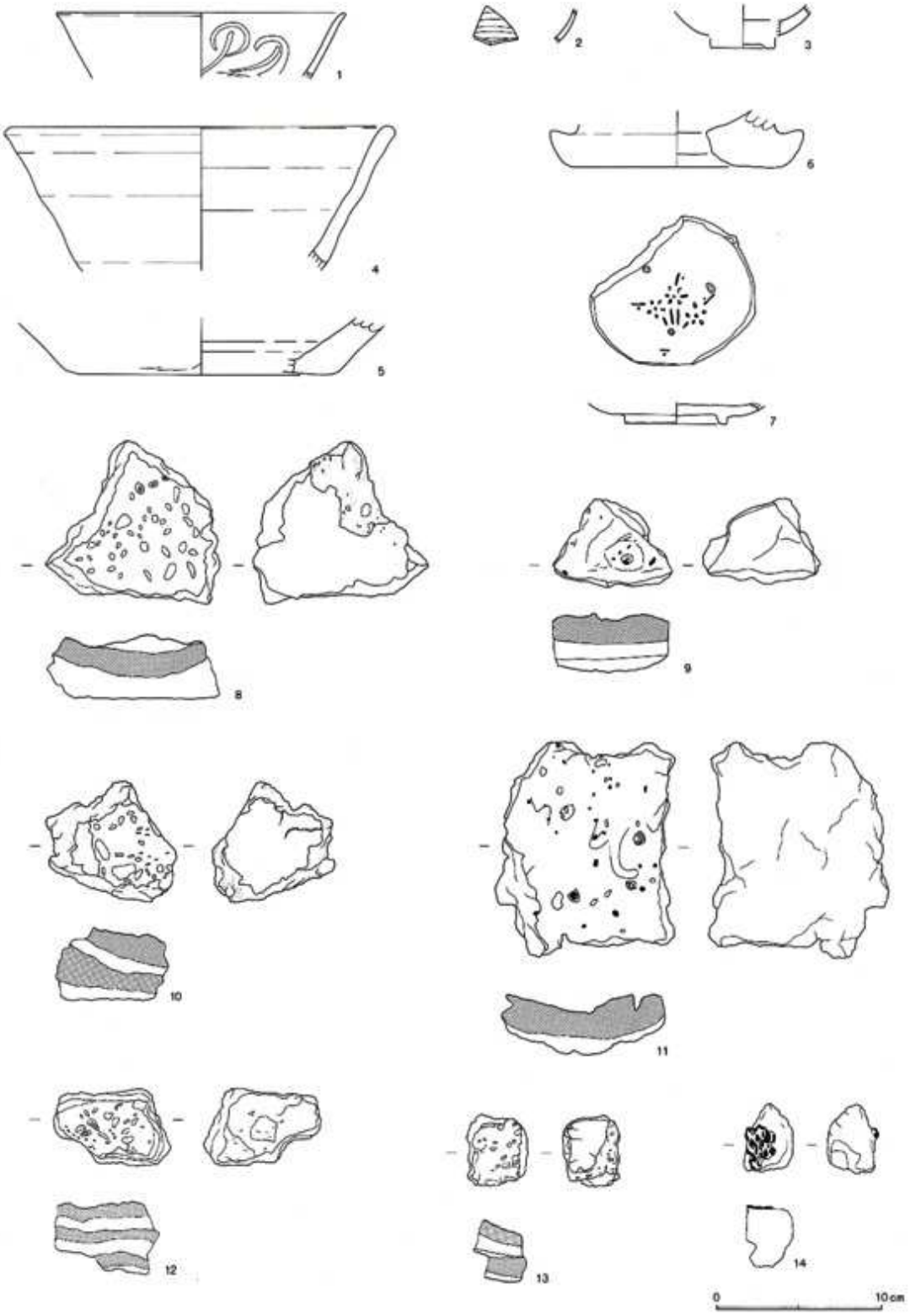
37は小型溶解炉の羽口部分と考えられ、溶解炉内に突き出した部分が湯滓で覆われふさがれた状態で検出した。

黒鉛化木炭は40・41である。

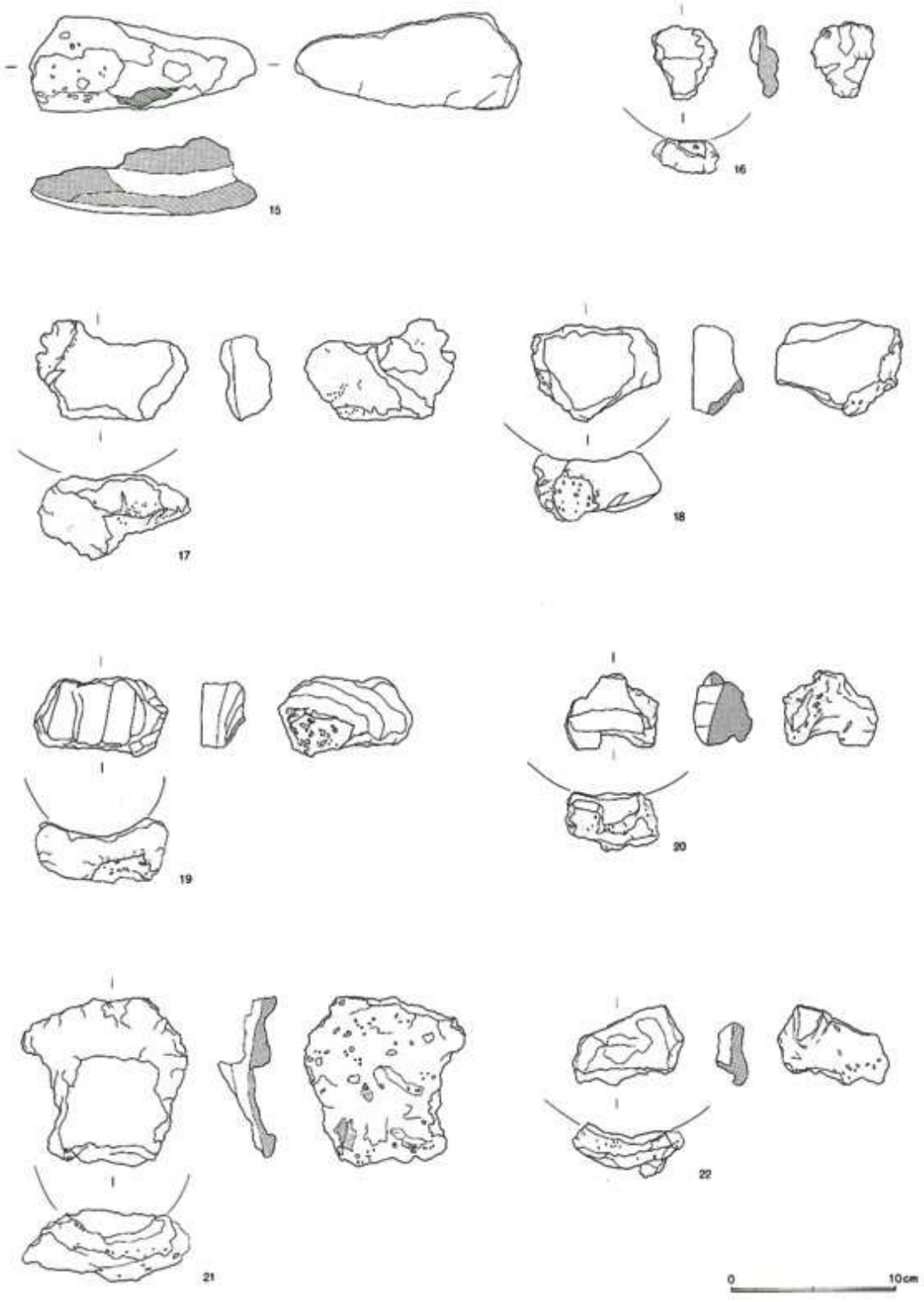
鋳型は42～92である。42・43は容器鋳型である。44～81は梵鐘鋳型であり、このうち、44～48は龍頭部分、49・50は乳部分、この他、縦・横帯の部分も検出した。82～84は仏具の容器鋳型で、82には上端には平坦な中子との合わせ部分をもつ。型は上下に二本の沈線をまわし中央には文様をめ



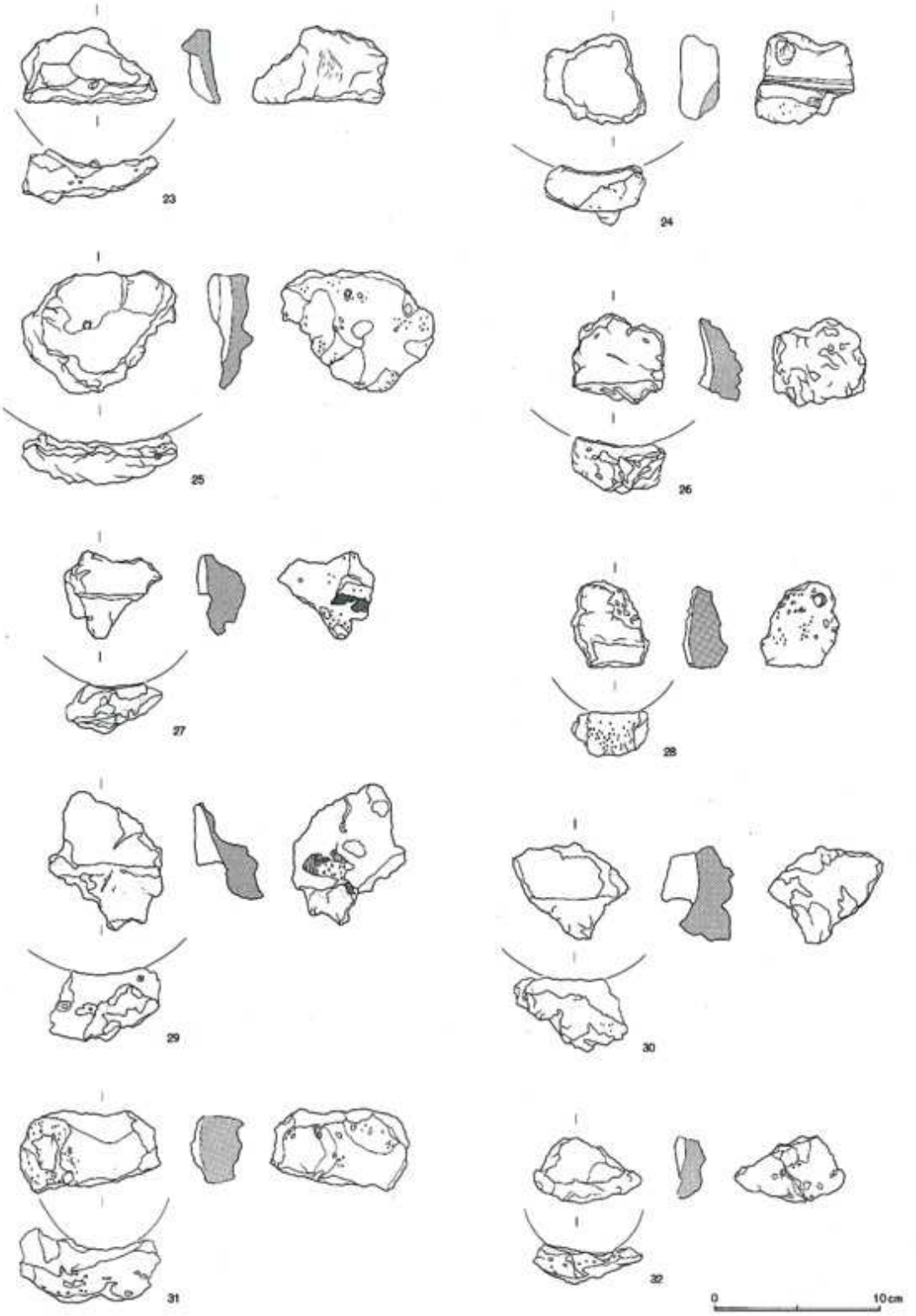
第276図　第8群第1・2・6・11・12号廃滓



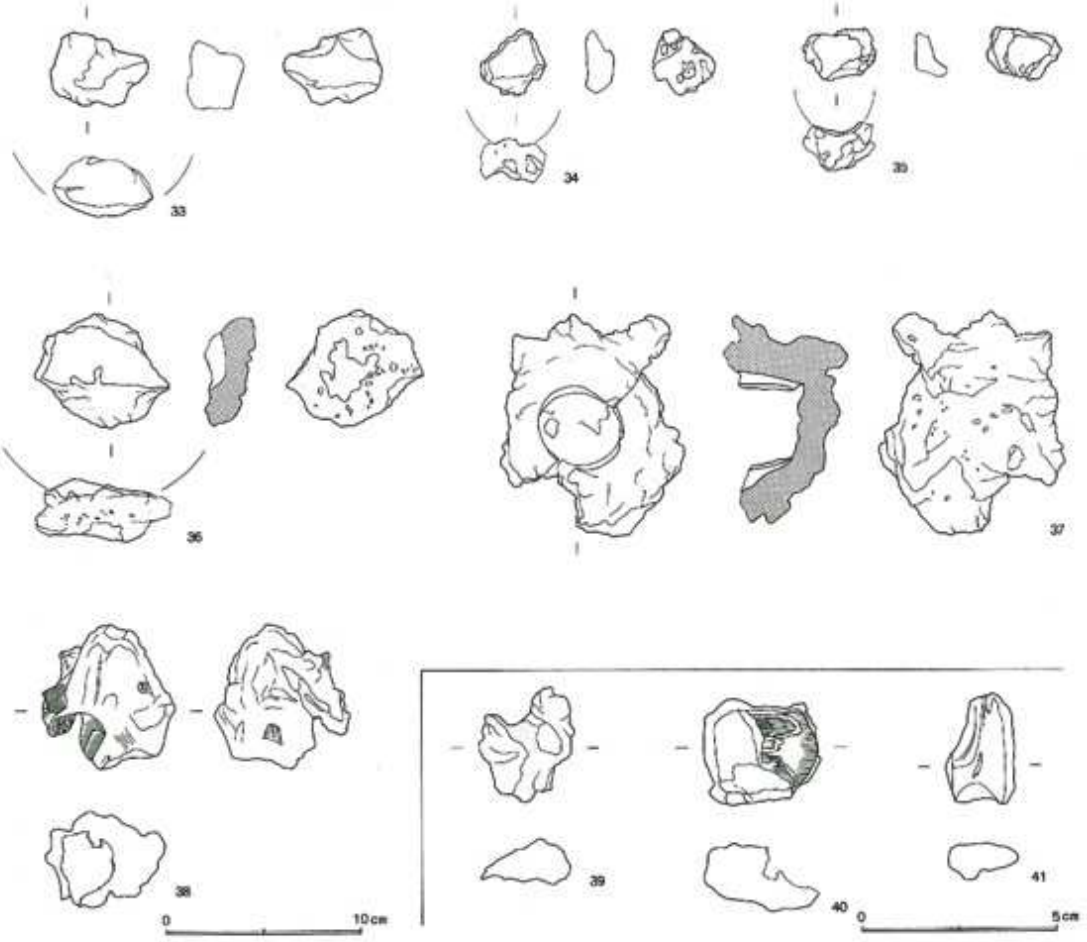
第277図　第８鋳造遺構群出土遺物(1)



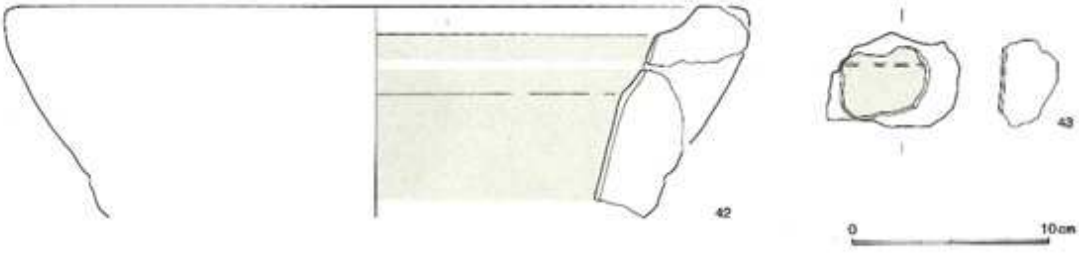
第278図　第８鋳造遺構群出土遺物(2)



第279図　第８鋳造遺構群出土遺物(3)



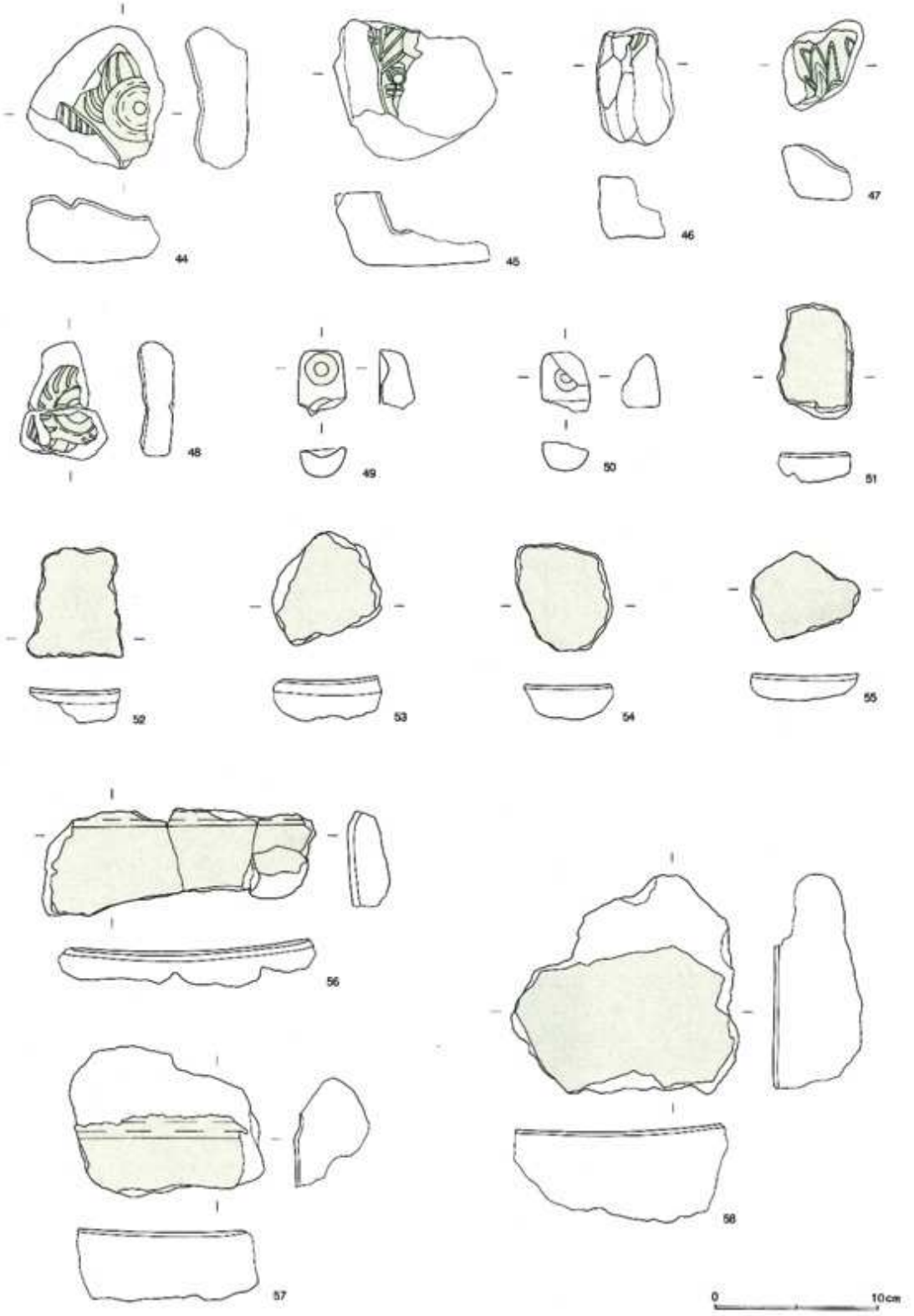
第280図　第８鋳造遺構群出土遺物(4)



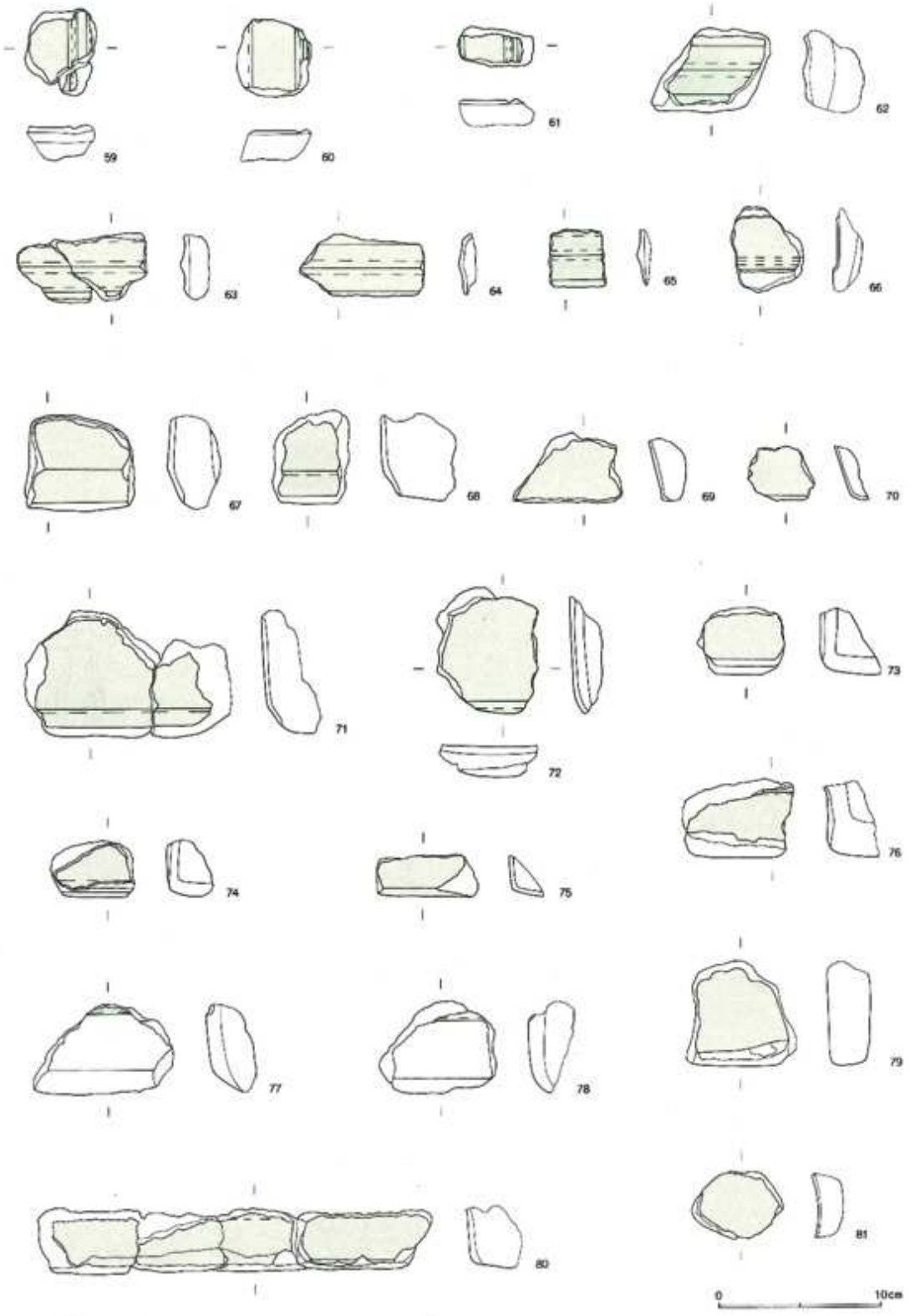
第281図　第８鋳造遺構群出土遺物(5)

ぐらしている。唐草文様の一部とも見られるが正確なところは不明である。83はやはり上端に平坦な中子との合わせ部分をもち、型の形態は外反して立ち上がり口唇部は直線的に上方に立つことから水瓶の口縁部分と見られる。85～88は獣脚鋳型であり、89・90は飾り金具の鋳型と見られる。

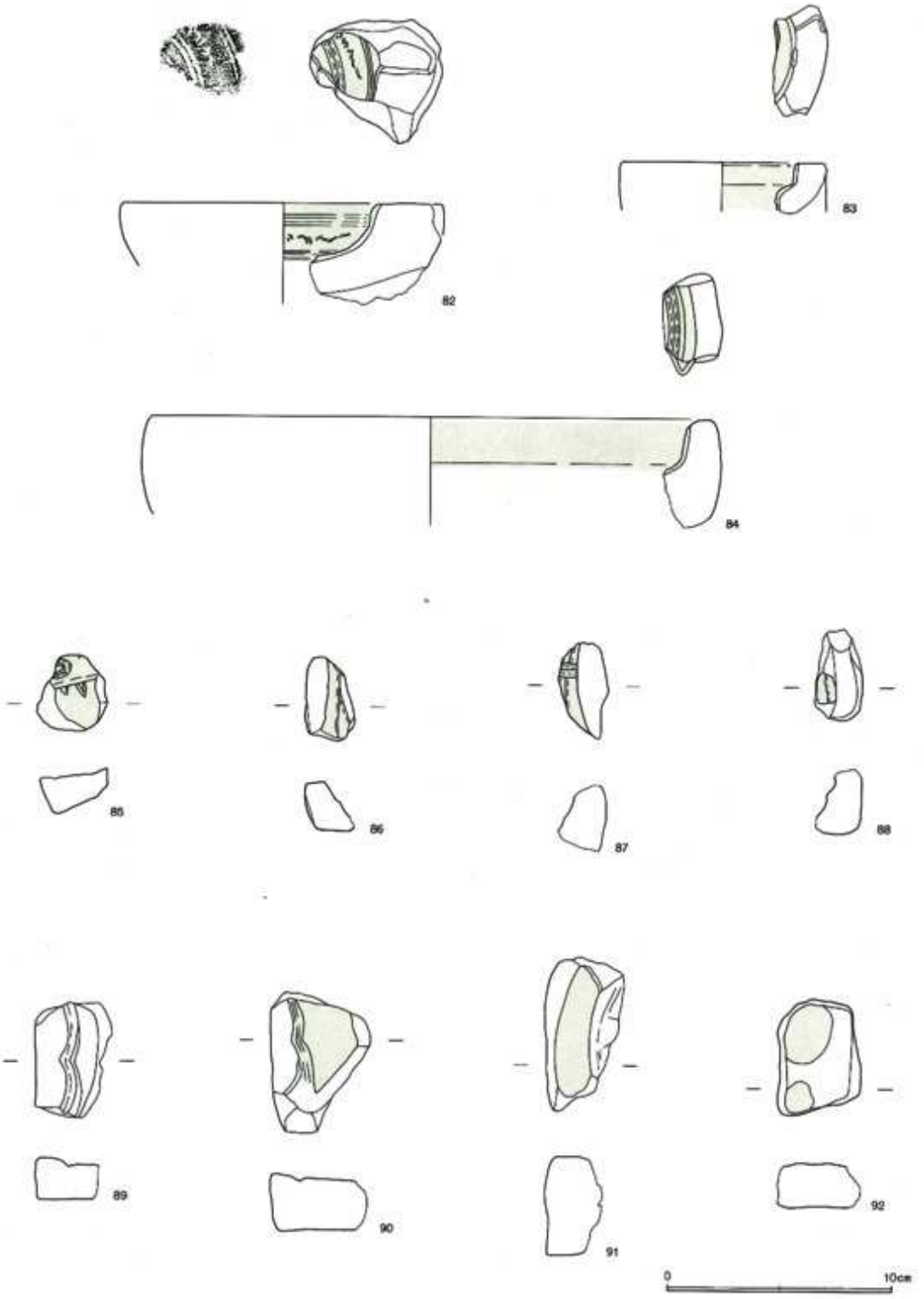
93は花びらの形態をした鉄製品である。94・95は銅塊である。94は側面４面が破面となる厚さ５㎜程のやや厚手の鋳造品の破片である。上下方向には直線状で、水平方向にゆるい弧を描くことか



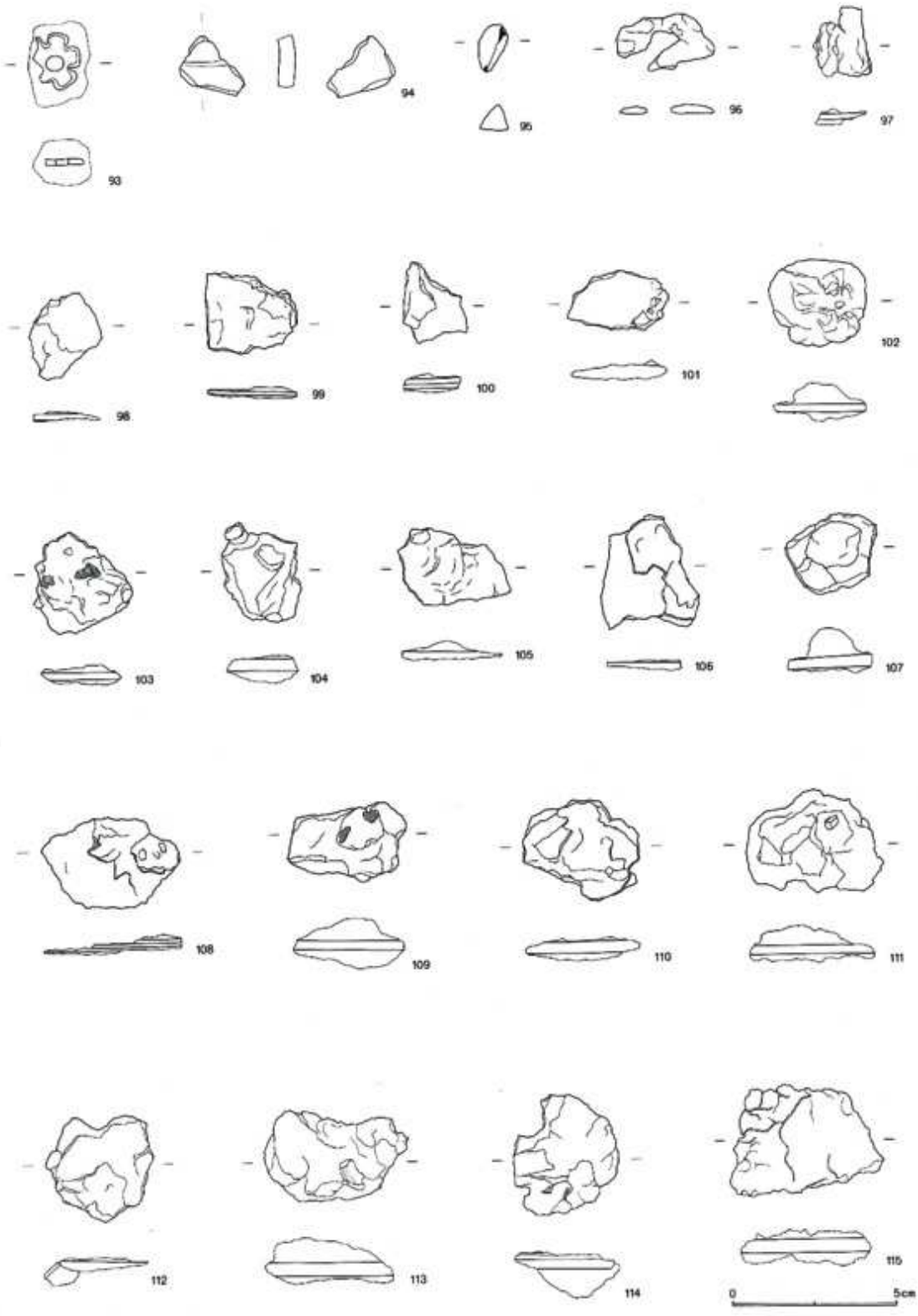
第282図　第８鋳造遺構群出土遺物(6)



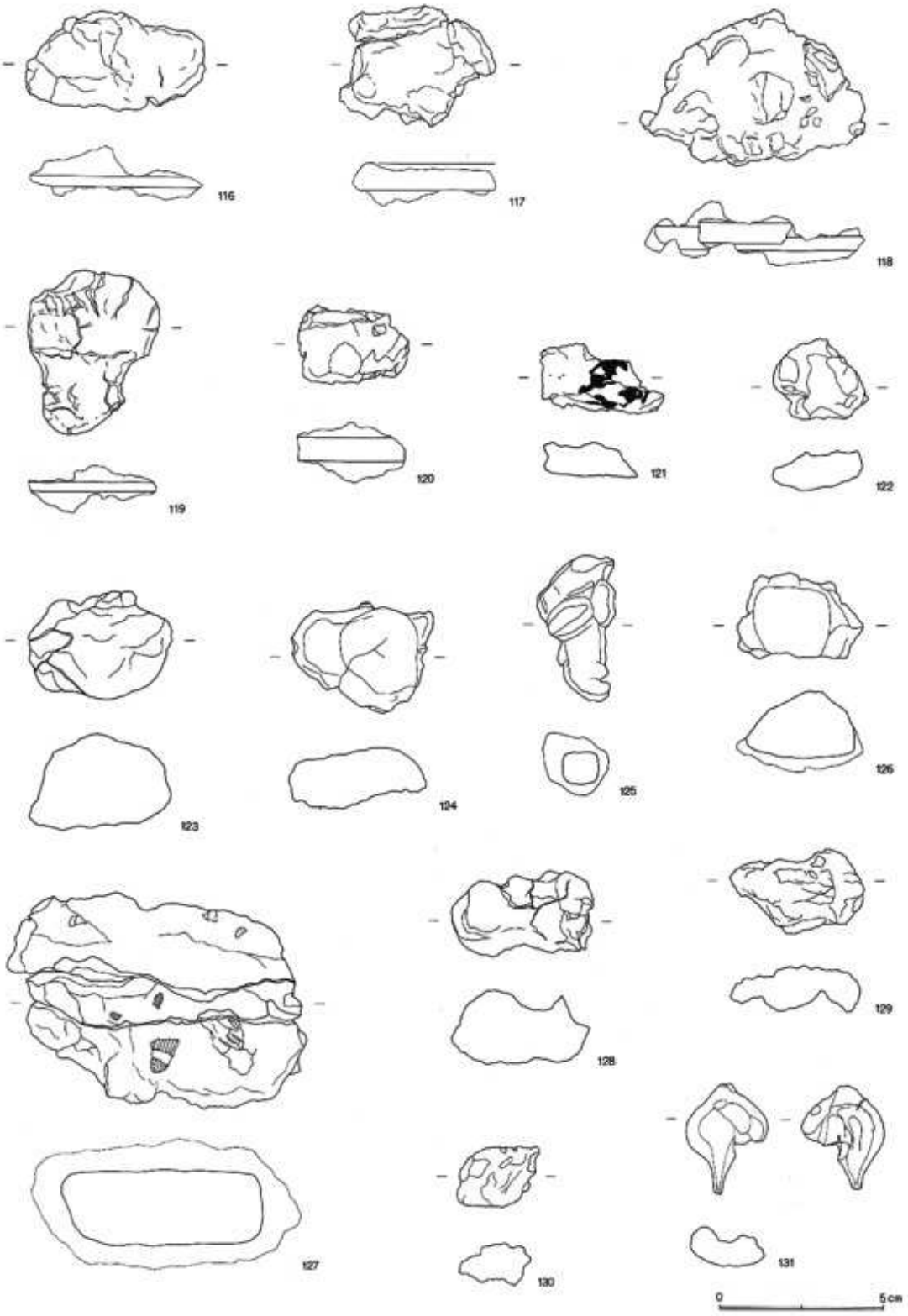
第283図　第８鋳造遺構群出土遺物(7)



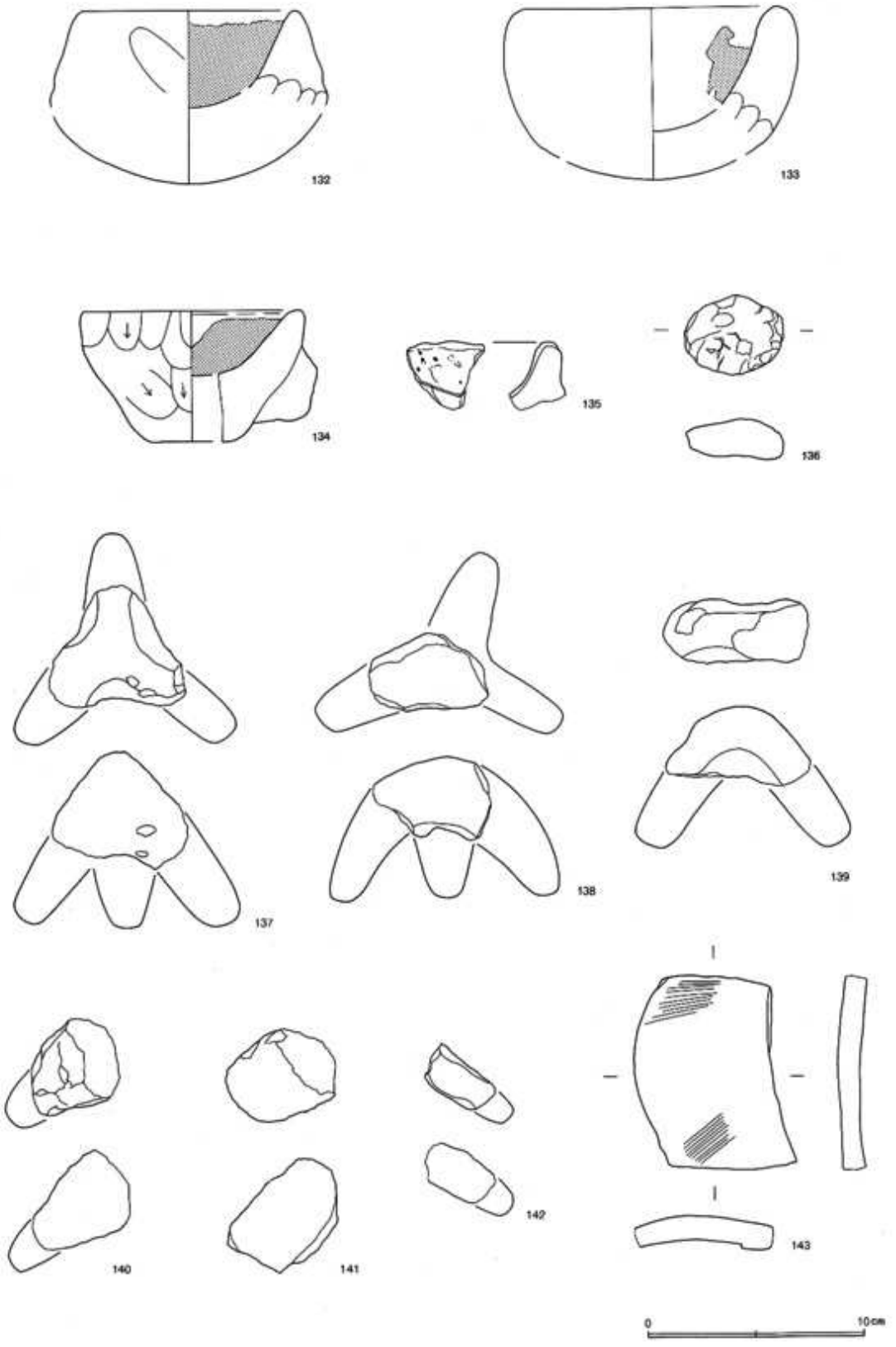
第284図　第８鋳造遺構群出土遺物(8)



第285図　第８鋳造遺構群出土遺物(9)



第286図　第８鋳造遺構群出土遺物(10)



第287図　第８鋳造遺構群出土遺物(11)

ら、容器の体部破片であろうと予想される。破面は、上面のみ中央が窪み、微細な気孔がある。又、内側と外側の0.6mm程が皮状にやや独立しており、上面のみにガスが介在したため、青銅の湯がまわらず、不良品となったものの可能性が強い。他の三つの破面は緻密でシャープに折れており、人工的な破断面の可能性があろう。表裏面とも荒れており、型の挽き目ははっきりしない。あえて言えば内面側にごく薄い横スジがある。色調は緑青部分は青い緑色、それ以外は灰黒色を呈する。部分的に褐色の酸化物がごく薄く付着している。

第288図　第8鋳造遺構群出土遺物(2)

銅滓は96・121・122・129～131が見られる。96は湯こぼれした銅滓と見られ全体が緑青で覆われている。121はコバルトグリーンの色調であり、122はコバルトブルーの色調をしている。129は重く鉛色の銀色であり表面は凹凸が見られる。130は小さいながらも重く、ダークグレイの色調である。131は下面に木炭痕をもつ流動状の緻密なガラス質滓である。最大の特色は、濃いコバルト色のガラス質滓という点である。木炭痕は長さ2.4cm。滓表面は風化してはがれ0.3mmほどの微細な気孔群がびっしりと現れている。滓の内側には気孔は少なく、3mm大のものが目立つ程度である。又、灰白色の石粒がまき込まれている。表面のところどころに褐色の鉄錆も点在する。

鉄塊は97～120、123～128である。

道具は132～143を検出した。132～135はトリベで、素材は粘土で砂粒子を混在させる。手づくねによる整形で、器肉の厚い椀形をし、134は柄が取りつけられていたのか体部外面の粘土横方向に突出している。色調は素焼きされた赤褐色である。内面には厚さ1mm程の溶解物の付着が見られる。137～142は三叉状土製品である。143は須恵器甕の破片であるが破面が平滑であり砥石として転用されたと考えられる。

古銭は144の北宋銭を検出した。上半分の検出であるが、熙寧元寶（1068年）と見られる。

第8群出土遺物観察表　（第277～288図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他	産　地
1	青磁碗	17.6	3.9		I	A	深緑色	10%	Q-13-b№2Q-13-b-6椀I2~3	中国
2	白磁椀				I	A	乳白色	10%	Q－13－g－4　白磁Ⅸ	中国
3	青磁碗		2.6	3.9	I	A	緑色	5%	Q－13－c－2　椀Ⅰ1～4	中国・龍泉
4	片口鉢	23.2	8.7		CDH	B	灰色	10%	Q－11　Pit33	常滑
5	甕		3.5	16.4	D	B	灰褐色	20%	SSK1№22	常滑
6	擂鉢		3.4	12.6	CDE	B	褐色	30%	P－13－o－9	在地
7	灰釉皿		1,2	6.2	D	A	淡緑色	80%	Q－13－b－1	瀬戸・美濃

第8群出土鋳造遺物観察表　（第277～288図）

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重　さ	他の測値	備　考	分　類
8	炉壁	9.2	10.6	3.5	240		Q－13－h－5	炉2
9	炉壁	5.2	7.1	3.0	96		Q－13－b－6	炉4

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
10	炉壁	6.9	7.0	4.0	147		Q－13－h－4	炉1
11	炉壁	11.2	10.0	2.5	333		Q－14－e－7　分析資料№10	炉4
12	炉壁	4.2	6.3	4.0	90		Q－13－1－7	炉1
13	炉壁	4.1	3.3	3.2	39		Q－13－h－6	炉1
14	炉壁	4.3	3.0	3.5	36		Q－14－a－7	炉4
15	炉壁	5.4	13.8	4.5	215		Q－13－g－9	炉2
16	羽口	4.3	3.6	1.6	15	直径（9.2）	Q－13－e－6	羽口
17	羽口	6.0	9.2	2.5	118	直径（15.2）	第1号廃滓	羽口
18	羽口	5.8	7.7	2.5	115	直径（12.8）	第1号廃滓№70	羽口
19	羽口	4.2	8.0	2.7	101	直径（8.4）	第1号廃滓№61	羽口
20	羽口	3.3	5.5	3.3	48	直径（14.6）	第3号廃滓	羽口
21	羽口	9.8	9.5	3.1	170	直径（9.4）	第13号廃滓№2	羽口
22	羽口	3.7	6.0	1.5	42	直径（14.4）	第3号廃滓	羽口
23	羽口	4.6	12.4	1.5	54	直径（10.0）	Q－13－b－7	羽口
24	羽口	5.4	5.4	2.3	63	直径（16.4）	Q－13－c－5	羽口
25	羽口	7.1	9.1	2.4	116	直径（20.6）	Q－13－g－2	羽口
26	羽口	5.0	5.5	2.2	55	直径（15.2）	Q－13－e－6	羽口
27	羽口	5.0	5.9	2.9	36	直径（11.0）	Q－14－e－7	羽口
28	羽口	4.9	4.3	2.2	32	直径（4.1）	Q－14－e－7	羽口
29	羽口	7.2	6.8	11.0	92	直径（14.0）	Q－13－f－9	羽口
30	羽口	5.8	6.5	4.2	78	直径（13.4）	Q－13－f－9	羽口
31	羽口	4.1	8.3	3.2	94	直径（7.6）	Q－13－f	羽口
32	羽口	3.9	6.5	1.5	29	直径（7.4）	Q－13－f－6	羽口
33	羽口　鍛冶	3.3	5.0	2.7	35	外径（9.6）	Q－13－f－1	羽口
34	羽口	3.1	3.2	1.4	10	直径（4.7）	Q－13－g－5	羽口
35	羽口	2.3	3.7	1.5	0.8	直径（3.7）	Q－13－1－6	羽口
36	羽口	5.5	6.2	2.3	68	直径（12.2）	Q－13－1－6	羽口
37	羽口	10.7	8.5	6.2	270	直径（4.6）	第13号廃滓№6	羽口
38	木炭	7.3	6.8	4.9	132		Q－13－f－9　分析資料№23	木炭
39	鉄滓	2.5	1.0	1.0	3		Q－13－f－6	他の滓
40	黒鉛化木炭	2.7	2.9	1.6	10		Q－13－c－8	木炭
41	黒鉛化木炭	2.8	1.7	0.9	5		Q－13－f－1	木炭
42	鍋			3.7	210	内径16.4器高10.7	第1号廃滓Q-13-f-4　Q-13-h№13	鋳型
43	容器	4.5	6.2	2.8	90		第7号廃滓	鋳型
44	梵鐘　龍頭	7.0	5.6	3.0	210	宝珠径3.9	ＳＳＫ１№107	鋳型
45	梵鐘　龍頭	5.2	3.7	4.5	195		ＳＳＫ１№57	鋳型
46	梵鐘　龍頭	7.1	4.2	3.2	82		ＳＳＫ１	鋳型
47	梵鐘　龍頭	4.3	4.3	3.0	60		ＳＳＫ１	鋳型
48	梵鐘　龍頭	5.0	2.4	2.1	60		第3号廃滓	鋳型
49	梵鐘　乳	3.6	2.8	1.7	20		Q－14－e－7	鋳型
50	梵鐘　乳	3.3	2.8	1.7	20		焼土塊集中区	鋳型
51	梵鐘　縦帯	6.0	4.3	1.8	58		ＳＳＫ１№80	鋳型
52	梵鐘	6.5	5.4	2.0	65		ＳＳＫ１	鋳型
53	梵鐘	6.3	5.7	2.5	85		ＳＳＫ１	鋳型
54	梵鐘	11.2	5.2	2.1	64		ＳＳＫ１	鋳型
55	梵鐘	5.2	6.5	1.5	41		ＳＳＫ１	鋳型
56	梵鐘　横帯	15.0	5.7	2.5	200		ＳＳＫ１№68,83	鋳型
51	梵鐘　縦帯	6.0	4.3	1.8	58		ＳＳＫ１№80	鋳型
52	梵鐘	6.5	5.4	2.0	65		ＳＳＫ１	鋳型

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
53	梵鐘	6.3	5.7	2.5	85		SSK1	鋳型
54	梵鐘	11.2	5.2	2.1	64		SSK1	鋳型
55	梵鐘	5.2	6.5	1.5	41		SSK1	鋳型
56	梵鐘　横帯	15.0	5.7	2.5	200		SSK1 №68,83	鋳型
57	梵鐘　横帯	4.5	9.8	4.3	372		SSK1	鋳型
58	梵鐘	8.4	12.7	5.8	775		SSK1 №94	鋳型
59	梵鐘　縦帯	3.8	3.7	2.1	37		SSK1	鋳型
60	梵鐘　縦帯	4.2	3.7	1.7	34	帯間2.1	SSK1	鋳型
61	梵鐘　縦帯	1.7	3.8	1.6	20		SSK1 №98	鋳型
62	梵鐘　横帯	3.9	4.4	3.6	101		SSK1	鋳型
63	梵鐘　横帯	3.5	7.5	1.7	49		SSK1	鋳型
64	梵鐘　横帯	3.1	7.4	1.1	30		SSK1	鋳型
65	梵鐘　横帯	3.4	3.3	0.8	10		SSK1 Q－14－a－7	鋳型
66	梵鐘　横帯	3.2	3.8	1.5	30		SSK1	鋳型
67	梵鐘	5.0	5.8	3.2	11		SSK1	鋳型
68	梵鐘	4.5	3.5	4.3	107		SSK1 №106	鋳型
69	梵鐘	3.5	5.6	1.8	44		SSK1	鋳型
70	梵鐘	3.3	3.7	1.1	19		SSK1	鋳型
71	梵鐘	6.6	9.6	2.7	250		SSK1 №101, 104	鋳型
72	梵鐘	7.0	6.0	2.1	80		SSK1 №84	鋳型
73	梵鐘	2.8	5.0	2.7	60		SSK1	鋳型
74	梵鐘	2.2	4.4	2.4	40		SSK1	鋳型
75	梵鐘	2.4	5.1	1.5	25		SSK1 Q－13－h－2	鋳型
76	梵鐘	3.0	5.8	2.8	101		SSK1 №69	鋳型
77	梵鐘	3.9	6.8	2.8	100		SSK1	鋳型
78	梵鐘	9.7	5.9	2.5	73		SSK1 №10	鋳型
79	仏具　合わせ	5.5	5.2	2.5	120		SSK1 N0.109	鋳型
80	梵鐘	3.0	23.1	3.2	304		SSK1 Q－14－a－4	鋳型
81	梵鐘　笠形	3.8	4.8	1.6	31		SSK1	鋳型
82	容器				90	口径8.1　器高4.5	焼土塊集中区	鋳型
83	仏具　花瓶				20	口径6.4　器高2.1	Q－13－d－5	鋳型
84	容器				42	口径22.9　器高4.9	SSK1 Q－13－d－9	鋳型
85	獣脚	3.4	3.1	2.9	12			鋳型
86	獣脚	3.8	2.0	2.2	15		SSK1 Q－13－d－5	鋳型
87	獣脚	4.4	2.2	2.9	18		SSK1	鋳型
88	獣脚	4.1	2.1	2.9	20		Q－13－f－3	鋳型
89	仏具　磬	5.0	2.9	1.9	37		SSK1	鋳型
90	仏具　磬	6.2	4.5	2.5	65		SSK1	鋳型
91	不明	6.7	3.3	4.4	100		第1号廃滓	鋳型
92	仏具　合わせ	5.0	3.7	2.0	43		SSK1	鋳型
93	鉄製品	2.5	1.9	1.4	12		Q－14－1	塊1
94	銅塊	2.0	1.4	0.5	5.3		第15号廃滓　分析資料№29	銅1
95	銅塊	1.4	0.9	0.7	1.6		Q－13－d－9	銅1
96	銅滓	1.6	2.9	0.2	3.2		Q－13－b－6	銅1
97	鉄塊系遺物	2.1	1.6	0.2	1.5		焼土塊集中区	塊2
98	鉄塊系遺物	2.4	2.2	0.2	1.6		第6号廃滓	塊2
99	鉄塊系遺物	2.4	2.7	0.1	3.8		第1号廃滓　Q－13－f－4	塊2
100	鉄塊系遺物	2.4	1.9	0.3	3.0		Q－14－e－9	塊2
101	鉄塊系遺物	1.8	2.9	0.4	3.6		Q－13－g－9	塊1

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
102	鉄塊系遺物	2.6	2.9	0.2	9.5		第2号廃滓	塊2
103	鉄塊系遺物	3.0	2.9	0.2	6.5		第6号廃滓	塊2
104	鉄塊系遺物	2.7	2.3	0.3	12.6		Q－13－g－9	塊1
105	鉄塊系遺物	2.3	3.1	0.2	4.6		第2号廃滓	塊2
106	鉄塊系遺物	3.1	3.0	0.2	4.8		Q－13－f－5	塊2
107	鉄塊系遺物	2.4	2.6	0.4	13.1		第2号廃滓	塊1
108	鉄塊系遺物	2.7	4.2	0.5	4.9		第1号廃滓　Q－13－e－9	塊2
109	鉄塊系遺物	2.2	3.3	0.3	11.6		Q－13－b－9	塊1
110	鉄塊系遺物	3.0	3.5	0.4	9.9		第1号炉	塊2
111	鉄塊系遺物	3.1	4.1	0.2	15.2		SSK1	塊2
112	鉄塊系遺物	2.9	3.2	0.3	7.2		Q－13－d	塊2
113	鉄塊系遺物	2.7	4.3	0.4	14.0		Q－13－c－6	塊2
114	鉄塊系遺物	3.6	3.2	1.3	14.6		Q－14－e－7	滓2
115	鉄塊系遺物	3.2	4.4	0.4	22.5		第1号廃滓	塊2
116	鉄塊系遺物	2.9	5.4	0.3	20.4		Q－13－e－9	塊2
117	鉄塊系遺物	3.6	4.3	0.8	23.8		SSK1	塊1
118	鉄塊系遺物	4.5	6.8	0.7	47.8		Q－13－c－6	塊2
119	鉄塊系遺物	4.9	3.9	0.3	23.1		Q－13－g－9	塊2
120	鉄塊系遺物	2.3	3.4	0.7	21.9		第2号廃滓	塊1
121	銅滓	1.9	3.7	1.0	7.0		Q－13－c－7	銅2
122	銅滓	2.4	2.7	1.0	9.4		Q－13－c－3　胎土分析№27	銅1
123	鉄塊系遺物	3.3	4.3		70.1		Q－13－c－3	塊1
124	鉄塊系遺物	3.2	4.1	1.6	40		SSK1	塊1
125	鉄塊系遺物	4.4	2.3	2.0	27		Q－13－k	塊1
126	鉄塊系遺物	2.4	3.8	2.3	35		Q－13－f	塊1
127	鉄塊系遺物	6.2	8.6	2.3	255.2		Q－13－f－7	塊1
128	鉄塊系遺物	2.4	4.1		30.2		Q－13－e	塊1
129	銅滓	2.3	4.0	1.2	19.4		Q－13－c－9	他の滓
130	銅滓	1.8	2.2	1.1	12.2		Q－14－e－5	銅2
131	銅滓	3.1	2.5	0.7	5.9		Q－13－b－7　分析資料№19	他の滓
132	トリベ				65	口径9.5 器高(8.0)	Q－13－d－4　残存率10%	土器
133	トリベ				105	口径11.4 器高(8.0)	Q－13－d　残存率20%	土器
134	トリベ				11	口径10.2 器高(6.0)	Q－13－d－7　残存率20%	土器
135	ルツボ				12	口径10.4 器高2.4	焼土塊集中区　分析資料№39	土器
136	円盤状土製品	3.7	4.6	1.7	25	口径10.4 器高2.4	Q－13－k－3	土器
137	三叉状土製品			4.3	98		焼土塊集中区	土器
138	三叉状土製品			2.7	42		Q－14－e－9	土器
139	三叉状土製品			3.2	55		Q－14－e－7	土器
140	三叉状土製品			3.6	50		Q－14－a	土器
141	三叉状土製品			3.8	70		Q－14－e－7	土器
142	三叉状土製品			1.7	5		Q－14－e－9	土器
143	砥石	8.9	6.4	1.1	95		SSK1	石

第32表　第8鋳造遺構群一覧表　　（単位　m）

新番号	旧番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向
SS－08　SSK01	SS－08　SK03	Q－13－h	方形	3.43	3.21	1.00	N－63°－E
SSK02	SK04	Q－13－k	円形	0.67		0.10	N－85°－W
SSK03	SK05	Q－13－g	楕円形	1.95	0.83	0.10	N－22°－E
SSK04	第1号廃滓	Q－13－b	方形	6.50	6.40	0.48	N－90°－E

新　番　号	旧　番　号	位　　置	形　態	長　軸	短　軸	深　さ	主軸方向
ＳＳ08－第１号炉	ＳＳ08－１号炉	Ｑ－13－ｂ	円　形	0.47		0.08	
第２号炉	２号炉	Ｑ－13－ｂ	円　形	0.32			
第１号廃滓	第１廃滓	Ｑ－13－ｅ					
第２号廃滓	第２廃滓	Ｑ－13－ｇ					
第３号廃滓	第３廃滓	Ｑ－13－ｉ					
第４号廃滓	第４廃滓	Ｑ－13－ｈ					
第５号廃滓	第５廃滓	Ｑ－13－ｄ					
第６号廃滓	第６廃滓	Ｑ－13－ｆ					
第７号廃滓	第７廃滓	Ｑ－13－ｆ					
第８号廃滓	第８廃滓	Ｑ－13－ｂ					
第９号廃滓	第９廃滓	Ｑ－13－ｃ					
第10号廃滓	第10廃滓						
第11号廃滓	第11廃滓	Ｑ－13－ｆ					
第12号廃滓	第12廃滓	Ｑ－13－ｇ					
第13号廃滓	第13廃滓						
第14号廃滓	第１鋳込み	Ｑ－13－ｆ					
第15号廃滓	第２鋳込み	Ｑ－13－ｇ					
第16号廃滓	第４鋳込み	Ｑ－13－ｇ					
第17号廃滓	第５鋳込み	Ｑ－13－ｇ					
第18号廃滓	第６鋳込み	Ｑ－13－ｇ					
第19号廃滓	第７鋳込み	Ｑ－13－ｆ					
第20号廃滓	第８鋳込み	Ｑ－13－ｆ					
第21号廃滓	第９鋳込み	Ｑ－13－ｆ					
炉体１号	第１炉壁	Ｑ－13－ｇ					
焼土塊集中区	焼土塊集中区	Ｑ－13－ｆ					
円形還元状遺構	円形還元状遺構	Ｑ－13－ｃ	円　形	1.10			

ｅ　第９鋳造遺構群

本群は第５・８鋳造遺構群の北側に位置する。東側緩斜面の肩部に当たるが、地山は砂利混じりのローム土と成り、これまで南側に存在していた二段の斜面がこのあたりで一つになる地形的な特徴をもつ。本群は第１・２号廃滓で構成され、鋳造土壙を伴わず、斜面部の堆積層の最上面にて検出された。出土遺物は鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鋳型、土器、羽口等の鋳造遺物を検出した。溶解および廃滓遺物が多く、鋳型は少量である。この中に、第５号鋳造遺構群で検出された梵鐘の乳鋳型が本遺構群からも検出された。しかも、接合関係が見られ。このことから第９鋳造遺構群は第８鋳造遺構群で製作された梵鐘を第５鋳造遺構群で鋳込み型ばらしされ、この時の廃滓を捨てる場所の一つとして第９鋳造遺構群が形成されたものと考えられる。

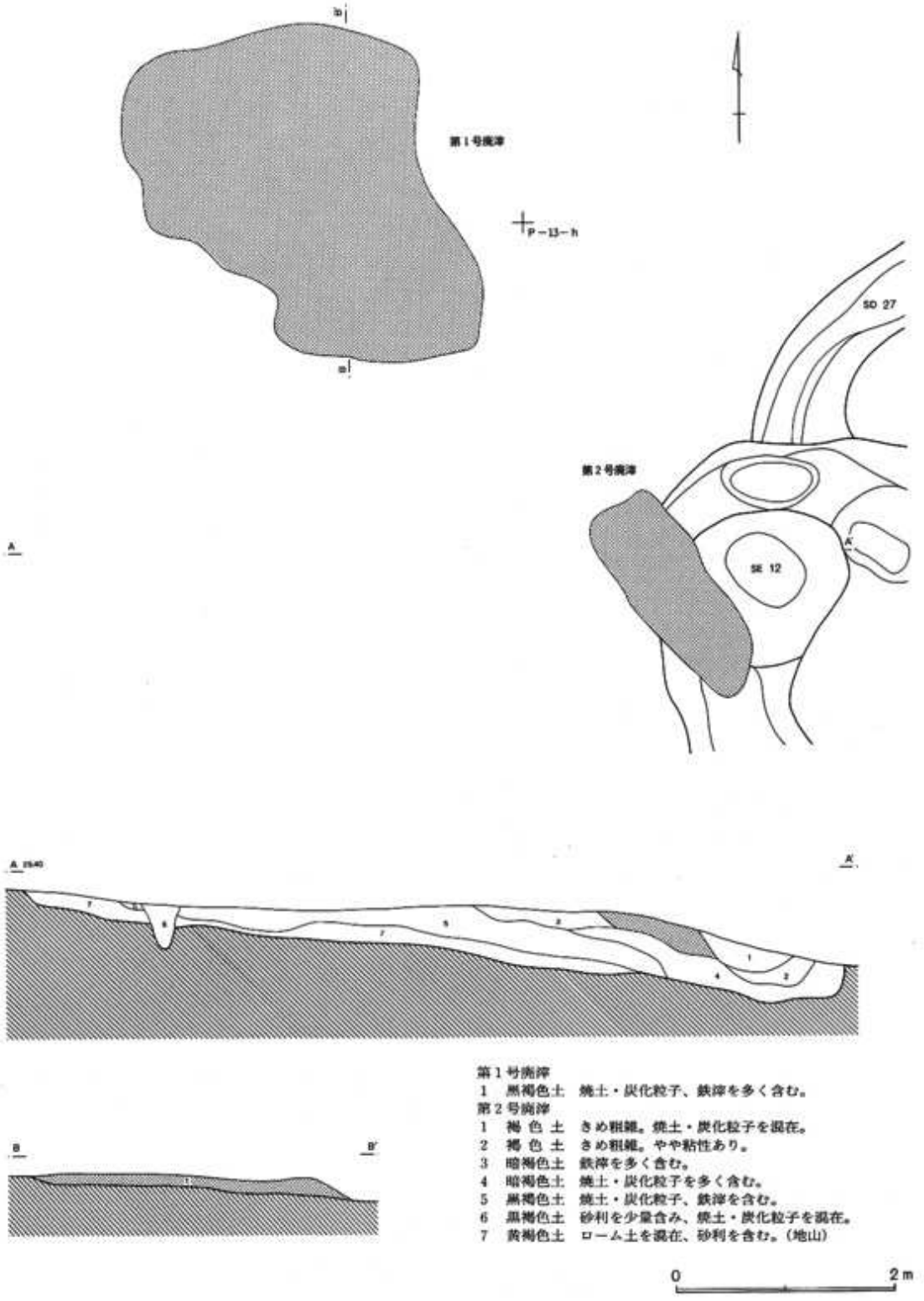
遺構

第１号廃滓（第289図）

第１号廃滓は南北3.00m、東西2.60m の範囲に10cmほどの堆積層をもって鋳造遺物を検出した。出土遺物は炉壁12570g、滓16519g と他の遺物に比べ圧倒的に多い。鋳型は少量である。

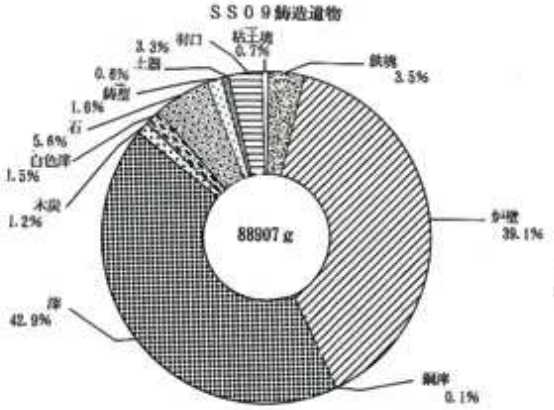
第２号廃滓（第289図）

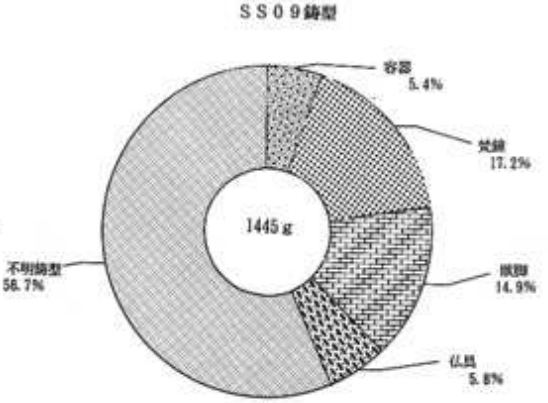
第２号廃滓は第１号廃滓の南東２m の位置に検出した。第５号鋳造遺構群のほぼ直上にあたる。遺物はグリッドで取り上げ第２号廃滓として区別できないが構成要素は第１号廃滓と同じである。



第289図　第9鋳造遺構群全体図

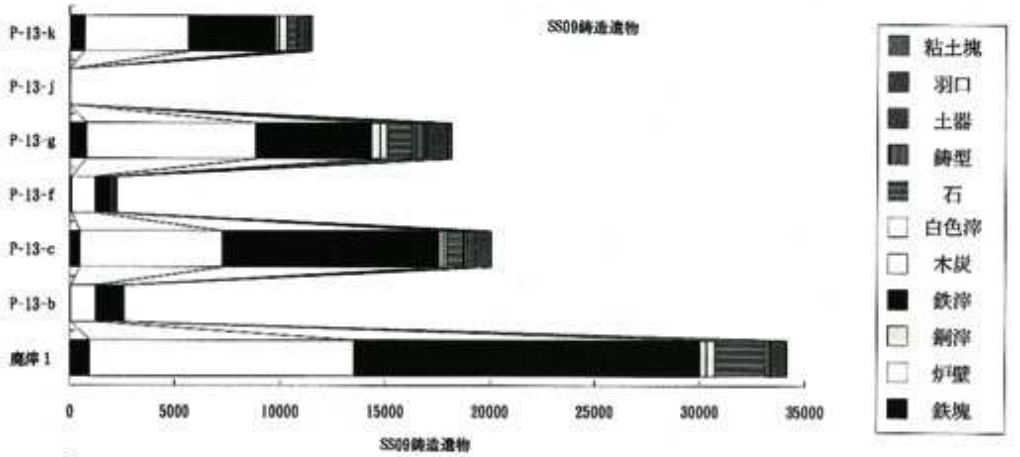
第33表　第９鋳造遺構群遺物計量表(1)

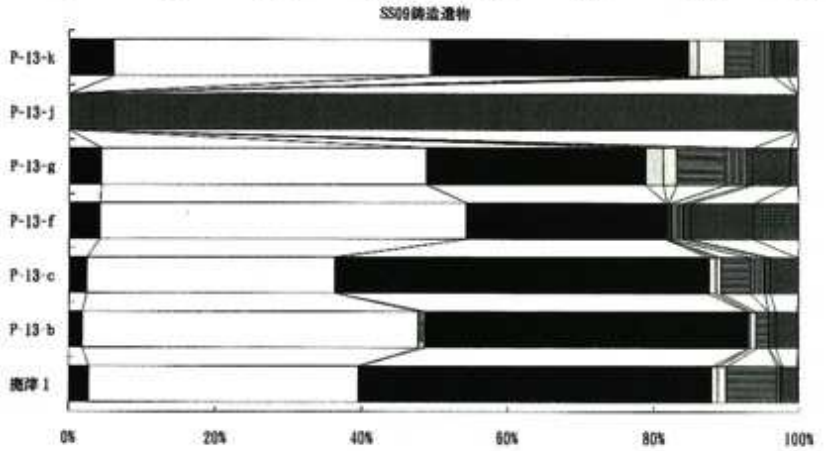




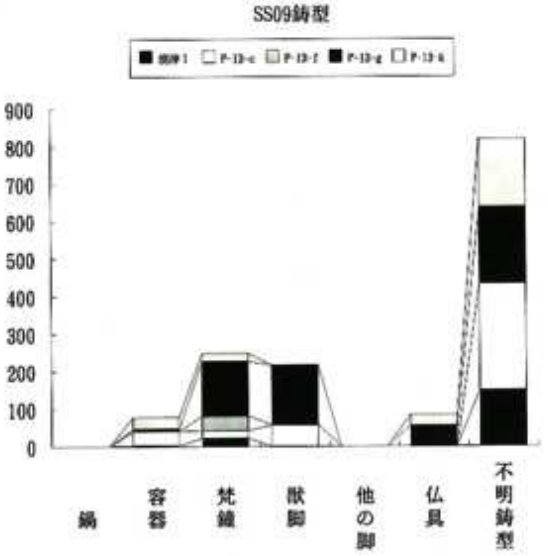
小番号	鉄　塊	炉　壁	銅滓	鉄滓	木炭	白色滓	石	鋳型	土器	羽口	粘土塊
廃滓１	948	12570	12	16519	304	376	2421	174	88	701	66
P-13-b	49	1204	22	1162	8	22	47	0	26	77	6
P-13-c	486	6806	24	10281	188	141	824	399	158	782	2
P-13-f	96	1135	0	621	3	4	7	39	20	200	140
P-13-g	804	8083	14	5467	433	338	1186	569	139	968	195
P-13-j	0	0	0	0	0	0	0	0	9	0	0
P-13-k	710	4987	29	4060	164	415	470	264	49	225	171
合計	3093	34785	101	38110	1100	1296	4955	1445	489	2953	580

小番号	鍋	容器	梵鐘	獣脚	他の脚	仏具	不明鋳型	日用品小計	仏具小計	鋳型合計
廃滓１	0	3	22	0	0	0	149	0	25	174
P-13-c	0	38	20	57	0	0	284	0	115	399
P-13-f	0	0	39	0	0	0	0	0	39	39
P-13-g	0	6	145	159	0	55	204	0	365	569
P-13-k	0	31	22	0	0	29	182	0	82	264
合計	0	78	248	216	0	84	819	0	626	1445





第34表　第９鋳造遺構群遺物計量表(2)



遺物

鋳造遺物は全て分類し計量を行った。その結果、鉄塊3093g、炉壁34785g、銅滓101g、鉄滓38110g、木炭1100g、白色滓1296g、石4955g、鋳型1445g、土器489g、羽口2953g、粘土塊580g を計量した。遺物は炉壁と滓が多く本遺構群が廃滓場としての性格であることがわかる。このことは本遺構出土の鋳造遺物組成が廃滓場を特徴づける良好な基準資料として摑むことができる。

羽口は１・２である。１は推定口径7.5cmであるが、内面にやや歪みをもつ。２は羽口端部の破片である。

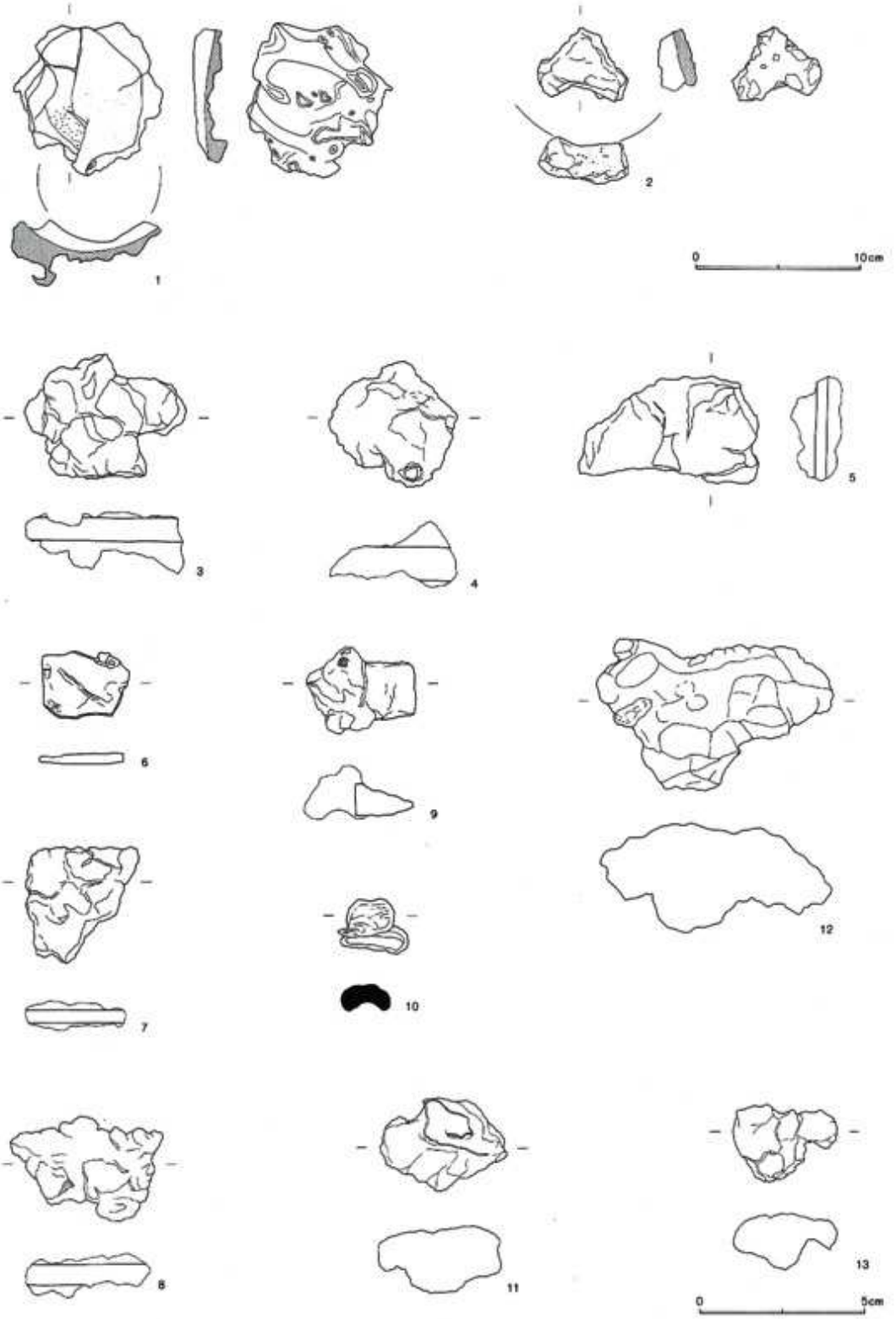
鉄塊は３～９・10～13である。３～８は鋳鉄製品の破片と見られる。11～13は鉄塊である。10は湯こぼれした銅塊と見られ、小粒ながら重く全体が緑青で覆われている。

鋳型は14～23である。14は小仏像の背面上半身であり、頭部から胸部にかけて残存する。残存長6.7cm、幅4.9cm、厚さ1.5cmである。素材は粘土による。形態から菩薩立像と考えられ、宝髪を結い天衣を左肩から右腰にかけている。器面は赤茶色に還元され鋳込まれたものと見られる。周縁の合わせ部分は幅１cm前後でやや凹凸が見られる。型の側面および裏面には砂質の粘土が付着している。上型との合わせの際にすき間に粘土を詰めたものと考えられる。15・16は梵鐘撞座である。いずれも、複弁文で細い子蕊が中房の外側をめぐる。16は中房部分に連子が見られる。17は第５鋳造遺構群に多く見られた乳の鋳型である。

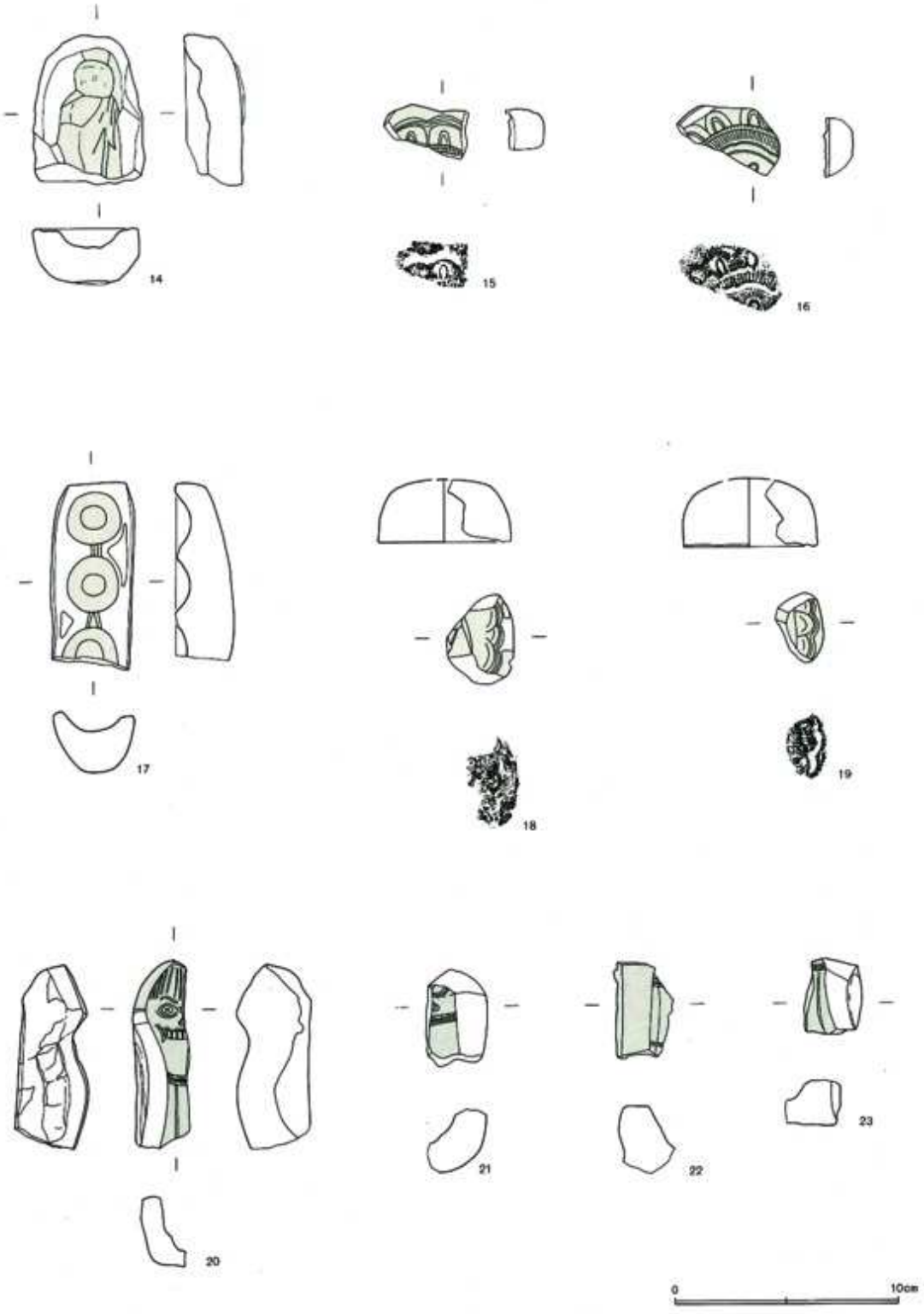
18・19はつまみの鋳型であり、花弁文にダイヤ文型の切り込みを形どっている。20～23は獅噛の獣脚鋳型である。

第35表　第９鋳造遺構群一覧表

新　番　号	旧　番　号	位　　置	形　態	長　軸	短　軸	深　さ	主軸方向
ＳＳ09－第１号廃滓	ＳＳ－09　第１廃滓	Ｐ－13－ｃ		3.00	2.60		
第２号廃滓	第２廃滓	Ｐ－13－１					



第290図　第９鋳造遺構群出土遺物(1)



第291図　第９鋳造遺構群出土遺物(2)

第9群出土鋳造遺物観察表　（第290・291図）

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
1	羽口	8.1	8.9	1.6	112	内径（7.5）	P－13－f－3	羽口
2	羽口	3.6	4.2	2.2	26	直径（11.0）	P－13－c－9	羽口
3	鉄塊系遺物	3.6	4.8	1.6	24.4		P－13－g－2	塊2
4	鉄塊系遺物	3.7	3.8	1.0	224.6		第1号廃滓集中区	塊2
5	鉄塊系遺物	3.2	5.1	0.3	23.3		第1号廃滓集中区	塊2
6	鉄塊系遺物	2.0	2.5	0.3	3.9		P－13－k－3	塊1
7	鉄塊系遺物	3.4	3.1	0.4	13.8		第1号廃滓集中区	塊2
8	鉄塊系遺物	2.5	3.8	0.6	12.0		第1号廃滓集中区P－13－k－6	塊2
9	鉄塊系遺物	2.4	3.3	0.9	10.7		P－13－c－6	塊2
10	銅滓	3.1	4.1	1.4	6.2		P－13－c－9	銅1
11	鉄塊系遺物	2.8	3.7	1.9	23.7		第1号廃滓集中区	塊2
12	鉄塊系遺物	4.0	7.1	3.2	135		第1号廃滓集中区　P－13－g	塊1
13	鉄塊系遺物	2.2	3.1	1.7	11.3		第1号廃滓集中区	塊2
14	仏像	6.7	4.7	1.5	78		P－13－h－6　№47	鋳型
15	梵鐘　撞座	2.2	3.7	1.8	10		P－13－g－5	鋳型
16	梵鐘　撞座	2.7	4.2	2.6	12		P－13－g－2	鋳型
17	梵鐘　乳	8.0	3.7	2.7	70		P－13－g－9　残存率70%	鋳型
18	仏具　釣り手				20	口径5.9　器高2.9	P－13－g－6	鋳型
19	仏具　釣り手				12	口径5.9　器高3.0	P－13－g－6	鋳型
20	獣脚	8.2	3.3	1.2	49		P－13－g－9	鋳型
21	獣脚	4.1	2.7	1.7	22		P－13－g－9	鋳型
22	獣脚	4.1	2.5	3.0	22		P－13－g－2	鋳型
23	獣脚	3.4	2.5	2.1	15		P－13－g－6	鋳型

発掘調査風景

f　第10鋳造遺構群

東側の二段からなる緩斜面の中間にあたるテラス部分および第２斜面に遺構の広がりを持つ。南側には第12鋳造遺構群、北側には第11鋳造遺構群、西側には第７鋳造遺構群が存在する。また、東側には第30号溝跡によって区切られている。本群は第１～９号鋳造土壙、第１～４号炉、第１号鋳込み跡の遺構で構成されている。また、第５号鋳造鋳土壙を覆っていた堆積層から検出した鋳型を主体とした分布範囲を第１～４地点として把握し、遺物を取り上げた。

本群は全体に鋳造遺物や焼土・炭化粒子を含む厚い堆積層に覆われていた。この堆積層を１ｍのメッシュ(小グリッド)単位にて遺物を取り上げた。10～15cm程掘り下げるとテラス部分の第３～７号鋳造土壙、第４号炉を確認した。東寄りの部分には広範囲に焼土の広がりが見られた。この焼土を含む堆積層をさらに５～10cm程掘り下げると第８・９号鋳造土壙、第２・３号炉、第１・２号鋳込み跡を確認した。

出土遺物は、鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鋳型、土器、羽口等の鋳造遺物を検出した。本群には梵鐘鋳造土壙が検出され、土壙内から多くの梵鐘鋳型を出土した。特に第７号鋳造土壙からは龍頭から駒の爪に至るまでの鋳型片を検出することができた。

遺構

第１号鋳造土壙（第293図）

本土壙は第10鋳造遺構群の南側に位置する。東側緩斜面のテラス部分に竪穴状に掘り込まれていた。西側には第７鋳造遺構群の第１号鋳造土壙が存在する。形態は小判型をした楕円形である。南側の中央部分が僅かに凹み、西側には深い張り出しを持つ。いずれの壁もほぼまっすぐに掘り込まれていた。底面は中心に南北方向の細い溝を４条検出し、南壁と北壁に取りつく位置にはそれぞれ２基の浅いピットを検出した。これらは、梵鐘を鋳込む際に梵鐘鋳型を載せる土台の丸太の跡(掛け木痕)と考えられる。規模は長軸の東西方向で3.05m、短軸の南北方向で1.92m、掘り込みの深さは42cm、西側の張り出し部分で72cmである。断面観察によると第１層は焼砂を主体とした赤褐色土、第２・３号も同様でやや褐色土を混在している。第５層は砂質でしまりを持つ。

出土遺物は第１～４層中で鋳造遺物を多く検出した。第５層中からは少なく、掛け木痕の溝から金槌の頭部を検出した。

鋳型の検出は多くないが遺構の構造から見て本土壙は梵鐘鋳造土壙と考えられる。

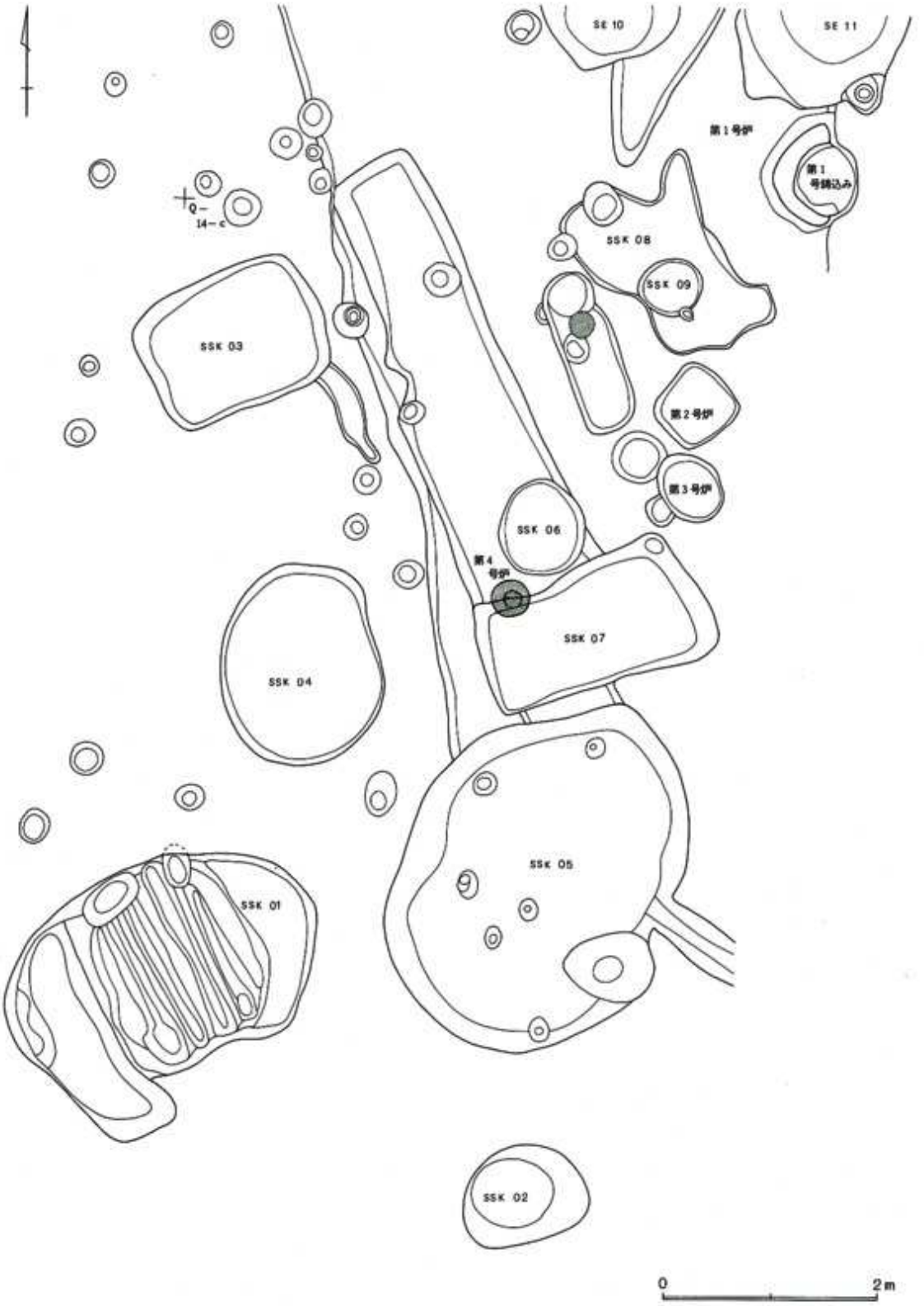
第２号鋳造土壙（第295図）

本群の南側に位置する。形態は楕円形である。規模は長軸で1.18m、短軸で0.98m、深さは1.40ｍである。円筒状に掘り込まれた土壙である。断面観察によると第１～３層にかけては鉄滓等の鋳造遺物を出土した。第９層は青灰色の粘土層である。土壙としたが井戸跡の可能性も考えられる。

第３号鋳造土壙（第296図）

本群の北側に位置する。形態は長方形である。壁は直立気味に立ち上がり、底面は平坦である。規模は長軸で1.74m、短軸で1.27m、深さは25cmである。覆土は焼土塊・炭化粒子を含む赤褐色の砂質土である。

検出された遺物は炉壁と滓が多く、鋳型は74g と少ない。



第292図　第10鋳造遺構群全体図

第4号鋳造土壙（第296図）

本群の中央にあたり、第1号鋳造土壙と第3号鋳造土壙に挟まれた位置に検出された。形態は楕円形である。壁は直立気味に立ち上がり、底面は平坦である。規模は長軸で1.87m、短軸で1.55m、深さは21cmである。覆土は焼土ブロック、焼土・炭化粒子を含む明褐色土である。

検出された遺物は第3号鋳造土壙と同様に炉壁と滓が多く、鋳型は147gである。

第5号鋳造土壙（第293図）

本群の南側に位置する。土壙は上面に鋳造遺物と焼土・炭化粒子を含む堆積層に覆われていたため、確認時点では正確な形態は不明であった。しかも、鋳型片を集中して出土する範囲を第1～4地点とした。遺物を取り上げながら10～15cm程掘り下げると鋳造土壙の形態をほぼ確認できた。形態は楕円形で、東側壁に溝を検出した。覆土中からも鋳造遺物を検出したが梵鐘鋳型の出土が顕著であった。また、土壙の中央には半円を描く様に焼土層を検出した。かなりの熱を受けて焼かれたのか堅くしまっていた。断面観察には第11～14層の赤褐色の焼土層がみられる。焼土層の外径は直径で1.10mである。この焼土は梵鐘鋳造時に被熱された定盤部分の残存とも考えられ、定盤が粘土で作られていたことが推定される。さらに、注目する点は半円に残存した焼土の内側の堆積層と外側の堆積層が大きく異なる点である。内側の層は焼土・焼土粒子・焼土塊を多く含むしまりの弱い赤褐色土であるのに対し、外側の層は褐色土を主体とし焼土はほとんど含まずしまりを持っていた。このことは、梵鐘を鋳込む際のガス抜き穴が第1～3層部分に作られていたことが判断できる。壁は直立気味に立ち上がり、掘り方の底面はほぼ平坦である。規模は長軸で3.42m、短軸で2.57m、深さは45cmである。東壁に検出された溝は幅35cm前後で東側に存在する第12鋳造遺構群へと伸びる。

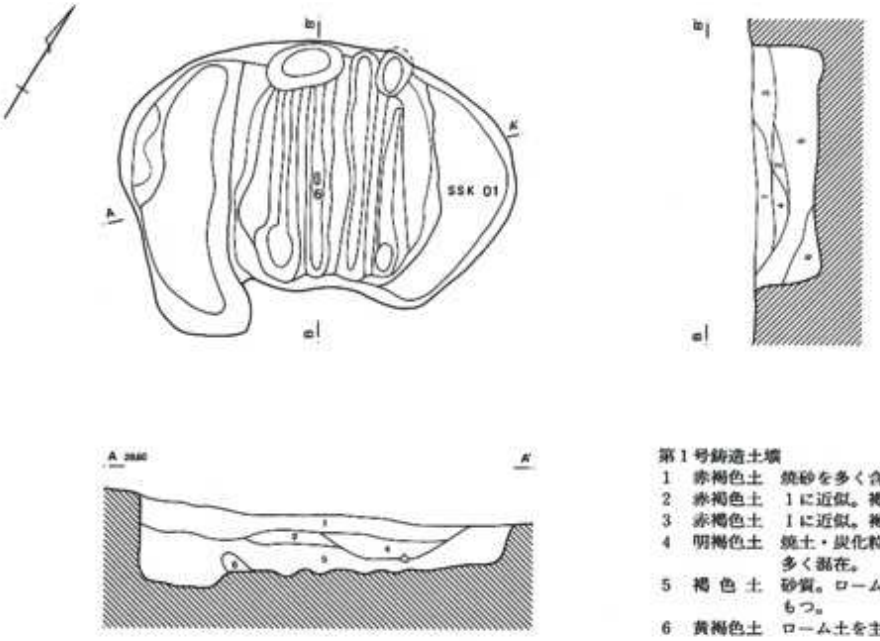
検出した遺物は土壙覆土中から出土した梵鐘鋳型片が特徴である。いずれも、第8層の上層から検出され第8層が掘り方埋土であることが理解できる。また、本土壙を覆っていた堆積層中の第1地点出土の遺物は隣接する第7鋳造土壙に伴う梵鐘鋳型であることがわかった。本土壙出土の梵鐘鋳型はいずれも無文であり池の間あたりの破片と考えらる。一方、第1地点出土の陽鋳文字鋳型や第7号鋳造土壙出土の陽鋳文字鋳型・龍頭を初め多くの部位の鋳型片を含んでいた。本土壙出土鋳型とこれらの梵鐘鋳型の関係性については不明である。

第6号鋳造土壙（第295図）

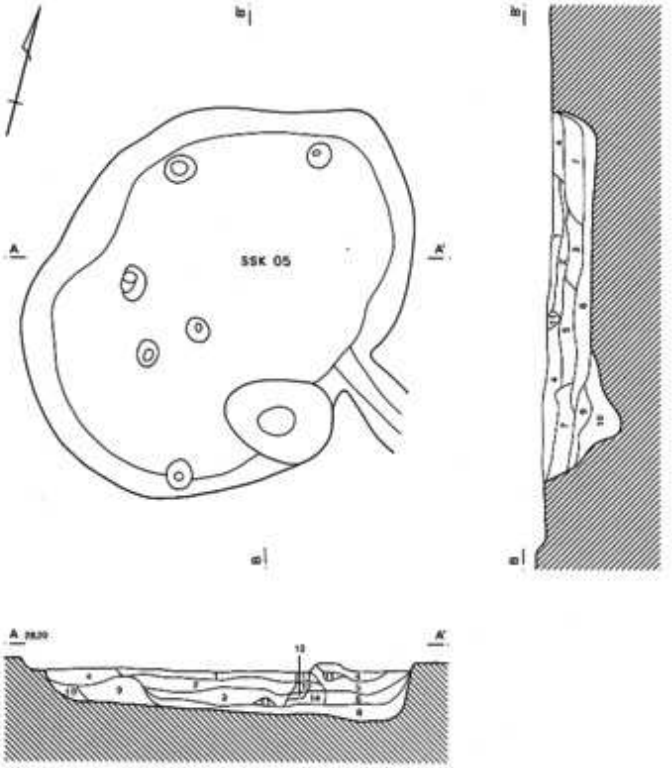
本群の中央にあたり、第7号鋳造土壙と第4号炉の北側に位置する。形態は円形である。壁は直立気味に立ち上がり、底面は平坦である。規模は直径0.82m、深さは17cmである。覆土は焼土・炭化粒子を主体とし焼砂含む赤褐色土である。

第7号鋳造土壙（第297図）

本群の中央やや南側に位置する。周辺には南側に第5号鋳造土壙、北側に第6号鋳造土壙と第4号炉跡が存在する。土壙は上面に鋳造遺物と焼土・炭化粒子を含む堆積層に覆われていた。また、第4号炉が土壙上面で検出されている。確認時点では正確な形態は不明であったが、斜面の調査に取りかかるにあたり斜面に直行する東西方向のトレンチが開けられ本土壙はちょうど第3トレンチによって確認された。しかも、梵鐘鋳型を集中させて出土した。確認面から10cm程掘り下げると鋳造土壙の形態をほぼ確認できた。形態は長方形である。壁は直立気味に立ち上がり、底面は地山の



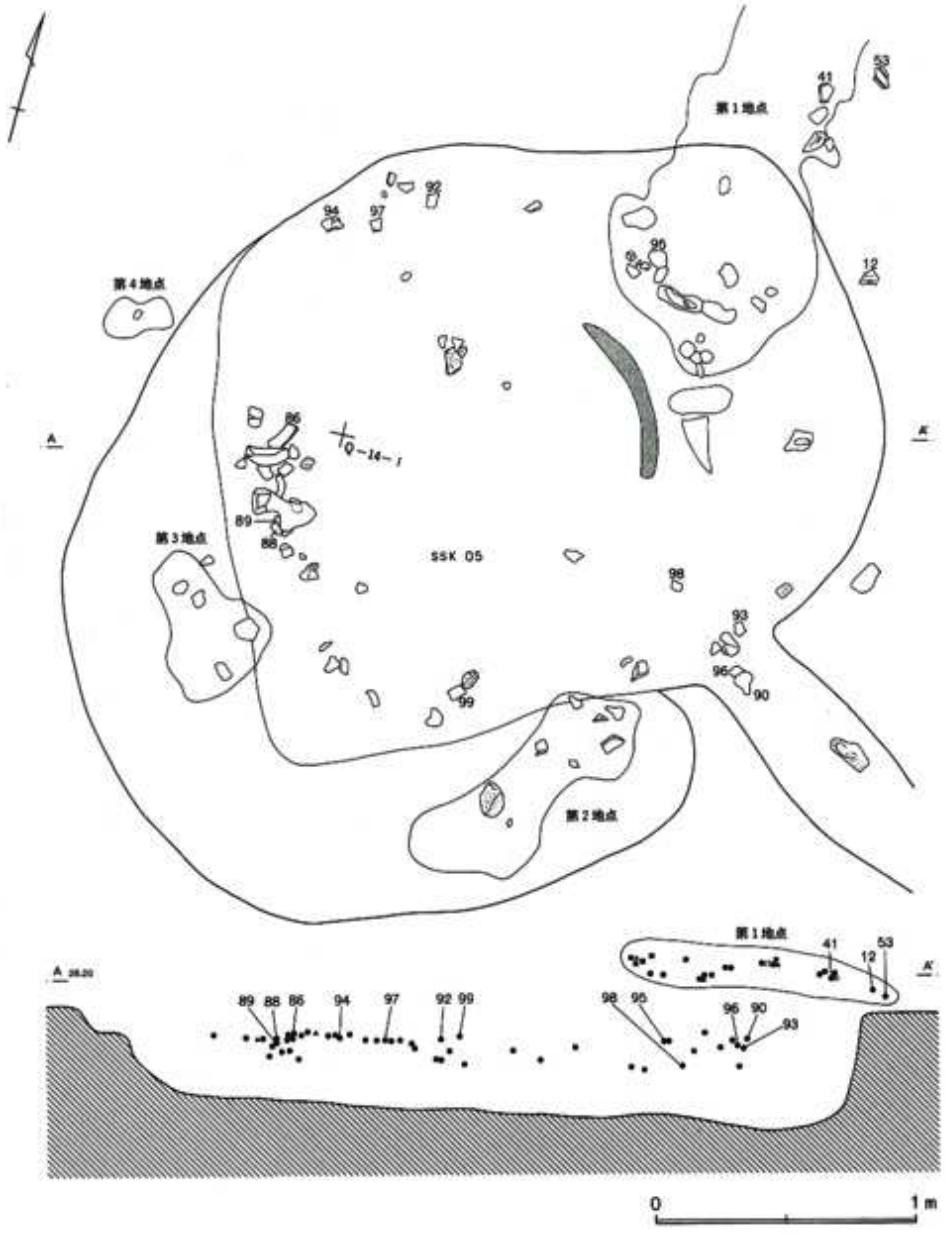
第1号鋳造土壙
1　赤褐色土　焼砂を多く含み、しまり弱い。
2　赤褐色土　1に近似。褐色土をやや多く含む。
3　赤褐色土　1に近似。褐色土を多く含む。
4　明褐色土　焼土・炭化粒子を含み、砂粒子を多く混在。
5　褐 色 土　砂質。ローム粒子を混在。しまりもつ。
6　黄褐色土　ローム土を主体。



第5号鋳造土壙
1　赤褐色土　焼土・炭化粒子含み、しまり弱い。
2　赤褐色土　焼土粒子、炭化物を多く含む。
3　赤 色 土　焼土塊を含む。
4　暗褐色土　きめやや粗雑。焼土・炭化粒子を多く含む。
5　暗褐色土　4に比べ、やや焼土・炭化粒子が多い。
6　赤褐色土　焼土・炭化粒子混在。しまりもつ。
7　黒褐色土　砂粒子を混在。しまり強い。
8　黄褐色土　ローム土を多く、若干の焼土粒子も含み、しまりもつ。
9　褐 色 土　焼土・炭化粒子を混在。しまりややもつ。
10　黒褐色土　ローム・焼土粒子を含み、しまりもつ。
11　赤褐色土　焼土。
12　赤褐色土　焼土・炭化粒子を含み、砂質土を混在。
13　赤 色 土　焼土を主体。
14　明褐色土　焼土・炭化粒子を含み、しまりやや弱い。

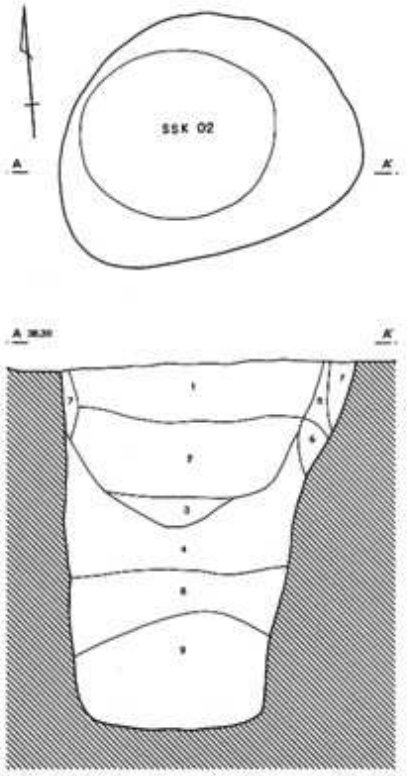
0　2m

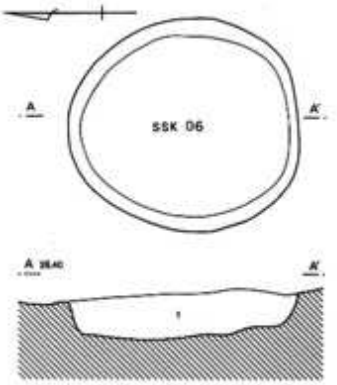
第293図　第10群第1・5鋳造土壙



第294図　第10群第５号鋳造土壙遺物分布図

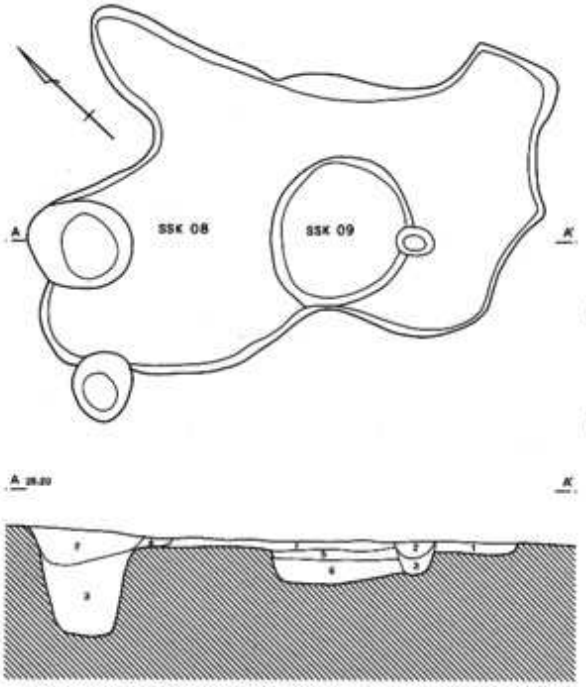
ローム面を利用し平坦である。覆土上層からは鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鋳型、土器、羽口等の鋳造遺物も検出したが中層からは梵鐘鋳型の出土が顕著であった。また、土壙の中央には焼土層を検出した。断面観察では第１～５層が焼土塊・焼土粒子・焼砂を多く含むしまりの弱い赤褐色土であった。その一方、第６・７層はしまりをもつ褐色土である。更に、注意すべき点は第７層の上面に焼土面を検出しその内側には第５層の焼砂を多く含む掘り込みが存在することである。これらのような堆積層は土壙の形態こそ違え第１・５号鋳造土壙でも観察されている。梵鐘





第２号鋳造土壙
1　明褐色土　焼土・炭化粒子を多く含み、鉄滓を混在。
2　明褐色土　１に比べ、やや暗い。
3　明褐色土　１に比べ、ややきめ細かい。
4　褐 色 土　炭化・焼土粒子を少量含む。
5　褐 色 土　きめ細かく、ローム粒子、若干の焼土・炭化粒子を含む。
6　黄褐色土　ローム土を主体。
7　黒褐色土　粗雑でしまりもつ。砂粒子を混在。
8　明褐色土　炭化・焼土粒子を混在。しまり強い。
9　青灰色土　粘土質。砂粒子を含む。

第６号鋳造土壙
1　赤褐色土　焼土・炭化粒子を主体。焼砂。

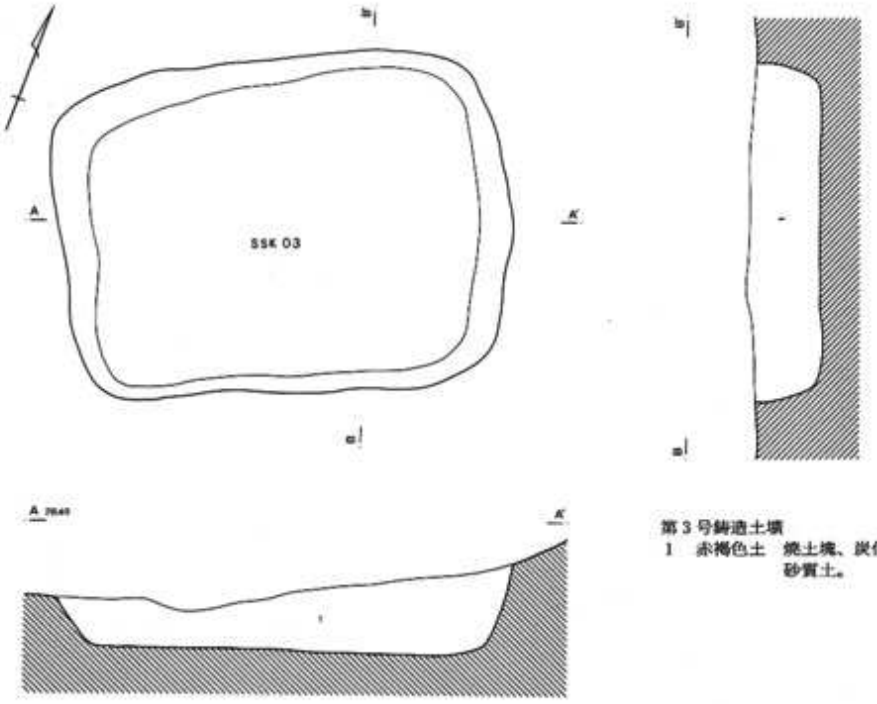


第８号鋳造土壙
1　暗褐色土　焼土・炭化粒子を混在。しまり弱い。
2　赤褐色土　焼土・炭化粒子を多く含み、しまりややもつ。
3　赤褐色土　焼土・炭化粒子を多く含み、しまりややもつ。
4　赤褐色土　焼土を主体。しまり弱い。

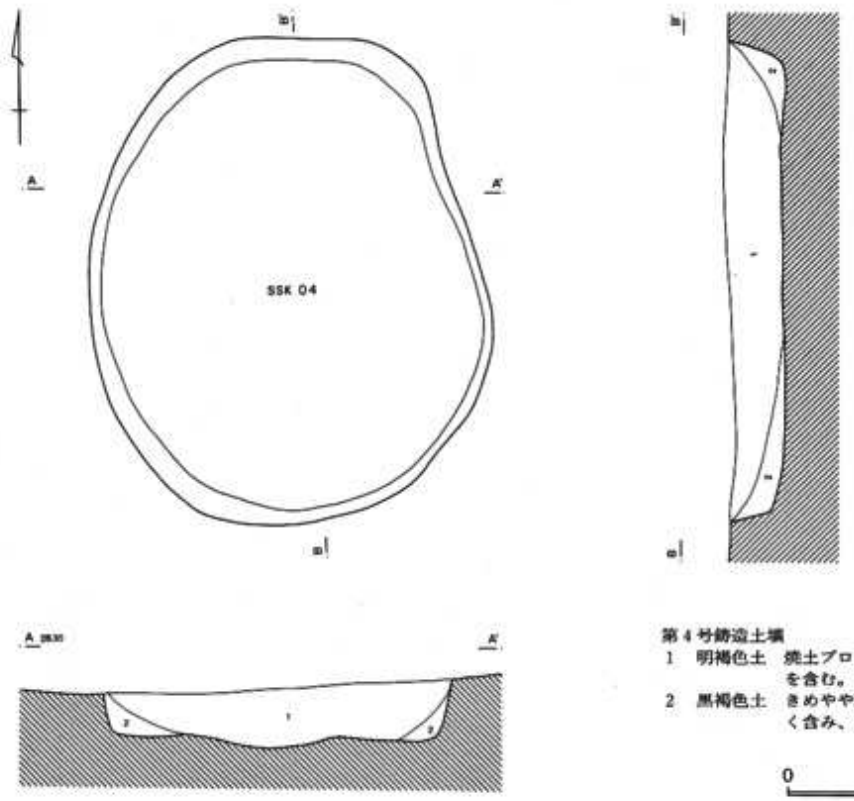
第９号鋳造土壙
5　暗褐色土　焼土・炭化粒子を若干含む。しまりもつ。
6　黒褐色土　焼土・炭化粒子を混在。しまり強い。

0　1m

第295図　第10群第２・６・８・９号鋳造土壙



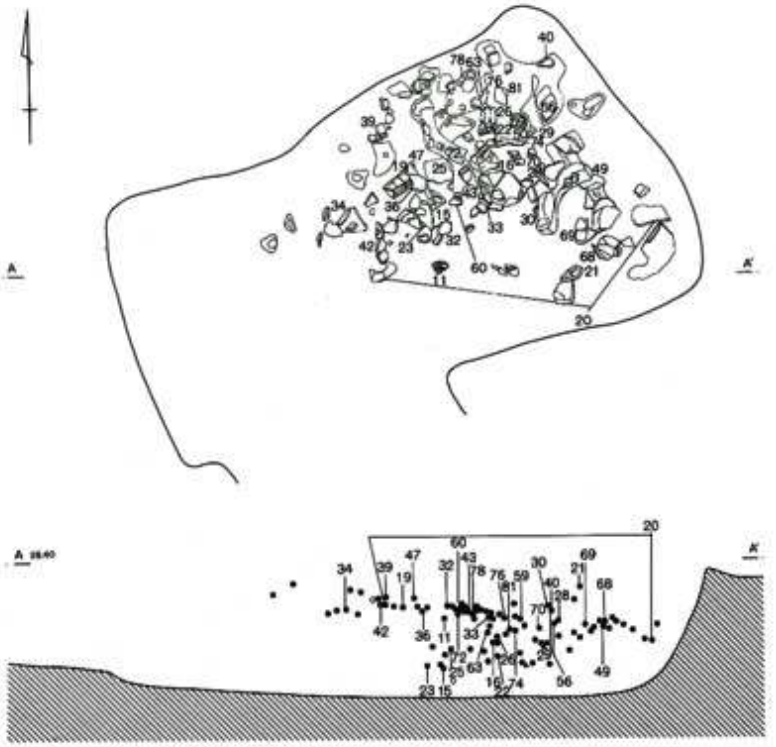
第3号鋳造土壙
1　赤褐色土　焼土塊、炭化粒子を多く含み、砂質土。

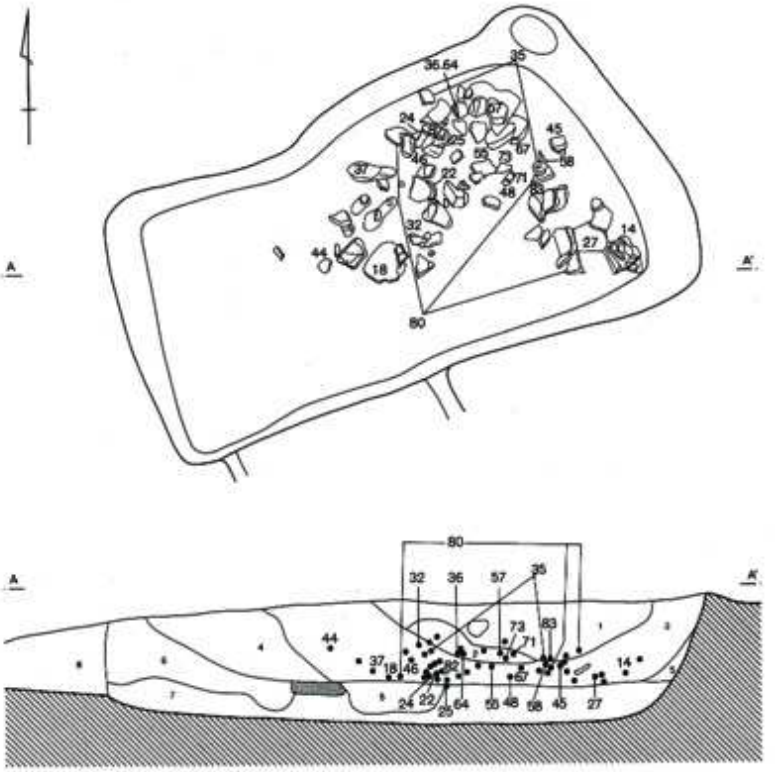


第4号鋳造土壙
1　明褐色土　焼土ブロック、焼土・炭化粒子を含む。
2　黒褐色土　きめやや粗雑。砂粒子をやや多く含み、しまりもつ。

0　1m

第296図　第10群第3・4号鋳造土壙



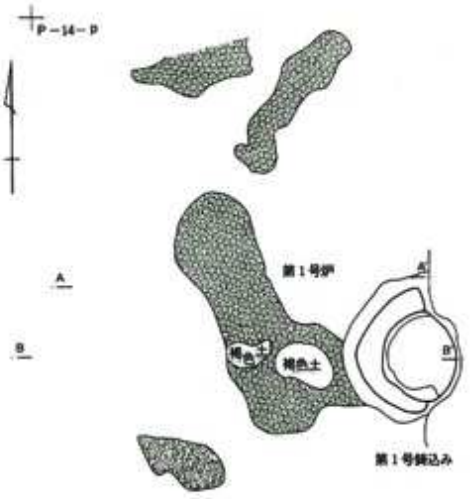


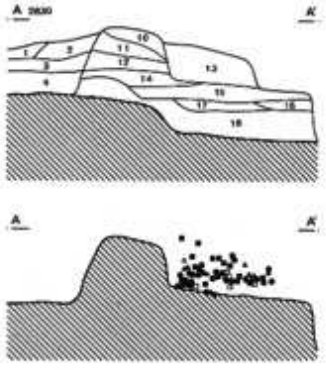
第７号鋳造土壙

1	暗褐色土	焼土・炭化粒子を含み、焼砂を主体。
2	赤褐色土	焼土粒子を主体。鋳型片を混在。
3	明褐色土	焼土粒子を多く含み、焼土塊を混入。
4	明褐色土	焼砂を多く含む。しまりやや弱い。
5	赤褐色土	焼砂を多く含む。
6	褐色土	焼土、炭化粒子を混在。砂利を含みしまりもつ。
7	暗褐色土	しまりややもつ。炭化、焼土粒子を含む。
8	黒褐色土	しまり強く、焼土、炭化粒子を混在。砂利を含む。

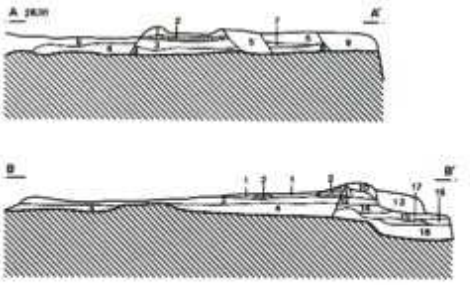
0　1m

第297図　第10群第７号鋳造土壙遺物分布図



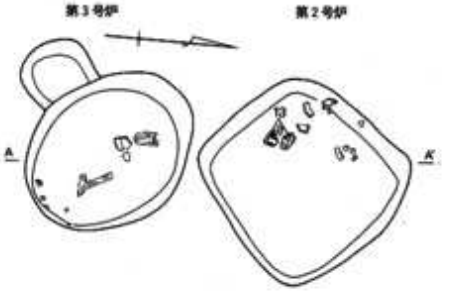


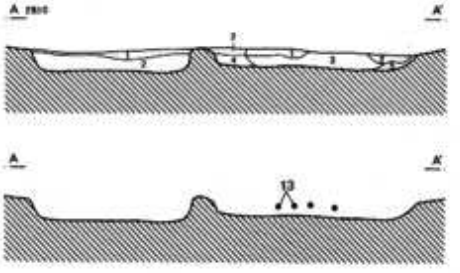
第1号鋳込み
10　黄褐色土　ローム土、砂粒、小礫を多く含む。
11　暗褐色土　鋳型片を含み、しまりややもつ。粘土を混在。
12　暗褐色土　焼土・炭化粒子を含み、しまりややもつ。
13　褐 色 土　鋳型片を多く含む。
14　褐 色 土　ローム・炭化粒子を含み、粘土ブロックを混在。
15　褐 色 土　ローム・炭化粒子を含み、粘土ブロックを混在。
16　明褐色土　粘土をブロック状に含む。
17　褐 色 土　炭化・焼土粒子を含む。
18　暗褐色土　炭化・焼土粒子を含む。



第1号炉
1　褐 色 土　焼土・炭化粒子を混在。しまり弱く、焼砂が多い。
2　黄灰色土　粘土を主体。
3　褐 色 土　滓、焼土・炭化粒子を多く含む。粗雑でしまり弱い。
4　赤褐色土　焼土・炭化粒子を多く含み、しまり弱い。
5　黒褐色土　焼土・炭化粒子を混在。
6　明褐色土　焼土・炭化粒子を含み、滓を混在。
7　明褐色土　僅かに粘土をブロック状に混入。焼土・炭化粒子を含む。
8　褐 色 土　炭化・焼土粒子を含み、しまりもつ。
9　暗褐色土　焼土・炭化粒子を含み、しまりやや弱く、きめやや細かい。

0　2m





第2号炉
1　赤褐色土　焼土・炭化粒子を含む。
2　赤褐色土　焼砂を主体。ドーナツ状をなす。
3　暗褐色土　鋳型片を多く含み、炭化・焼土粒子を混在。
4　褐 色 土　ローム・焼土・炭化粒子を含む。
5　赤褐色土　焼土・炭化粒子を含み、しまりややもつ。
第3号炉
1　赤褐色土　炭化材、焼土粒子を多く含む。鋳型片を混在。
2　暗褐色土　焼土・炭化粒子を含む。

0　1m

第298図　第10群第1～3号炉・第1号鋳込み跡

鋳造土壙の下部構造、特に定盤部分の構造やガス抜き穴の存在といった点で本群における梵鐘鋳造土壙のひとつの特徴が明らかとなった。

規模は長軸の東西方向で2.14m、短軸の南北方向で1.21m、深さは45cmである。南壁には幅90cm前後の浅い掘り込みが第5号鋳造土壙へと続いている。

検出した遺物は土壙覆土中から出土した梵鐘鋳型片が特徴である。いずれも、第5層の上層から検出され第5層が掘り方埋土であることが理解できる。梵鐘鋳型は複弁八葉蓮華文の撞座をはじめ陽鋳文字、龍頭、笠型、乳、縦・横の帯、駒の爪に至るまでほぼ全体像が明らかとなる程の出土をみた。

第8号鋳造土壙（第295図）

本群の北側にあたり、第9号鋳造土壙と重複関係にあり、本土壙が新しい。形態は不整形である。掘り込みは浅く、底面は平坦である。規模は長軸2.00m、短軸0.90m、深さは3cmである。覆土は焼土・炭化粒子を主体としたしまりの弱い赤褐色土である。

第9号鋳造土壙（第295図）

本土壙は第8号鋳造土壙の直下から検出された。形態は円形をしており、規模は直径0.55m、深さ17cmである。覆土は焼土粒子を伴う暗・黒褐色土である。

第1号鋳込み跡（第298図）

第1号鋳込み跡は東側斜面部の第二斜面肩部に位置する。形態は円形の鋳込み土壙と推定されるが東側半分が削られ周堤状の高まりは存在しない。構造は第18層の堆積層上に第14・15層の粘土ブロックを混在する褐色土を張り込み、この上に第10～12層の黄褐色土を周堤状に積み上げている。中心部分の凹みからは梵鐘の鋳型片を多く検出し、伴う覆土は非常にしまりのある堅い褐色土であった。規模は外径約1.20m、周堤幅30cm、中央の凹み径60cm、深さ20cmである。

第1号炉（第298図）

炉の本体は確認できなかった。第1号鋳込み跡の北西に広がる粘土層の直上に焼土の堆積を確認したこの部分を第1号炉跡とした。出土遺物はない。

第2号炉（第298図）

第8・9号鋳造土壙の南側に検出した。上面の堆積層を10～15cmほど掘り下げた位置で確認した。北側に第2号炉、南側に第3号炉を確認した。形態は掘り込みの浅い方形である。規模は長軸0.70m、短軸0.67m、掘り込みの深さは7cmである。覆土は焼土、炭化物を伴う赤褐色土であり、外周に第2層の赤褐色をした焼砂がドーナツ状に確認された。出土遺物は第3層中から梵鐘鋳型を検出した。

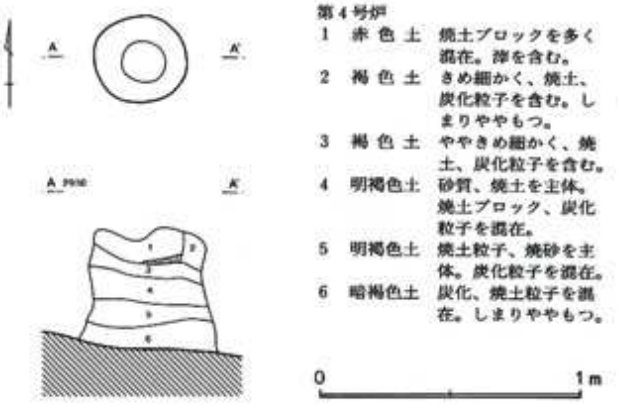
第3号炉（第298図）

第2号炉の南側に位置する。この2基は並列した状態で検出された。形態は掘り込みの浅い円形である。規模は直径0.60m、深さ7cmである。覆土は焼土、炭化物を伴う赤褐色土であり、梵鐘鋳型を伴う。

第4号炉（第299図）

第7号鋳造土壙を覆っていた堆積層の上面で検出した。形態は円形で、赤褐色の焼土ブロックを主体としている。規模は直径35cmである。出土遺物は滓片を検出した。第7号鋳造土壙に伴う可能性は不明である。

第1層が炉にともなう覆土であり、底面は、赤色に焼け堅い。



第299図 第10群第4号炉跡

遺物

鋳造遺物は全て分類し計量を行った。その結果、鉄塊8450g、炉壁75135g、銅滓177g、鉄滓55797g、木炭2282g、白色滓3325g、石5802g、鋳型32596g、土器2333g、羽口6928g、粘土塊2107gを計量した。鋳造遺物は炉壁、滓、鋳型など全ての種類が多く、本遺構群が鋳造の中心であることを性格付けていることがわかる。また、鋳型は梵鐘が26648gと圧倒的に多く、容器192g、獣脚618gを計量した。このことは本群が梵鐘鋳造遺構群であることを鋳型の点からも位置付けている。

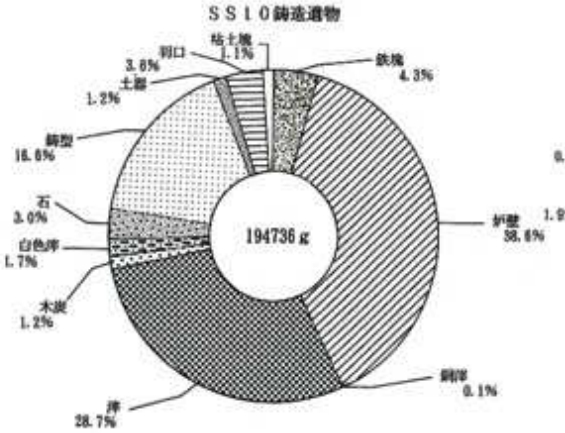
土器は堆積層の中から1の片口鉢を検出した。在地産の鉢であり、胎土は石英・片岩を混在する。形態は内湾気味に立上がる体部から口縁部はやや内傾に立ち口唇部の断面形は三角状になる。内面から器肉は黒色、外面は赤褐色である。全体の器面の様子から二次的な被熱を受けたものと考えられる。出土位置は第10鋳造遺構群内のQ－14－1－2グリッドである。

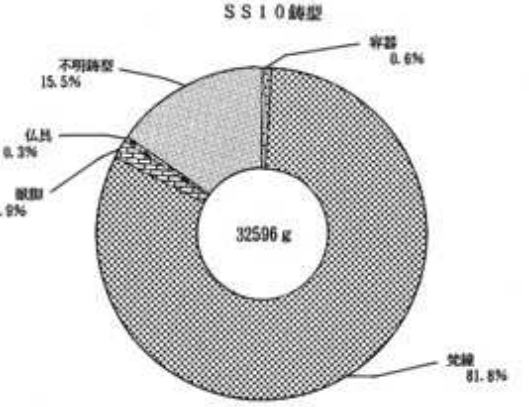
2の羽口は先端に平坦な面を残す形態で大口径である。外面には黒色～紫紅色の湯滓が付き木炭痕も見られる。素材は粘土で造られ胎土中には白色針状物質・滓粒・砂粒等を混在させる。内面は赤褐色である。

滓は3～5である。3は側面3面に直線状の破面をもつ椀形の滓の肩部破片である。上面は1.2cm大の木炭痕が点在するものの、ほぼ平坦である。側面から底面は、2mm以下の気孔が露出し、何らかの炉床に接して形成されたことを示している。色調は、全体的には赤褐色、破面に見られる地は黒褐色で気孔も中小が見られる。上面は褐色気味ながら広く紫紅色で酸化雰囲気を示す。磁着は全体に強く、特殊金属探知機(H)に外側が広く反応する。推定半径は9.3cmと大きく、厚みも3.7cm以上はあろう。資料の主体は滓であり小さな金属鉄の点在が推定される。浅い「U」字型の断面形や裏面の炉床に接した形状からいえば、椀形鍛冶滓の一種と見られるものの、推定径の大きさや上面の色調、さらに含鉄部分が点在するという点から見て素直に椀形鍛冶滓と言うにはやや躊躇する資料である。

4は側面2面が破面となるガラス質の滓である。1.3cm程の木炭痕が側面に残り、下面には小さな木炭痕や黒鉛化気味の木炭片の混在する炉床粘土と考えられる砂質土が付着している。本資料の最大の特色はガラス質の滓の色調にある。滓の中核部は薄いコバルトブルーで、一部には濃い緑色

第36表　第10鋳造遺構群遺物計量表(1)

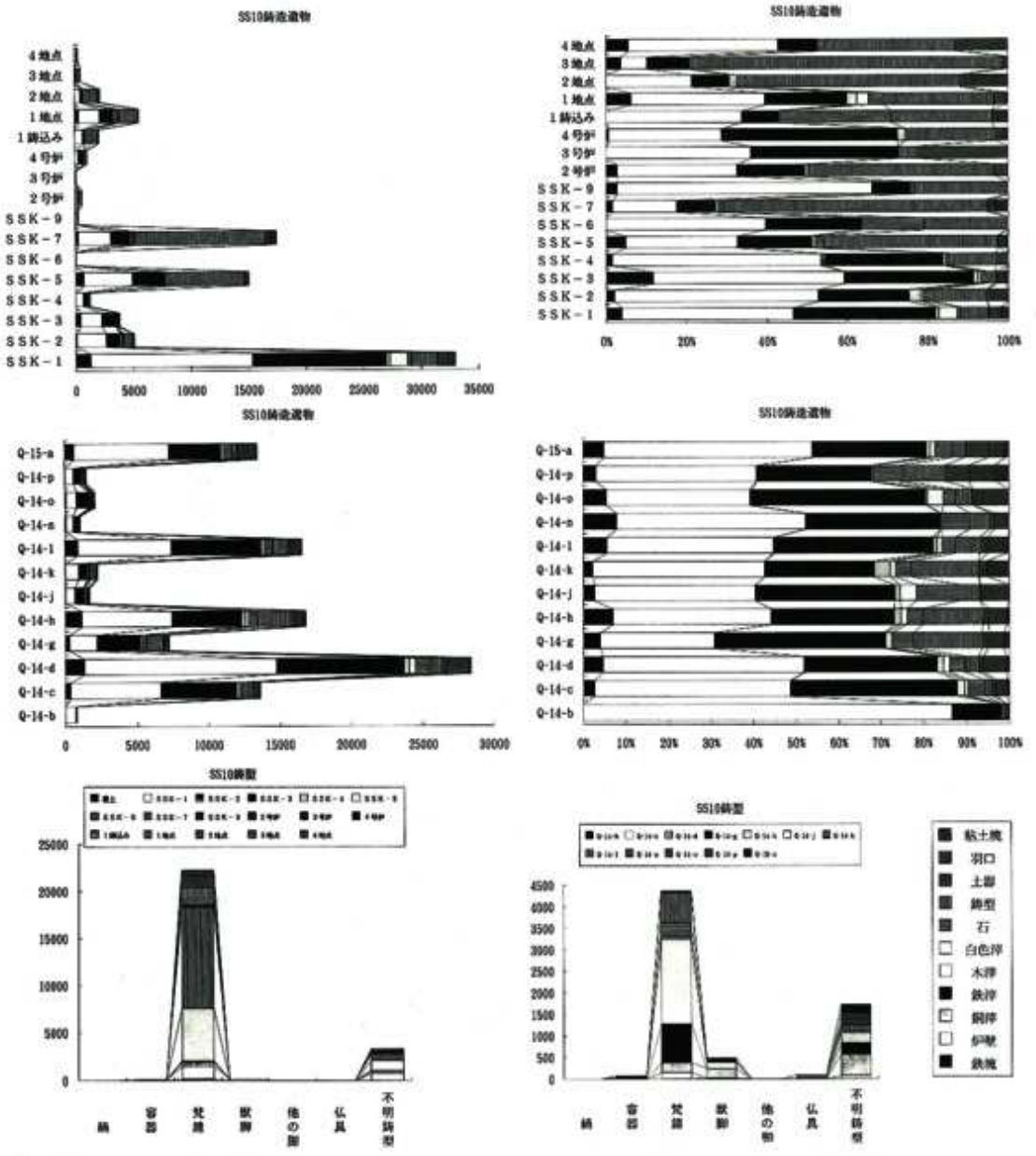




小番号	鉄　塊	炉　壁	銅滓	鉄滓	木炭	白色滓	石	鋳型	土器	羽口	粘土塊
ＳＳＫ－１	1298	14060	15	11616	315	1515	292	2273	71	905	635
ＳＳＫ－２	104	2568	0	1135	152	32	128	672	0	266	0
ＳＳＫ－３	449	1821	0	1222	46	27	62	74	24	69	30
ＳＳＫ－４	20	667	16	371	10	0	12	147	40	0	0
ＳＳＫ－５	740	4194	0	2792	105	102	267	6523	25	294	65
ＳＳＫ－６	0	38	0	23	0	0	15	20	0	0	0
ＳＳＫ－７	259	2806	0	1689	130	77	148	11458	32	296	576
ＳＳＫ－９	8	182	0	27	0	0	3	67	0	0	0
２号炉	18	192	0	110	0	5	3	295	21	0	1
３号炉	0	45	0	46	0	0	0	6	28	0	0
４号炉	7	309	0	480	22	0	0	245	0	35	0
１鋳込み	0	715	0	194	0	0	593	529	0	83	0
１地点	348	1854	2	1140	139	160	209	1529	153	35	0
２地点	0	482	0	209	45	0	2	1245	2	270	0
３地点	22	38	0	61	0	0	1	462	5	0	0
４地点	20	130	0	35	0	0	7	112	0	46	0
Q-14-b	0	722	0	95	0	0	0	10	0	7	0
Q-14-c	380	6271	14	5311	240	118	537	235	127	345	72
Q-14-d	1351	13393	51	8854	386	420	991	943	300	1535	204
Q-14-g	294	1941	0	2925	14	98	366	1154	110	286	91
Q-14-h	1185	6243	8	4879	273	245	608	2357	225	704	103
Q-14-j	48	658	0	574	21	68	177	78	2	118	0
Q-14-k	52	929	0	594	87	30	85	357	4	43	118
Q-14-l	930	6494	43	6184	149	200	516	935	305	764	66
Q-14-n	88	488	0	350	0	3	72	50	12	38	0
Q-14-o	118	718	12	866	10	77	61	85	0	180	0
Q-14-p	47	587	0	420	1	5	95	166	85	95	51
Q-15-a	674	6590	16	3595	137	143	554	373	762	534	95
合計	8450	75135	177	55797	2282	3325	5802	32400	2333	6928	2107

小番号	鍋	容器	梵鐘	獣脚	他の脚	仏具	不明鋳型	日用品小計	仏具小計	鋳型合計
覆土	0	0	174	0	0	0	22	0	174	196
ＳＳＫ－１	0	116	1290	129	0	0	738	116	1419	2273
ＳＳＫ－２	0	0	452	0	0	0	220	0	452	672
ＳＳＫ－３	0	0	31	0	0	0	43	0	31	74
ＳＳＫ－４	0	0	113	0	0	0	34	0	113	147
ＳＳＫ－５	0	0	5490	0	0	0	1033	0	5490	6523
ＳＳＫ－６	0	0	20	0	0	0	0	0	20	20
ＳＳＫ－７	0	0	10752	0	0	0	706	0	10752	11458
ＳＳＫ－９	0	0	0	0	0	0	67	0	0	67
２号炉	0	0	246	0	0	0	49	0	246	295
３号炉	0	0	6	0	0	0	0	0	6	6
４号炉	0	0	29	0	0	0	216	0	29	245
１鋳込み	0	0	529	0	0	0	0	0	529	529
１地点	0	0	1334	0	0	0	195	0	1334	1529
２地点	0	0	1245	0	0	0	0	0	1245	1245
３地点	0	0	460	0	0	0	2	0	460	462
４地点	0	0	112	0	0	0	0	0	112	112
Q-14-b	0	0	0	10	0	0	0	0	10	10
Q-14-c	0	0	150	11	0	0	74	0	161	235
Q-14-d	0	2	228	222	0	0	491	2	450	943
Q-14-g	0	0	895	0	0	0	259	0	895	1154
Q-14-h	0	15	1965	137	0	0	240	15	2102	2357
Q-14-j	0	0	38	0	0	0	40	0	38	78
Q-14-k	0	0	357	0	0	0	0	0	357	357
Q-14-l	0	19	690	10	0	88	128	19	788	935
Q-14-n	0	0	0	8	0	0	42	0	8	50
Q-14-o	0	0	0	0	0	0	85	0	0	85
Q-14-p	0	0	6	0	0	0	160	0	6	166
Q-15-a	0	40	36	91	0	0	206	40	127	373
合計	0	192	26648	618	0	88	5050	192	27354	32596

第37表　第10鋳造遺構群遺物計量表(2)



部分も混在する。表面全体は、縞状に流れる濃い緑色、表面の凹みには赤褐色の酸化物が点状に付着している。底面の付着土は白色粒子の目立つ砂質土。本資料の生成位置は、木炭片や黒鉛化木炭片の散在する溶解炉の炉床直上あるいは、炉壁に接した部分と推定される。

5は白色の角ばった石のまわりに青味がかった褐色で粒状の溶解物がみられる資料である。中心の石部分には細いスジ状の不定方向の脈石部が見られ、その一部は被熱して滓化している。外側の付着物は磁着が強く、一見砂鉄の焼結状態にも似ている。白色の石は耐火性が高いらしく、脈石部が滓化したり、滓化しないまでも紫紅色に酸化しているのに比べるとほとんど溶解はしていない。

道具は6の金槌を第1号鋳造土壙内から検出した。横断面形が丸い棒状の鉄槌の頭部かと推定される鉄器である。表面全体が皮状に厚さ5㎜程錆化しており、長軸端部片側のみ錆がはがれて、鉄地の黒錆が見えている。その他は表面錆以外にも、錆ぶくれや付着土砂によって厚く覆われ、1㎝前後の石片さえ付着しているため、外側からは資料を確実に読み取れない。長軸端部を中心に長軸に沿って放射割れが見られるが、これは表面の錆層に生じているのみで、端部内側に見られる丸みをもった鉄地には達していない。色調は、地は褐色。表面錆破面は黒褐色。全体には赤褐色の付着土砂となる。付着土砂中にはさまざまな石粒の他に3㎜程の濃い緑色のガラス質滓片が点在する。

本資料の性格は、外見的には確定し難いが、長軸端部に見られる丸い先端から見て、円柱状の鉄器であろう。長軸のもう一方の端部は、赤錆に厚く覆われているため完形品かどうかを区別するのはやや難しいが、長軸端部の先端片側が丸く、もう一方は赤錆面がやや平ら気味であり、強いて種別を推定すれば、鉄槌頭部の可能性をあげておきたい。長さは、表面錆の厚さを除けば8.5㎝程と推定される。

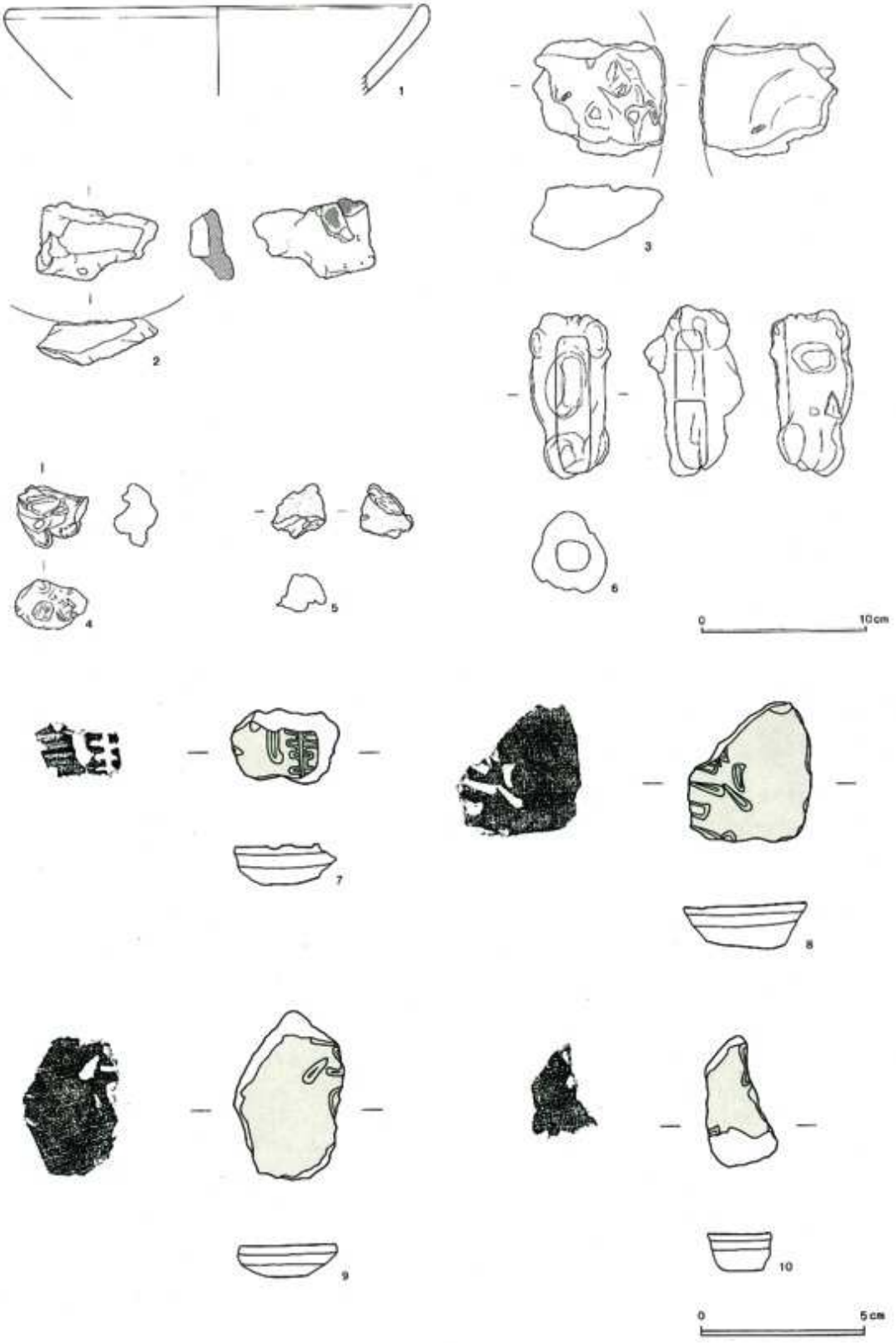
X線CTスキャナー撮影の結果、先端部が丸みをもち、柄のホゾが切られている鉄槌頭部と判明した。頭部側のメタルは錆化がはげしく、残りは僅かである。柄穴は長方形か。CT像には長軸方向にスジ状の線が見える。これは鍛造鉄器の鍛造線か、X線透過不良のための擬像のどちらかであろう。なお、鋳造品特有の小さな気孔が見られないことも、鍛造品との判断の裏付けである。

鋳型は7～103が梵鐘、104～114が獣脚、115～117が容器である。このうち、梵鐘鋳型は第7鋳造土壙からまとめて出土した。この他、第1～6号鋳造土壙からも多くの梵鐘鋳型を検出し、本群が梵鐘鋳造の生産場であることを示している。

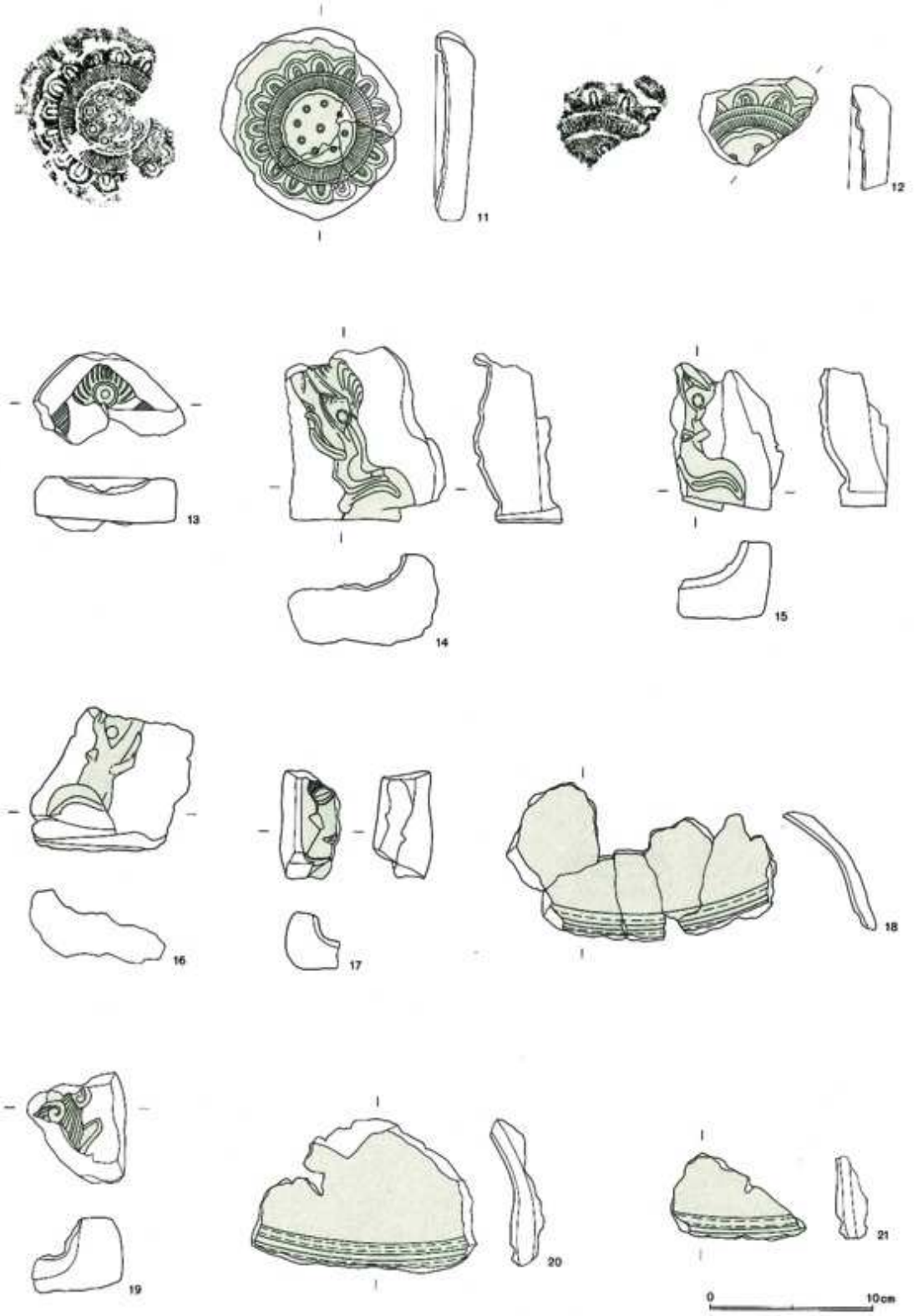
梵鐘は7～10が陽鋳文字の鋳型片である。文字の判読はできないが、7は「重」もしくは「里」の可能性が考えられる。いずれも、基型による横方向の挽き目が見られることから陽鋳文字を後から梵鐘本体にはめ込むのではなく、仕上げ真土整形され完成した梵鐘本体に文字を裏書きしたものと考えられる。

11・12は複弁八葉蓮華文の撞座である。両者は大きさ・形態が微妙に異なり別個体の梵鐘鋳型と見られる。11は掘り込みがやや浅いが精巧な造りである。型の外径は11.0㎝、厚さ2.3㎝であり、撞座模様の直径は9.4㎝である。造りはあらかじめ円形に造られた粘土盤に中真土を載せ、さらにその上に、仕上げ真土を載せ范型で押したものと考えられる。出来上がった撞座は挽き型で造られた梵鐘本体に切り込んではめ込まれる。その際に本体と撞座のすきまに目張りされた粘土の一部が撞座に付着している。文様意匠は外側に二枚の花びらが二連にくくられた複弁が八葉配され、中房と複弁の中間には細かな蕊が巡り弁寄りのところに細い圏線が回る。中房には径4.5㎜程の竹管状で表現された1＋8の連子が配され、その外側に八葉に形どられた細い圏線が見られる。12はこれよりやや大きく全体的な掘りも深い形態であるが、文様意匠については同じと考えられる。

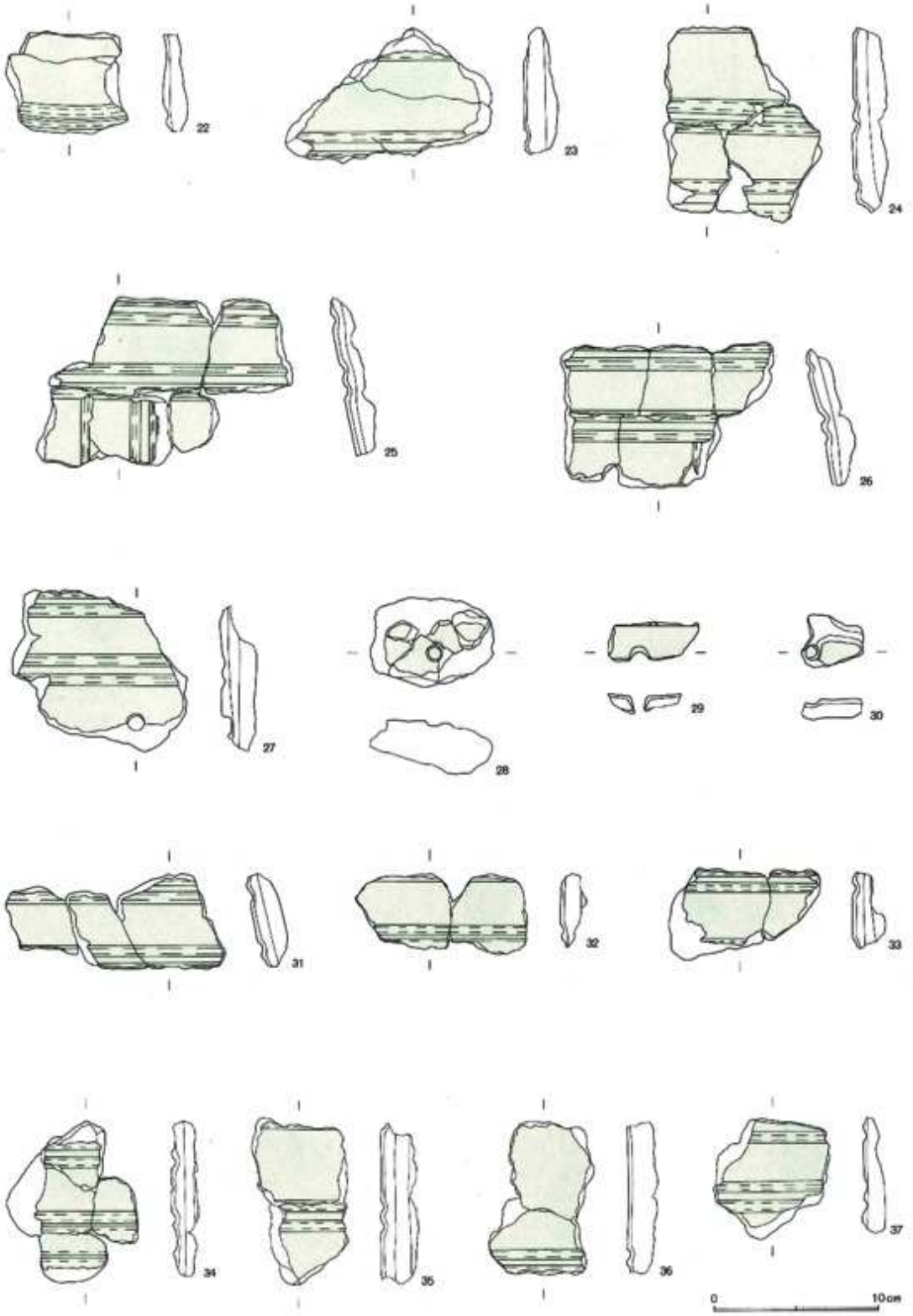
13～17・19は龍頭である。13は龍頭の先端部の宝珠部分で、宝珠径1.5㎝とやや小さく半鐘の可能性も考えられる。型の周囲には幅1.4㎝前後の合わせ部分をもつ。14～17・19は大型の梵鐘龍頭であり、顔反面部で合わせをもつ。



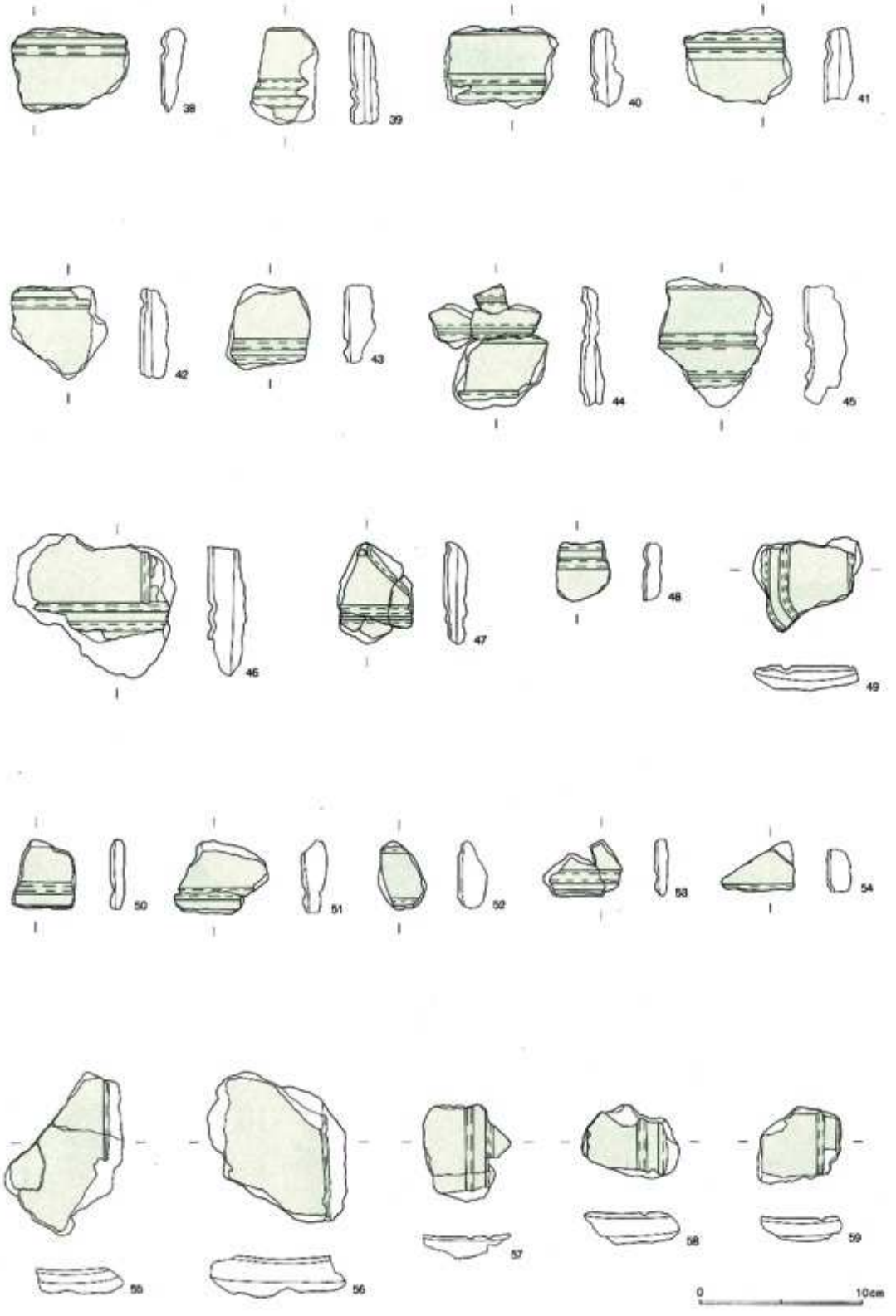
第300図　第10鋳造遺構群出土遺物(1)



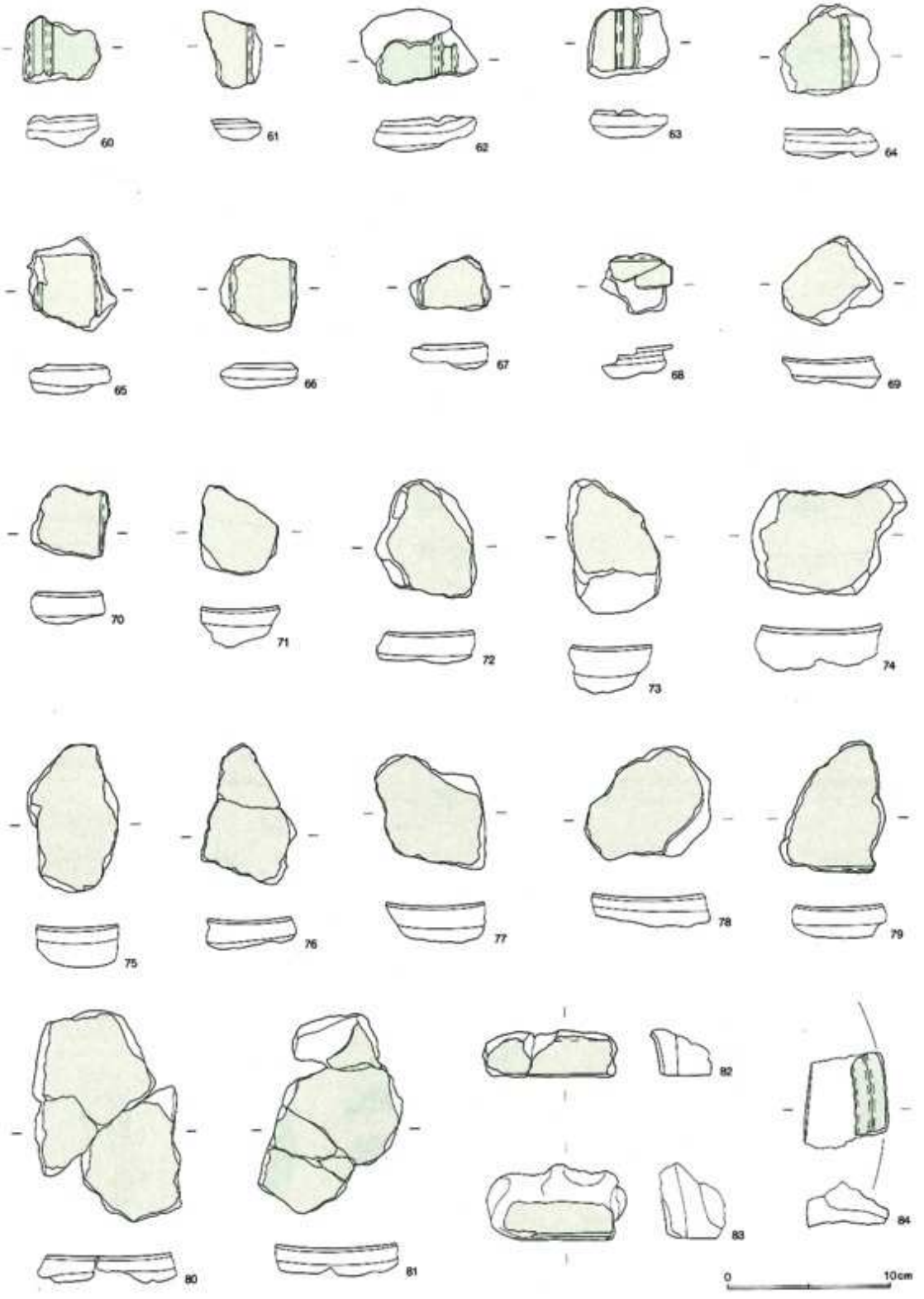
第301図　第10鋳造遺構群出土遺物(2)



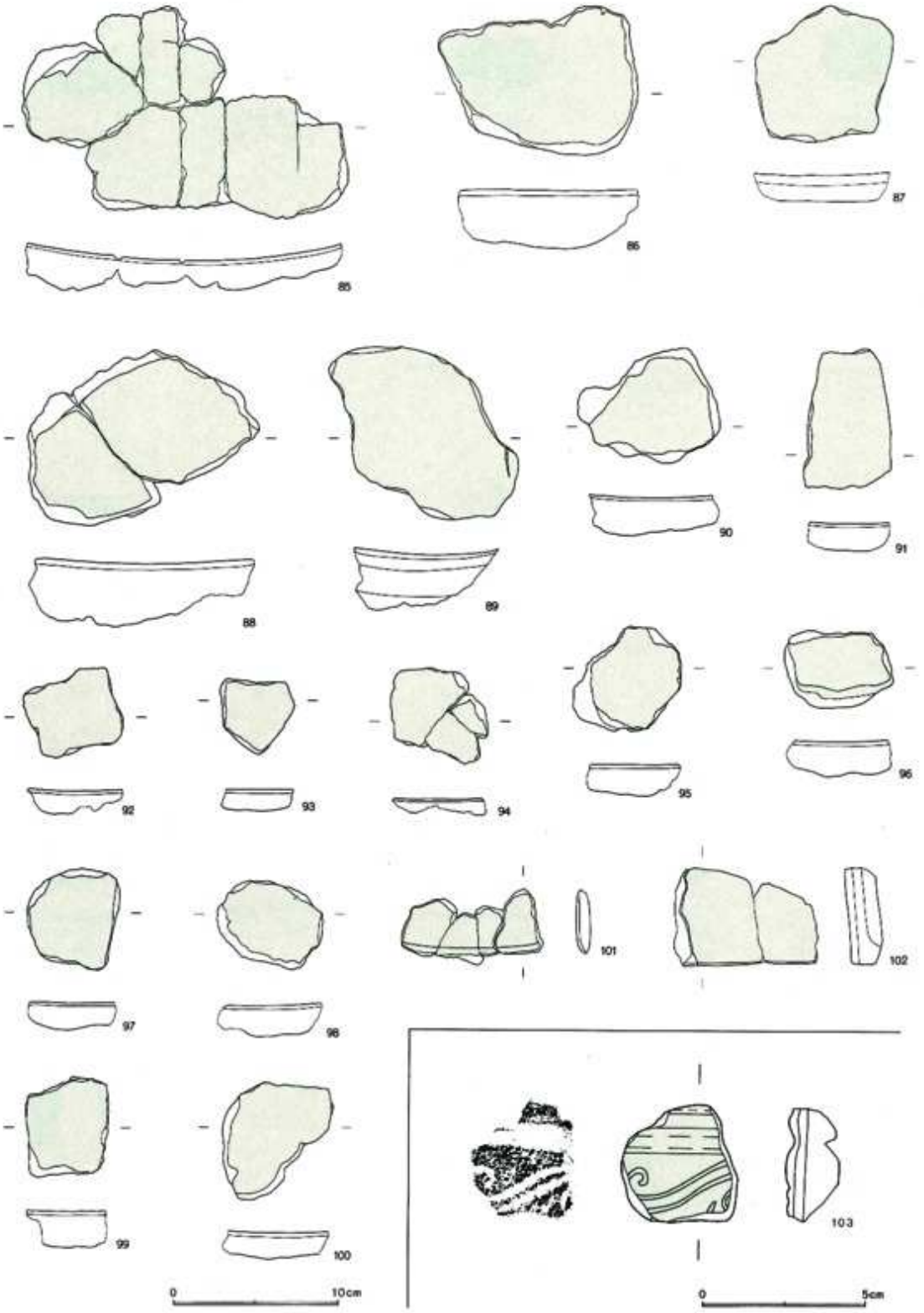
第302図　第10鋳造遺構群出土遺物(3)



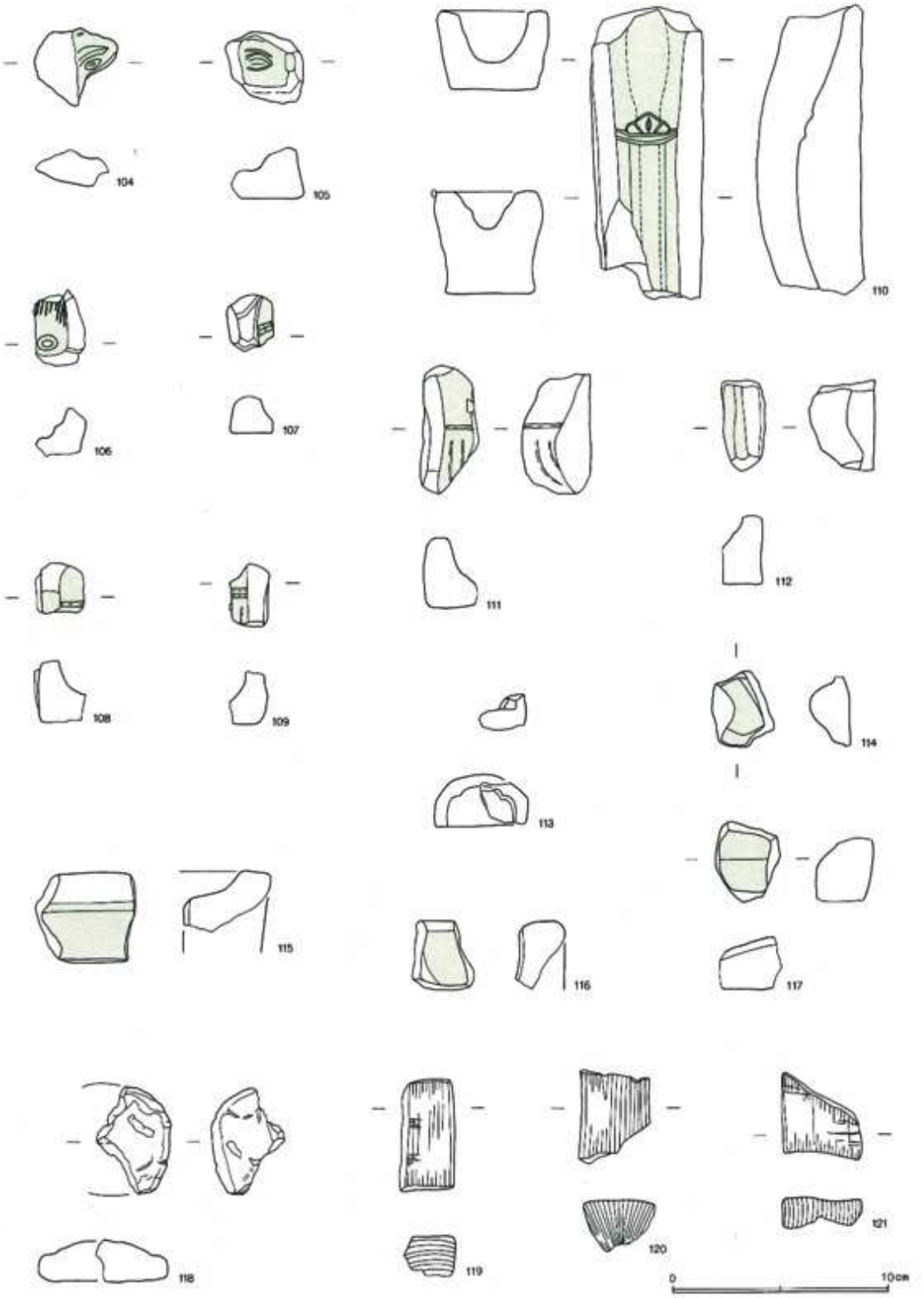
第303図　第10鋳造遺構群出土遺物(4)



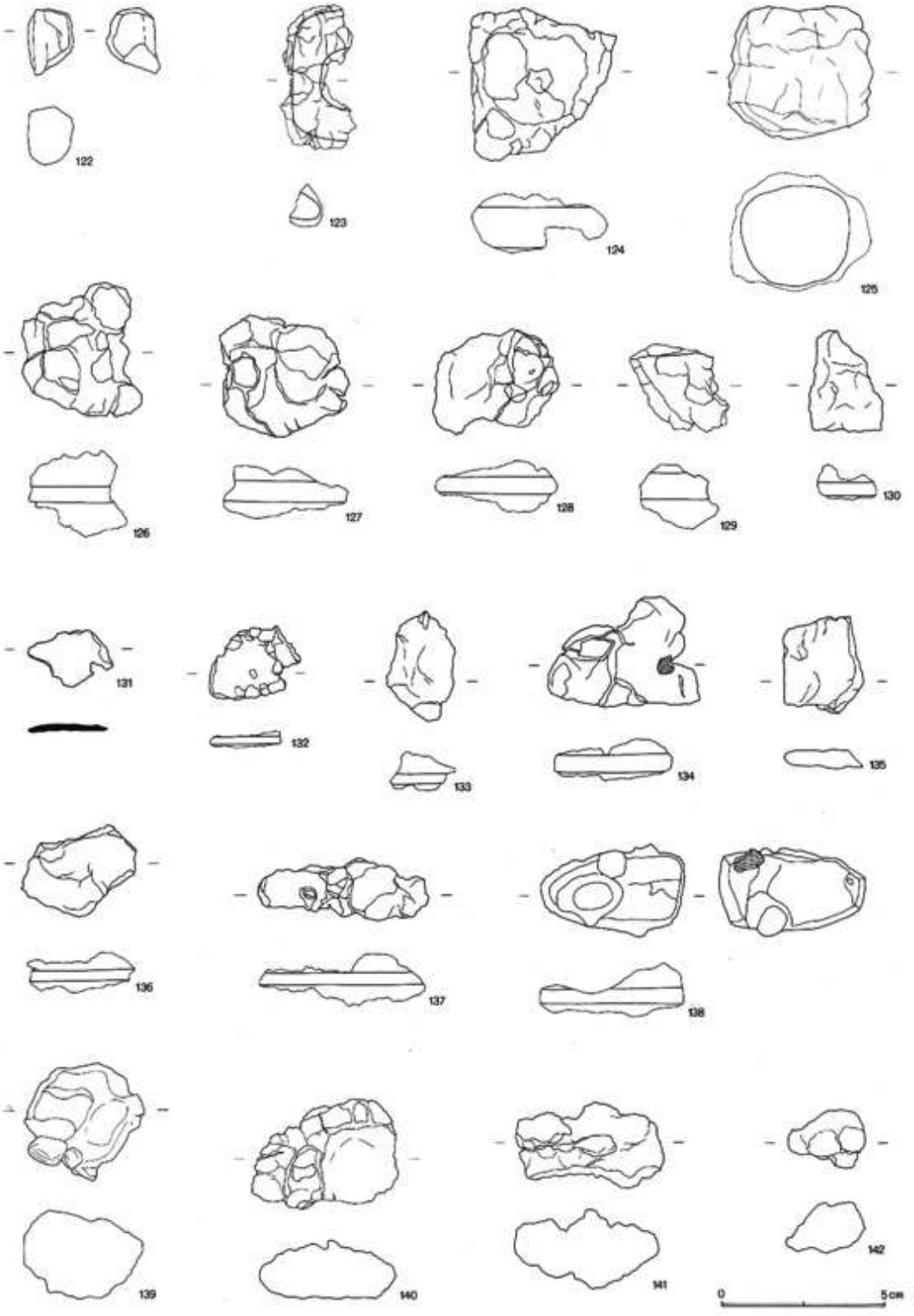
第304図　第10鋳造遺構群出土遺物(5)



第305図　第10鋳造遺構群出土遺物(6)



第306図　第10鋳造遺構群出土遺物(7)



第307図　第10鋳造遺構群出土遺物(8)

18・20～22は笠型部分である。天井に張りをもち先端に二条の沈線を回す。23～68は横・縦帯部分である。特に、25～31は上帯から乳の間にかけての鋳型片であり、乳は小さな径1.0cm、深さ0.6の円筒形で表現され、乳の間には推定4×4個の乳が配されていたものと考えられる。47・49は縦帯が撞座部分と交わる位置の破片と見られる。

獣脚は106が長脚の鋳型で中央に三菱形文が付きその下に二条の沈線が横方向に付く。その他は獅噛の獣脚である。

容器鋳型は115～117でいずれも小片であるため全体は不明である。

木炭は119～121である。炭化材同定の結果コナラ属アカガシ亜種の一種であることが判明した。

銅塊とした122は、指頭大の青銅塊片で具体的な製品名は指摘できない。水平部を仮に上面にすると側面の一面のみが垂直気味に立ち、平面的にはその部分のみが円弧を描く。他の側面から下面は不定形な破面となる。表面全体に広く褐色の付着物が付き、部分的に青灰色の緑青が露出する。滓は見られず、本体は全て青銅かと見られる。

鉄塊は123～142である。123～138は鉄製品の破片と見られ、特に、123は鉄鍋の内耳部分の破片と思われる。

第10群出土遺物観察表　(第300～307図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	産地
1	片口鉢	25.6	5.5		C	C	橙褐色	5%	Q－14－1－2	在地

第10群出土鋳造遺物観察表　(第300～307図)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
2	羽口	4.3	7.2	1.9	50	直径 (23.6)	Q－15－m－2	羽口
3	鉄滓	7.0	8.1	3.9	363		Q－14－c－9　分析資料№24	壁1
4	銅滓	2.8	4.8	2.6	30.4		Q－14－i　分析資料№18	他の滓
5	銅滓	2.8	3.3	2.3	15.0		Q－14－h－3　分析資料№25	他の滓
6	金槌	9.8	4.7	4.7	428.8		SSK1　分析資料№2	塊1
7	梵鐘　文字	2.6	1.7	1.2	8		SSK7	鋳型
8	梵鐘　文字	4.0	3.7	1.3	15		第1地点　Q－14－h－5	鋳型
9	梵鐘　文字	4.4	3.0	0.9	14		第1地点　Q－14－h－5	鋳型
10	梵鐘　文字	2.7	1.9	1.2	8		SSK7	鋳型
11	梵鐘　撞座			2.3	224	直径　11.0	SSK7№1	鋳型
12	梵鐘　撞座	5.1	7.0	2.3	75		SSK5第1地点№21	鋳型
13	梵鐘　龍頭	5.4	8.9	3.3	107		第2号炉№1,2	鋳型
14	梵鐘　龍頭	10.3	9.5	5.2	443		SSK7№71	鋳型
15	梵鐘　龍頭	8.3	5.7	4.6	232		SSK7№126	鋳型
16	梵鐘　龍頭	8.8	8.8	3.6	214		SSK7№134	鋳型
17	梵鐘　龍頭	6.1	3.6	2.5	58		Q－15－i－8	鋳型
18	梵鐘　笠形	8.5	15.3	1.0	135		SSK7№102	鋳型
19	梵鐘　龍頭	6.6	5.5	4.4	131		SSK7№48	鋳型
20	梵鐘　笠形	8.3	13.3	2.0	184		SSK7№52,59	鋳型
21	梵鐘　笠形	4.8	7.3	1.9	54		SSK7№16	鋳型
22	梵鐘　笠形	5.9	6.7	1.5	62		SSK7№112,144	鋳型
23	梵鐘　中帯	6.3	10.0	2.1	156		SSK7№122	鋳型
24	梵鐘　中帯	11.2	8.9	2.1	228		SSK7№100　Q－14－R－5	鋳型

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
25	梵鐘 上帯	9.5	14.1	1.7	213		SSK7No.58, 127, 128	鋳型
26	梵鐘 上帯	8.2	12.3	1.9	175		SSK7No.139	鋳型
27	梵鐘 上帯	8.3	9.4	2.0	157	横帯幅0.7 帯間2.3	SSK7No.120	鋳型
28	梵鐘 乳	(2.9)	5.9	(2.6)	100		SSK7No.43	鋳型
29	梵鐘 乳	2.2	5.2	0.9	10		SSK7No.141	鋳型
30	梵鐘 乳	(1.4)	3.3	1.1	15		SSK7No.42	鋳型
31	梵鐘 上帯	5.3	11.7	1.5	90		SSK7	鋳型
32	梵鐘 中帯	4.2	9.5	1.5	76		SSK7No.46,95	鋳型
33	梵鐘 中帯	4.5	7.8	2.0	73		SSK7No.14	鋳型
34	梵鐘 中帯	9.8	7.8	1.7	96		SSK7No.5	鋳型
35	梵鐘 中帯	9.4	5.4	2.2	125		SSK7No.78, 98	鋳型
36	梵鐘 中帯	8.8	5.6	1.8	102		SSK7No.49, 86	鋳型
37	梵鐘 上帯	6.5	6.4	1.5	56		SSK7No.103	鋳型
38	梵鐘 中帯	4.7	7.4	1.5	69		SSK7	鋳型
39	梵鐘 中帯	5.7	3.1	1.6	40		SSK7No.8	鋳型
40	梵鐘 中帯	4.3	6.4	1.8	60		SSK7No.32	鋳型
41	梵鐘 中帯	4.3	5.9	1.8	38		SSK5第1地点No.20	鋳型
42	梵鐘 中帯	5.2	4.7	1.8	50		SSK7No.52	鋳型
43	梵鐘 中帯	4.4	4.7	1.9	44		SSK7No.10	鋳型
44	梵鐘 中帯	6.7	6.1	1.5	60		SSK7No.107	鋳型
45	梵鐘 中帯	6.2	6.1	2.5	110		SSK7No.80	鋳型
46	梵鐘 中帯	5.7	8.3	2.3	178		SSK7No.89	鋳型
47	梵鐘 中帯	5.6	4.3	1.4	30		SSK7No.37 覆土	鋳型
48	梵鐘 中帯	3.4	3.2	1.1	13	帯幅0.7	SSK7No.115	鋳型
49	梵鐘 中帯	4.9	5.6	1.5	45		SSK7No.60	鋳型
50	梵鐘 中帯	4.0	3.6	0.8	15	帯幅0.8 帯間2.1	SSK5第1地点	鋳型
51	梵鐘 中帯	3.6	5.0	1.5	28	帯幅0.7	SSK5第1地点	鋳型
52	梵鐘 中帯	4.2	2.3	1.8	16	帯間2.7	SSK5第1地点 Q−14−h−5	鋳型
53	梵鐘 中帯	3.0	4.3	0.8	15		SSK5第1地点No.17	鋳型
54	梵鐘 中帯	2.4	4.4	1.4	13		SSK5第1地点 Q−14−h−5	鋳型
55	梵鐘 縦帯	7.3	4.5	1.4	100		SSK7No.104	鋳型
56	梵鐘 縦帯	6.7	6.3	2.4	170		SSK7No.20	鋳型
57	梵鐘 縦帯	5.1	5.3	1.9	35		SSK7No.109	鋳型
58	梵鐘 縦帯	3.3	4.9	1.8	46		SSK7No.87	鋳型
59	梵鐘 縦帯	3.8	3.4	1.4	38		SSK7No.21	鋳型
60	梵鐘 縦帯	3.5	4.2	1.8	30		SSK7No.45	鋳型
61	梵鐘 縦帯	4.2	3.1	1.3	16		SSK7覆土	鋳型
62	梵鐘 縦帯	2.7	4.6	1.9	50		SSK7覆土	鋳型
63	梵鐘 縦帯	3.6	4.5	1.6	37		SSK7No.137	鋳型
64	梵鐘 縦帯	4.8	4.5	1.8	55		SSK7No.86	鋳型
65	梵鐘 縦帯	4.5	4.1	1.8	55		SSK7覆土	鋳型
66	梵鐘 縦帯	4.3	4.1	1.5	35		SSK7	鋳型
67	梵鐘 縦帯	2.9	4.3	1.5	23		SSK7No.81	鋳型
68	梵鐘 縦帯	3.6	3.2	1.5	20		SSK7No.58	鋳型
69	梵鐘	4.1	5.4	1.9	48		SSK7No.17	鋳型
70	梵鐘 縦帯	4.0	4.1	1.9	36		SSK7No.19	鋳型
71	梵鐘	4.9	4.7	2.4	50		SSK7No.82	鋳型
72	梵鐘	6.6	5.2	1.9	85		SSK7No.9	鋳型
73	梵鐘	5.5	4.8	2.9	120		SSK7No.83	鋳型

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
74	梵鐘	6.0	7.1	2.2	146		SSK7№22	鋳型
75	梵鐘	8.9	4.9	2.4	120		SSK7	鋳型
76	梵鐘	7.9	5.1	1.8	75		SSK7№23	鋳型
77	梵鐘	6.2	5.9	2.3	110		SSK7	鋳型
78	梵鐘	6.1	6.7	1.9	100		SSK7№29	鋳型
79	梵鐘　中帯	7.8	5.2	2.0	95		SSK7	鋳型
80	梵鐘	11.9	7.3	1.7	225		SSK7№73，79，106	鋳型
81	梵鐘	8.6	7.5	1.7	140		SSK7№47	鋳型
82	梵鐘　駒の爪	2.3	7.8	3.2	85		SSK7№97	鋳型
83	梵鐘　駒の爪	2.1	6.7	3.7	140		SSK7№76	鋳型
84	梵鐘　ジョウ	4.9	2.0	2.1	63	直径（30.4）	SSK7	鋳型
85	梵鐘	19.1	17.0	2.4	410		SSK5	鋳型
86	梵鐘	8.0	10.6	3.5	290		SSK5№11	鋳型
87	梵鐘	8.1	8.3	1.5	118		SSK5第3地点	鋳型
88	梵鐘	7.3	13.1	3.7	380		SSK5№49	鋳型
89	梵鐘	9.4	9.6	3.6	256		SSK5№49　分析資料№36	鋳型
90	梵鐘	5.9	7.5	2.4	105		SSK5№35	鋳型
91	梵鐘	8.4	5.3	1.7	76		SSK5第2地点	鋳型
92	梵鐘	4.7	5.7	1.4	33		SSK5№1	鋳型
93	梵鐘	4.1	4.2	1.3	25		SSK5№37	鋳型
94	梵鐘	4.8	5.5	1.0	28		SSK5№6	鋳型
95	梵鐘	6.0	5.4	1.9	68		SSK5№41	鋳型
96	梵鐘	3.3	5.6	2.1	65		SSK5№36	鋳型
97	梵鐘	5.2	5.1	1.6	48		SSK5№5	鋳型
98	梵鐘	4.6	5.8	1.9	54		SSK5№32	鋳型
99	梵鐘	5.4	4.8	2.2	65		SSK5№28	鋳型
100	梵鐘	6.4	5.5	1.6	70		SSK5第2地点	鋳型
101	梵鐘　中子	3.8	8.4	0.8	30		SSK7Q－14－h－5	鋳型
102	梵鐘　合わせ	5.8	8.1	1.9	121		SSK5第2地点	鋳型
103	梵鐘　草の間	3.6	3.6	1.7	20		SSK1	鋳型
104	獣脚	3.5	3.7	1.5	10		Q－14－h－2	鋳型
105	獣脚	3.1	3.3	2.4	18		Q－14－h－9	鋳型
106	獣脚	3.5	2.3	2.2	12		Q－14－d－5	鋳型
107	獣脚	2.5	2.2	1.7	8		Q－14－d－6	鋳型
108	獣脚	2.3	2.3	2.4	10		Q－14－d－1	鋳型
109	獣脚	2.9	1.9	1.7	11		Q－14－h－5	鋳型
110	獣脚	13.5	3.2	4.9	320		Q－14－h№1	鋳型
111	獣脚	5.9	2.5	3.2	33		Q－14－h－9	鋳型
112	獣脚	4.2	3.2	1.9	22		Q－15－a－3	鋳型
113	獣脚	1.8	2.1	1.4	5		Q－14－d－6	鋳型
114	獣脚	3.5	2.7	1.8	10		Q－15－i－2	鋳型
115	容器	4.7	4.2	1.8	45		SSK1	鋳型
116	容器	3.2	2.9	2.1	14		SSK1	鋳型
117	容器	3.6	3.0	2.5	21		SSK1	鋳型
118	半球状土製品			1.9		直径（6.0）	Q－14－g－3	土器
119	木炭	5.1	2.5	1.9	13		SSK2　樹種同定№1	木炭
120	木炭	4.3	3.1	2.4	10		SSK2　樹種同定№2	木炭
121	木炭	3.7	3.7	1.4	7		SSK2	木炭
122	銅塊	1.9	1.4	1.2	11.6		Q－14－o－6　分析資料№7	銅1

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
123	鉄塊系遺物	2.0	4.2	1.2	12.6		SSK2	塊2
124	鉄塊系遺物	4.3	4.1	1.2	29.3		SSK1	塊2
125	鉄塊系遺物	3.9	4.3	3.5	93		Q−15−e	塊1
126	鉄塊系遺物	4.0	3.0	0.5	30.9		SSK1	塊2
127	鉄塊系遺物	3.6	3.9	0.6	22.4		SSK1	塊2
128	鉄塊系遺物	2.7	3.7	0.5	25.9		SSK1	塊2
129	鉄塊系遺物	2.4	2.3	0.8	15.5		SSK1	塊2
130	鉄塊系遺物	3.0	1.8	0.4	6.8		SSK1	塊2
131	銅滓	1.6	2.4	0.1	1.5		SSK1	銅1
132	鉄塊系遺物	2.0	2.2	0.2	5.4		SSK1	塊2
133	鉄塊系遺物	3.3	2.0	0.3	8.1		SSK5	塊2
134	鉄塊系遺物	3.2	3.7	0.5	16.5		SSK5	塊2
135	鉄塊系遺物	2.7	2.5	0.6	8.8		Q−15−m−3	塊2
136	鉄塊系遺物	2.4	3.2	0.3	14.0		Q−14−g−9	塊1
137	鉄塊系遺物	1.7	5.1	0.4	13.5		Q−14−d−3	塊1
138	鉄塊系遺物	2.7	4.4	1.3	30		Q−14−h−3	塊1
139	鉄塊系遺物	3.5	3.5	2.5	53		Q−14−n	塊1
140	鉄塊系遺物	2.8	4.2	1.7	27.8		SSK2	塊2
141	鉄塊系遺物	2.3	4.4	2.3	27.3		SSK1	塊2
142	鉄塊系遺物	1.7	2.3	1.5	6.5		Q−14−g−9	塊1

第38表　第10鋳造遺構群一覧表

新番号	旧番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向
SS−10 SSK01	SS−10 SK01	Q−14−k	楕円形	3.05	1.92	0.42	N−56°−E
SSK02	SK02	Q−14−p	楕円形	1.18	0.98	1.40	N−81°−E
SSK03	SK03	Q−14−c	長方形	1.74	1.27	0.25	N−67°−E
SSK04	SK04	Q−14−g	楕円形	1.84	1.55	0.21	N−1°−E
SSK05	SK05	Q−14−l	楕円形	3.42	2.57	0.45	N−29°−E
SSK06	SK06	Q−14−d	円形	0.82		0.17	N−1°−W
SSK07	SK07	Q−14−h	長方形	2.14	1.21	0.45	N−74°−E
SSK08	SK08	Q−14−d	不整形	2.00	0.90	0.03	N−37°−W
SSK09	SK10	Q−14−d	円形	0.55		0.17	N−6°−E
第1号鋳込み	第1鋳込み	Q−15−a	円形				
第1号炉	1号炉	P−14−p					
第2号炉	2号炉	Q−14−d	方形	0.70	0.67	0.07	
第3号炉	3号炉	Q−14−d	円形	0.60		0.07	
第4号炉	4号炉	Q−14−h	円形	0.35			
第1地点	第1地点	Q−14−h					
第2地点	第2地点	Q−14−l					
第3地点	第3地点	Q−14−k					
第4地点	第4地点	Q−14−g					

g　第11鋳造遺構群

東側の二段からなる緩斜面の中間にあたるテラス部分および第２斜面に遺構の広がりを持つ。南側には第10・12鋳造遺構群、北側には第13鋳造遺構群が存在する。また、東側には第30号溝跡によって区切られている。本群は第１～７号鋳造土壙、第１号炉、第１・２号鋳込み跡の遺構で構成されている。また、周辺には多くのピットを検出した。

西側には帯状に浅い掘り込みの段が確認され、テラス部分が全体に整地されフラットな面を造っている。断面観察によると第４層の焼土粒子・小砂利を少量含む黒褐色土が整地層に当たると考えられる。

本群は全体に鋳造遺物や焼土塊・焼土粒子・炭化物を多量に含む黒褐色砂質土の堆積層に覆われていた。この堆積層を１ｍのメッシュ(小グリッド)単位に遺物を取り上げた。10～15cm程掘り下げるとテラス部分では、第１～７号鋳造土壙、第１号炉を確認した。西寄りの部分には広範囲に焼土の広がりが見られた。また、第４号鋳造土壙の北壁部分には第１・２号鋳込み跡を確認した。

出土遺物は、鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鋳型、土器、羽口等の鋳造遺物を検出した。本群では第２号鋳造土壙内から鉄製の曲がりカンナを検出。また、第３号鋳造土壙の東側では小型の仏像鋳型・飾り金具鋳型等を検出した。遺構に伴う鋳型片は少量であるが、グリッド中からは容器・梵鐘・獣脚・仏具等の鋳型を多く検出した。

本群の特徴は、第一は、規模の小さい鋳造土壙で構成されている点。特に、第２号鋳造土壙は方形の底面に掛け木痕をもつ梵鐘鋳造土壙と考えられる。また、第４号鋳造土壙は長方形で西側に大きな礫を残存させている。可能性としては鞴座を想定できるが不明である。第二は検出された鋳型の多くは仏具の小型品である。小仏像・獣脚・容器・磬・飾り金具・水瓶の注ぎ口・鈕等を検出。また梵鐘鋳型は撞座破片や小型の宝珠部分を検出した。

遺構

第１号炉跡（第310図）

第11鋳造遺構群のなかでも北西に位置する。東側に第１号鋳造土壙が存在する。北側には第27号溝跡が存在する。形態は円形である。中央に石が据えられており、周囲には粘土が焼土化し、下面には黄褐色の粘土が張り込んであった。更に、粘土層の下面からも赤褐色の砂質の焼土層を検出した。規模は直径33cm、深さ８cmである。

第１号鋳造土壙（第310図）

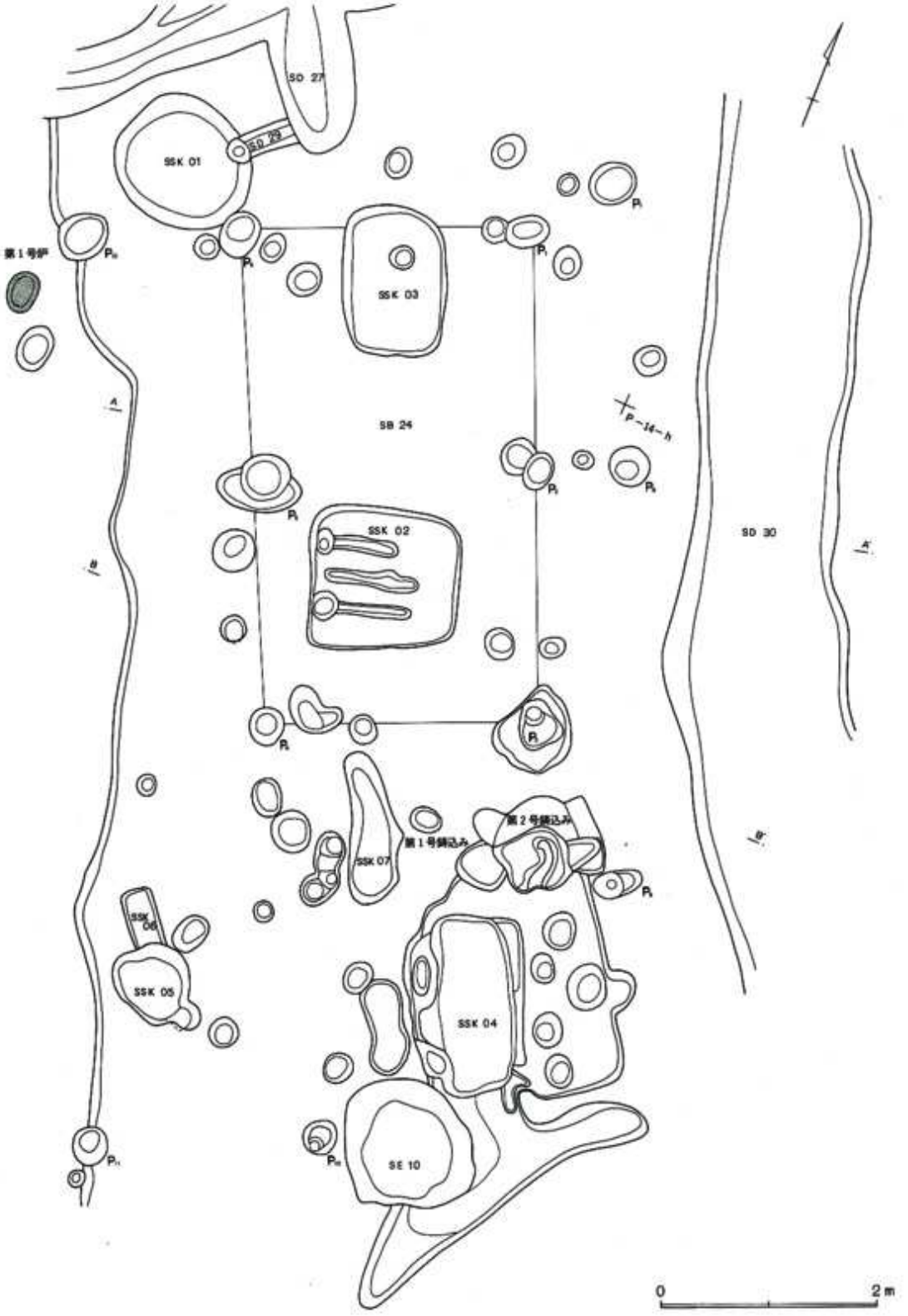
本土壙は第11鋳造遺構群の北側に位置する。東側緩斜面のテラス部分上面で検出した。北側には第27・29号溝跡、西側には第１号炉、東側には第３号鋳造土壙を検出した。

形態は竪穴状に掘り込まれた円形である。西側には整地層が見られこの層を切り込んで土壙を造っている。底面は整地面よりやや深く平坦である。規模は直径1.30m、深さ13cmである。覆土は断面観察によると第３～５層が当たり炭化物・焼土粒子を少量含む黒褐色のやや砂質の土である。

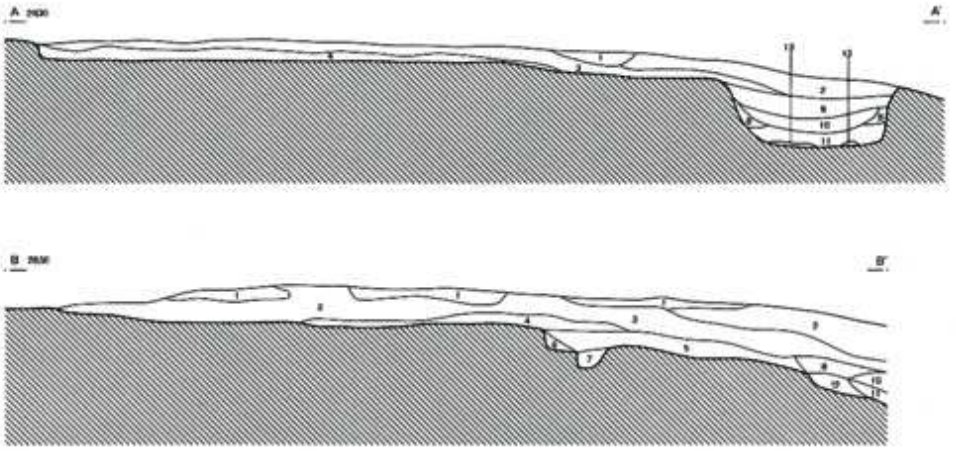
検出した鋳造遺物は少量であり、鋳型片は認められない。

第２号鋳造土壙（第310図）

本土壙は第11鋳造遺構群の中央に位置し、東側緩斜面のテラス部分に検出した。北側には第３号



第308図　第11鉄造遺構群全体図(1)



1　黒褐色土　小砂利、焼土粒子を少量含む。
2　黒褐色砂質土　焼土塊、炭化物、焼土粒子を多量含む。
3　黒褐色砂質土　炭化物、焼土粒子を多量含む。
4　黒褐色土　焼土粒子、小砂利を少量含む。
5　黒褐色土　焼土粒子、炭化物、小砂利を少量含む。
6　黒褐色土　小砂利、焼土粒子を微量含む。
7　黒褐色土　小砂利、焼土粒子を微量含む。
8　黒褐色砂質土　焼土粒子を多量、炭化物を少量含む。
9　黒褐色砂質土　焼土塊、焼土粒子、炭化物を少量含む。
10　黒褐色砂質土　焼土粒子、鉄粉を少量含む。
11　黒褐色砂質土　炭化物、焼土粒子、鉄粉を少量含む。
12　黒褐色土　小砂利、焼土粒子を微量含む。
13　暗茶褐色砂質土　炭化物、鉄粉、焼土粒子を多量含む。

0　2m

第309図　第11鋳造遺構群全体図(2)

鋳造土壙が存在し、南側には第４号鋳造土壙がほぼ主軸方向を同じくして検出した。周辺には柱穴を多く検出し第２・３号鋳造土壙の上屋と考えられる第24号掘立柱建物跡を確認した。

鋳造土壙の形態は東西に僅かに長いがほぼ正方形である。確認面で覆土を精査すると中央部分に円形に焼砂、焼土粒子を多量に含む暗褐色砂質土を検出した。その外側には黒褐色の砂質土を検出し、北壁側から鉄製の曲がりカンナを出土し、南西コーナー部分から炉壁材を検出した。覆土を掘り進むと底面に東西方向に掘り込まれた幅10～13cm程の溝状の掘り込みを検出した。溝は３条確認され西側壁際から中央やや東側まで伸び、東壁までは達していない。この内、北と南側の溝には西寄りに掘り込みの浅いピットが取りついている。この溝は第10鋳造遺構群の第１号鋳造土壙の梵鐘鋳造遺構に見られた掛け木痕と同様のものと考えられ、本土壙は規模が小型であることから半鐘を鋳込んだ梵鐘鋳造土壙の可能性が考えられる。

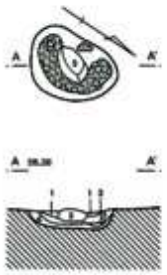
規模は長軸で1.38m、短軸で1.32m、掘り込みの深さは９cm、溝までの深さは15cmである。

出土遺物は確認面から曲がりカンナを検出した。鋳型の検出はない。

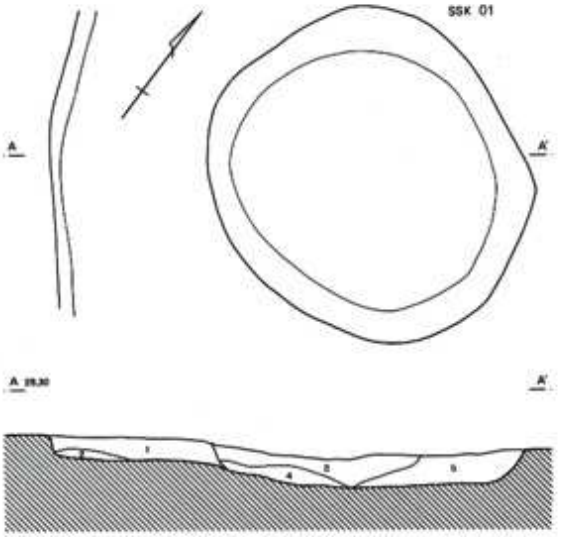
第３号鋳造土壙（第311図）

本土壙は第11鋳造遺構群の北側に位置する。東側緩斜面のテラス部分に掘り込まれていた。南側の第２号鋳造土壙と共に第24号掘立柱建物跡の内部施設にあたる。形態は南北方向に長軸をもつ長方形である。規模は長軸で1.37m、短軸で1.00m、深さ19cmである。底面は地山の小砂利混じりのローム土を利用し東側に僅かに凹みを持つがほぼ平坦である。中央やや北寄りに直径22cm、深さ12

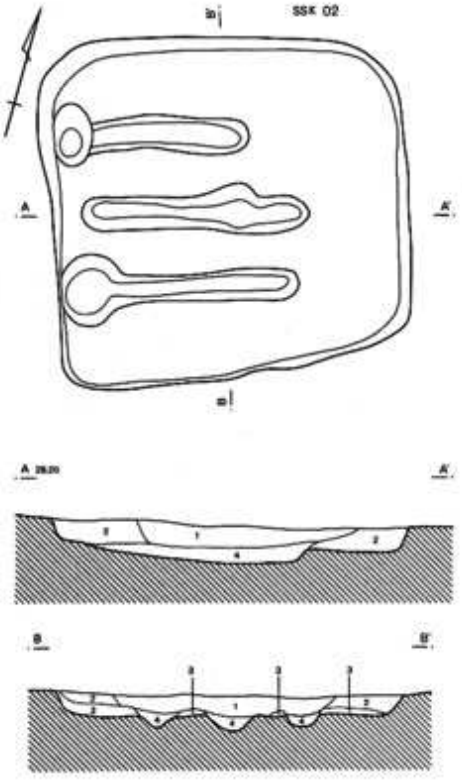
第 1 号 炉

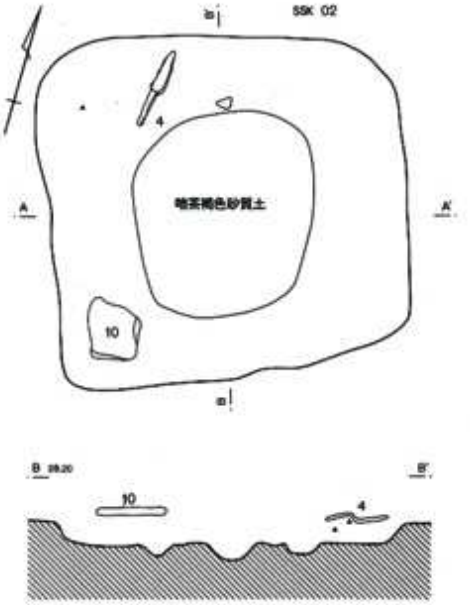


第1号炉
1　赤褐色土　焼土層。しまりよく、ややハード。
2　黄褐色土　粘土層。炭化物、焼土粒子を少量含む。
3　黄褐色土　粘土層。炭化物を微量含む。
4　赤褐色土　焼土層。非常に砂質。



第1号鋳造土壙
1　黒褐色土　焼土粒子、焼土塊を少量含む。
2　黒褐色土　混有物を殆ど含まず、砂質。
3　黒褐色土　焼砂、炭化物、焼土塊を含む。
4　黒褐色土　炭化物、焼土粒子を少量含む。
5　黒褐色土　炭化物、焼土粒子を少量含み、やや砂質。

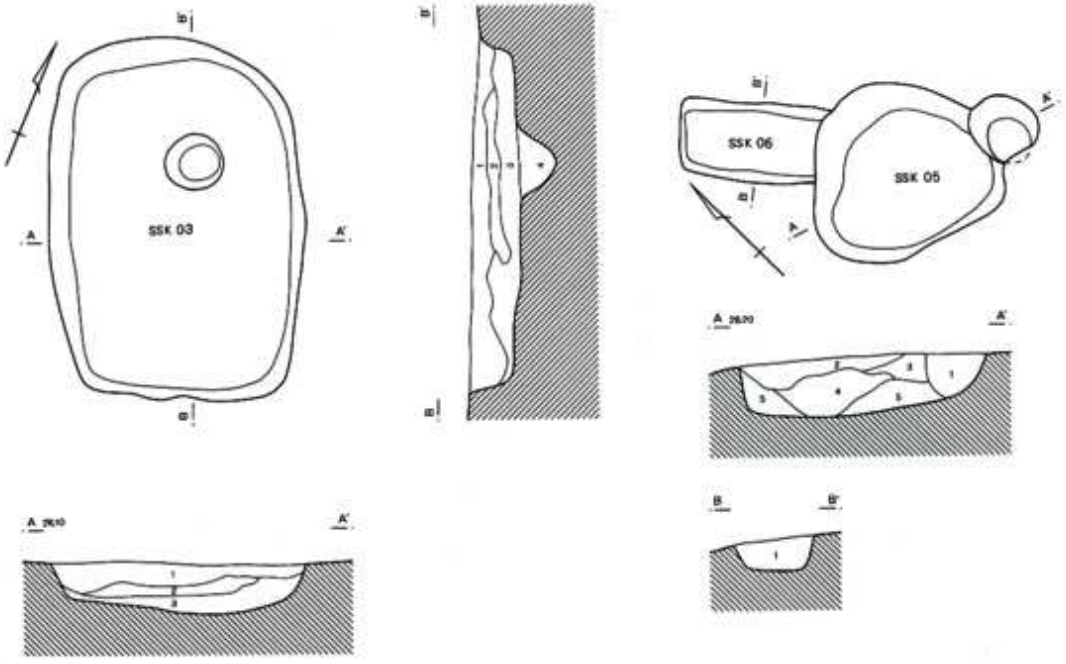




第2号鋳造土壙
1　暗褐色砂質土　焼砂、焼土粒子を多量、炭化物を少量含む。
2　黒褐色土　焼土粒子、炭化物を微量含み、やや砂質。
3　黒褐色土　焼土粒子を少量含む。
4　暗褐色砂質土　焼砂、焼土、炭化粒子を含む。

0　1m

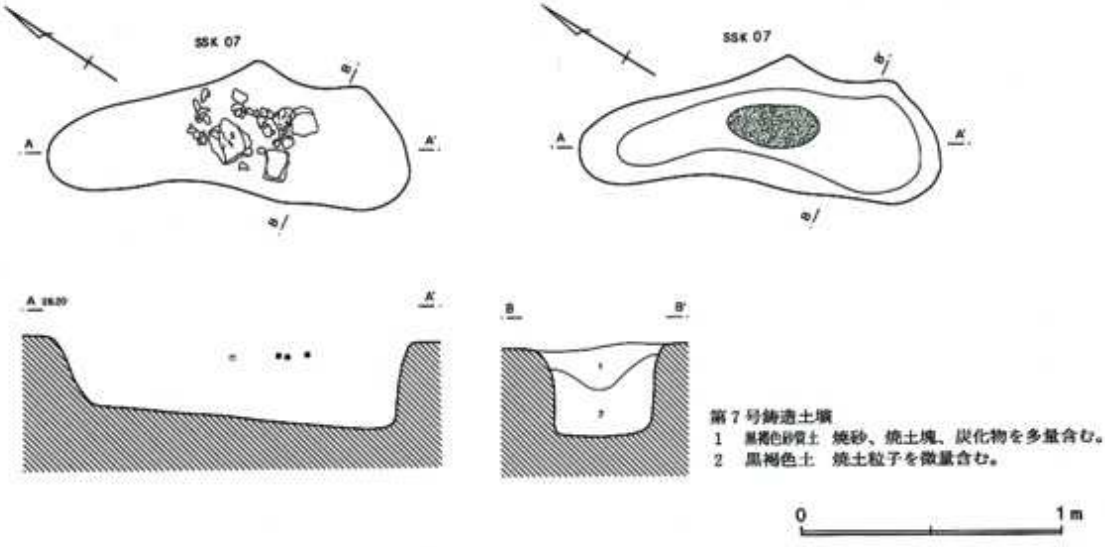
第310図　第11群第1号炉跡・第1・2号鋳造土壙



第3号鋳造土壙
1　黒褐色土　焼砂、焼土粒子、炭化物を少量含む。
2　暗褐色土　暗茶褐色ローム粒子、炭化物を少量含む。
3　黒褐色土　焼土粒子、炭化物を微量含む。
4　黒褐色土　焼土粒子、炭化物を含む。

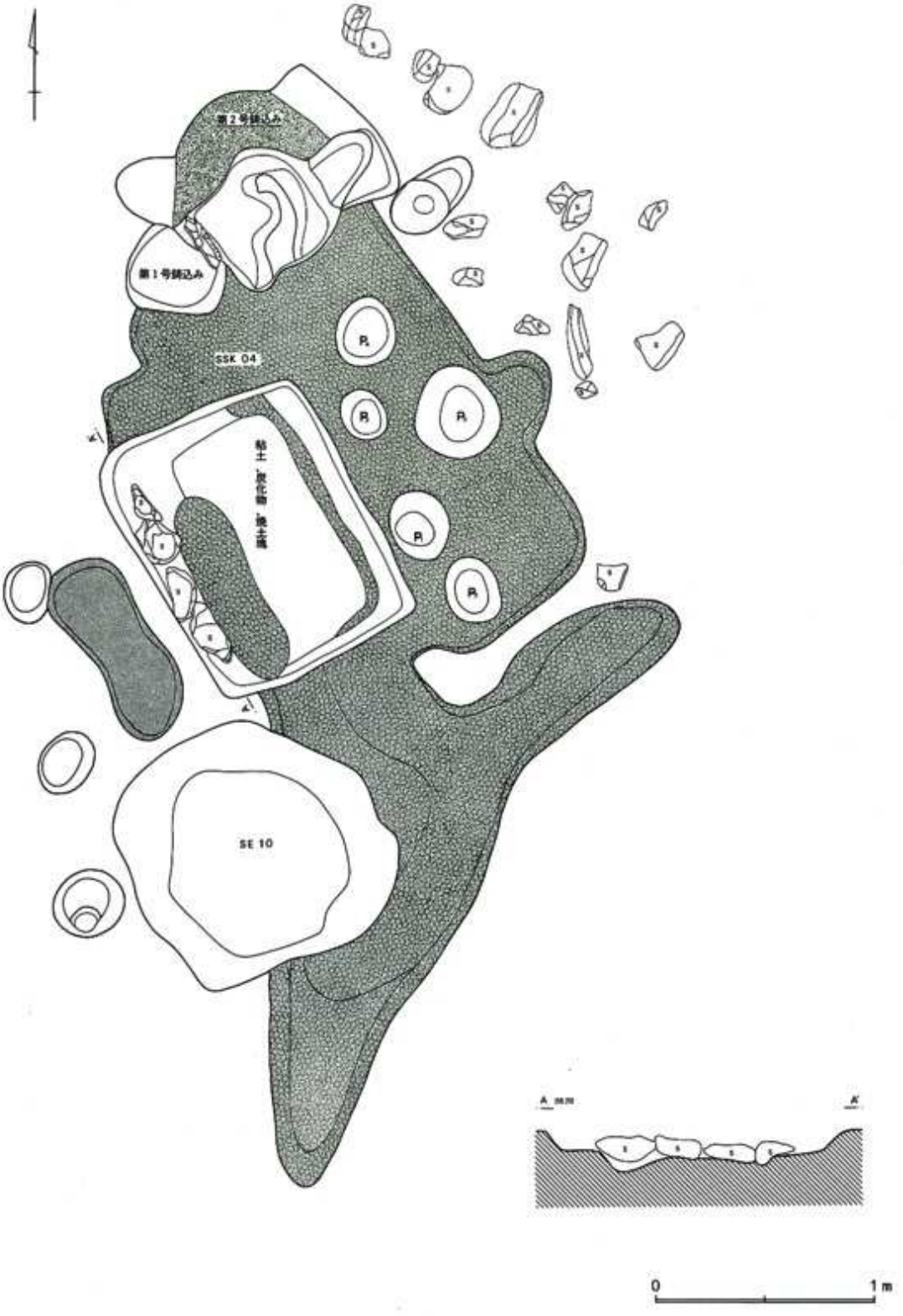
第5号鋳造土壙
1　黒褐色土　焼土粒子を少量含む。
2　黒褐色土　焼土粒子、小砂利を少量含み、やや砂質。
3　黒褐色土　焼土粒子を含み、ややハード。
4　黒褐色砂質土　焼砂、焼土粒子、炭化物を少量含む。砂質。
5　黒褐色土　小砂利、焼土粒子を少量含む。

第6号鋳造土壙
1　黒褐色土　小砂利、焼土粒子を少量含み、ややハード。

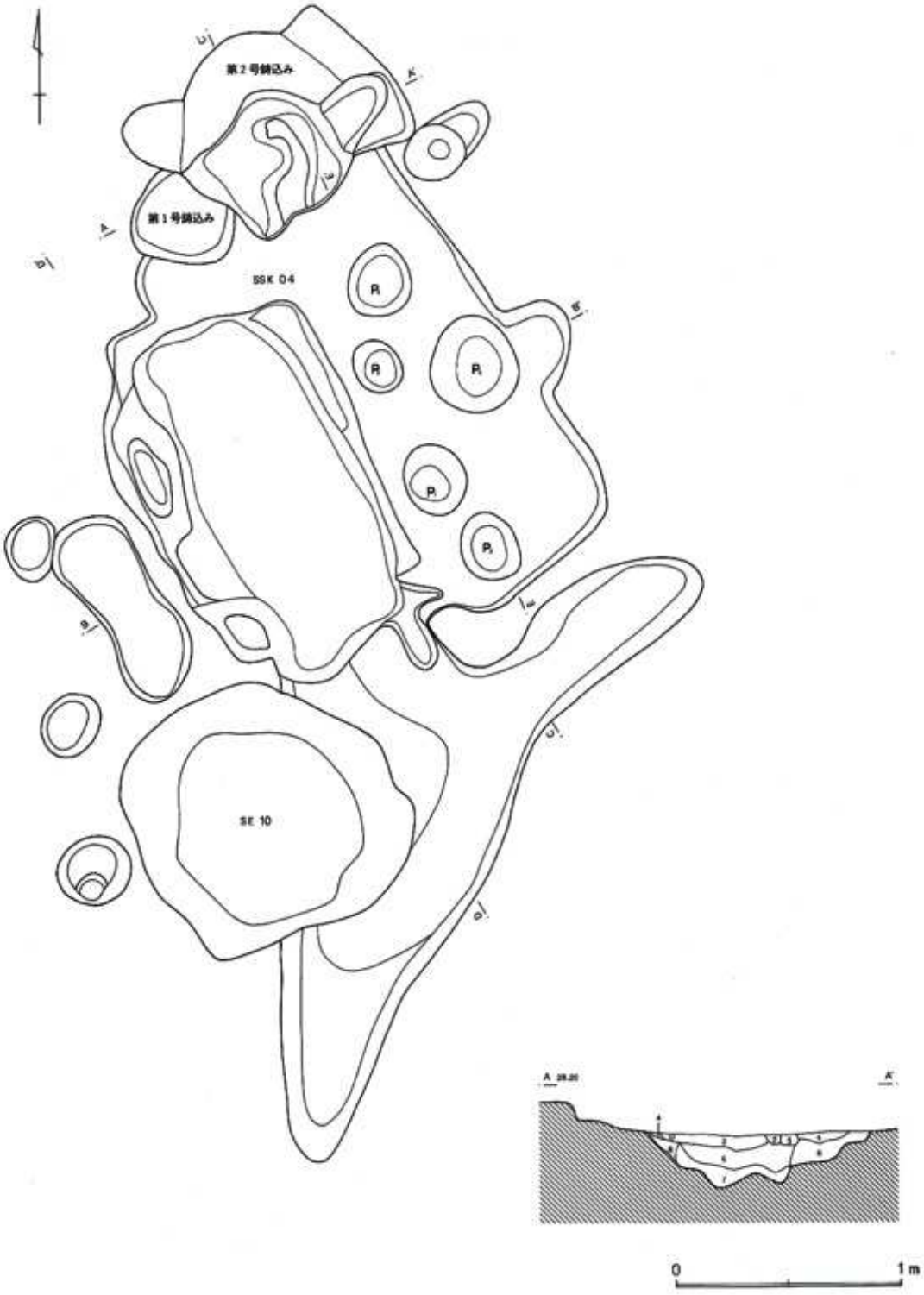


第7号鋳造土壙
1　黒褐色砂質土　焼砂、焼土塊、炭化物を多量含む。
2　黒褐色土　焼土粒子を微量含む。

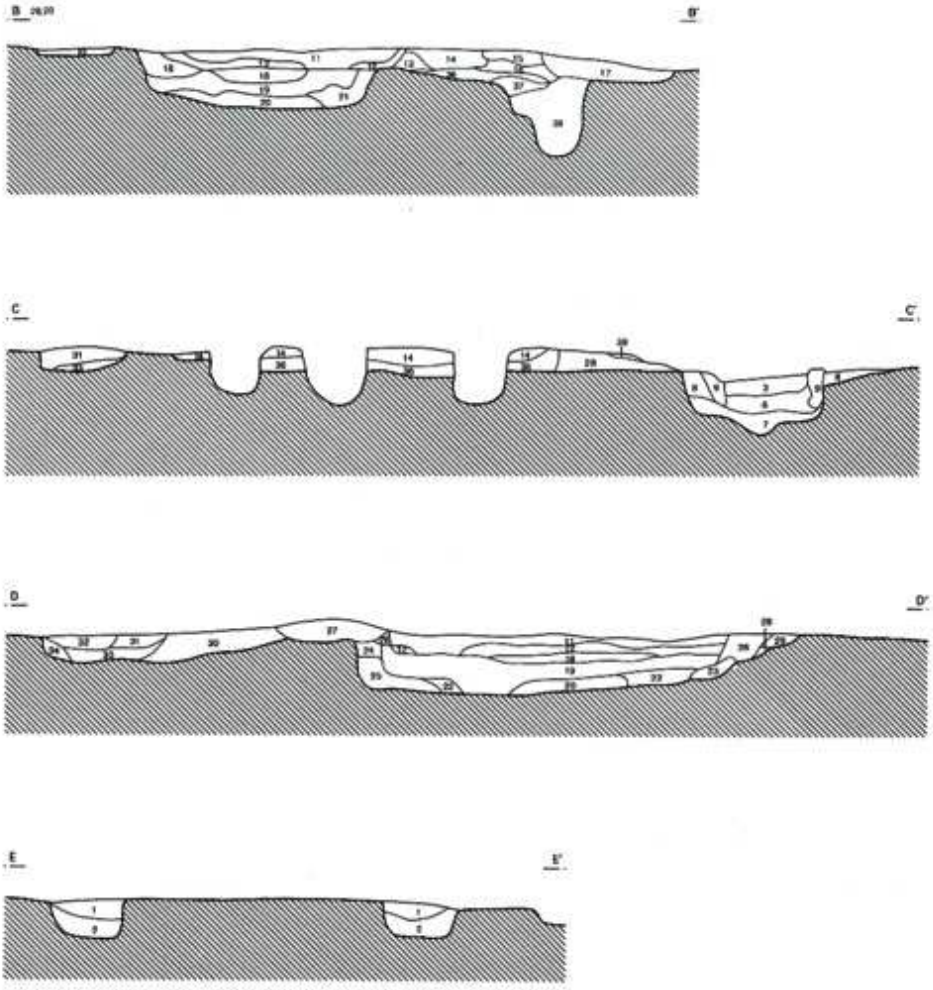
第311図　第11群第3・5～7号鋳造土壙



第312図　第11群第１・２号鋳込み跡・第４号鋳造土壙(1)



第313図　第11群第1・2号鋳込み跡・第4号鋳造土壙(2)



第２号鋳込み・第４号鋳造土壙

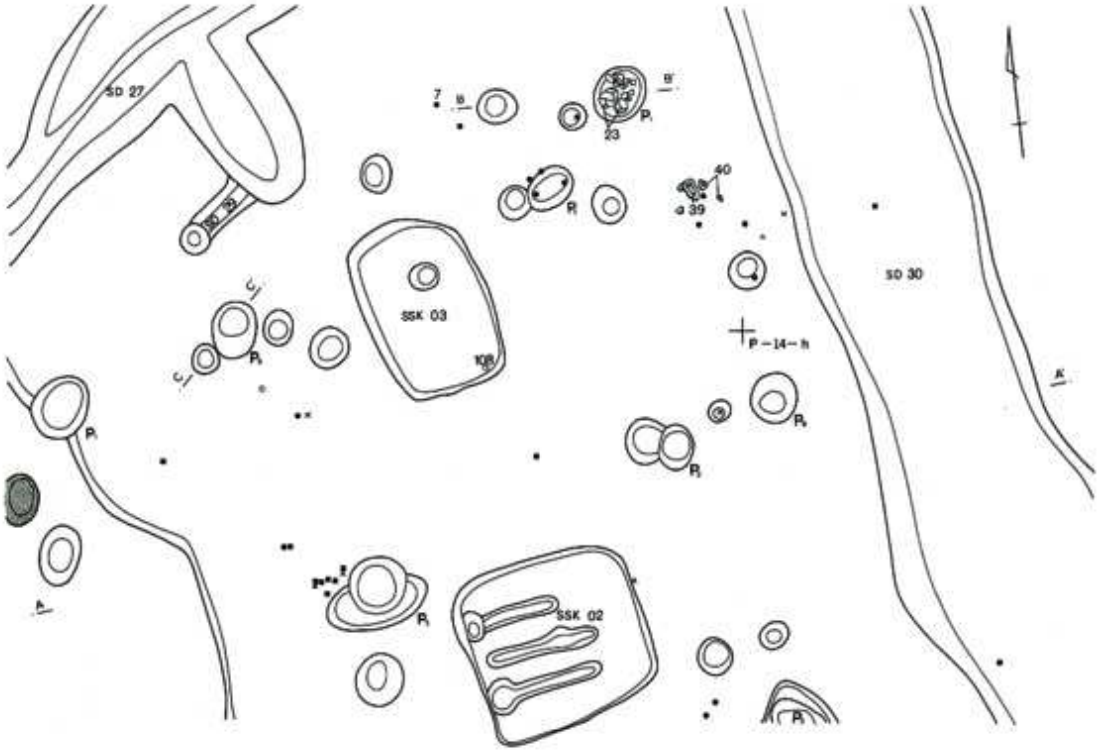
1　黒褐色砂質土　焼土、粘土粒子を少量含む。
2　黒褐色砂質土　焼土粒子を多量、ローム粒子を少量含む。
3　黒褐色砂質土　焼土粒子、炭化物を少量含む。
4　黒褐色土　焼土粒子を微量含む。
5　黒褐色砂質土　焼土・ローム粒子、炭化物を含む。
6　黒褐色砂質土　焼土粒子、炭化物、焼土塊、を少量含む。
7　黒褐色砂質土　炭化物を少量含む。
8　黒褐色砂質土　炭化物、焼土粒子を微量含む。
9　ロームブロック　炭化物を少量含む。
10　黒褐色土　焼土粒子を少量含む。
11　黒褐色砂質土　炭化物、焼土粒子を含む。
12　暗褐色砂質土　粘土、焼土粒子を多量含む。
13　黒褐色土　焼土粒子を少量含む。
14　暗褐色砂質土　粘土粒子を多量、焼土粒子も含む。
15　暗褐色土　焼土粒子、焼土塊、、炭化物を含む。
16　暗褐色土　ローム粒子を少量含む。
17　黒褐色砂質土　焼土粒子、炭化物を含む。
18　淡黄色粘土　炭化物、焼土粒子を含む。
19　黒褐色砂質土　焼砂、炭化物、焼土粒子を少量含む。
20　黒褐色砂質土　焼砂を多量、炭化物、粘土を少量含む。
21　黒褐色砂質土　焼砂、焼土粒子、炭化物を含む。
22　暗褐色砂質土　粘土、ローム土を含む。
23　黒褐色土　焼土粒子、炭化物を含む。
24　黒褐色土　焼土粒子、ロームブロックを含む。
25　黄褐色土　粘土ブロック。
26　暗茶褐色土　焼砂、粘土粒子を多量含む。
27　暗茶褐色土　焼砂、粘土粒子を多量、焼土粒子、炭化物を少量含む。
28　黒褐色土　焼土粒子を少量含む。
29　黒褐色土　粘土を少量含む。
30　黒褐色砂質土　焼土粒子、炭化物を少量含む。
31　暗茶褐色土　焼砂、粘土粒子を多量、炭化物、焼土粒子を少量含む。
32　暗茶褐色土　焼土・粘土粒子を少量含む。
33　黒褐色砂質土　炭化物、焼土粒子を少量含む。
34　黒褐色土　炭化物、焼土粒子を少量含む。
35　黒褐色土　焼土粒子を含む。
36　黒褐色土　粘土粒子を多量、炭化物、焼土粒子を少量含む。
37　黒褐色砂質土　炭化物、焼土粒子を少量含む。
38　黒褐色砂質土　炭化物、焼土粒子を少量含み、しまりゆるい。
39　黒褐色砂質土　炭化物を微量含む。

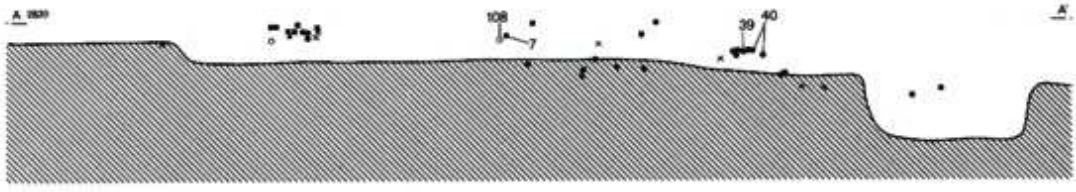
第４号鋳造土壙　Ｐｉｔ－３・４

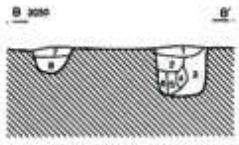
1　暗褐色砂質土　焼砂、焼土・粘土粒子、炭化物を含み、ハード。
2　黒褐色土　焼土粒子、炭化物を含む。

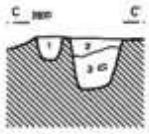
0　1m

第314図　第11群第１・２号鋳込み跡・第４号鋳造土壙(3)







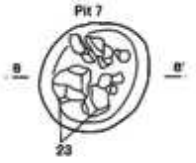


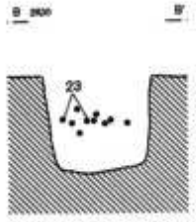
B－B'

1　黒褐色土　焼土粒子、炭化物を含み、やや砂質。
2　黒褐色土　焼土、粘土粒子、炭化物を含む。
3　黒褐色土　小砂利、焼土粒子を含む。
4　暗褐色砂質土　焼砂を多量、炭化物を微量含む。
5　黒褐色土　焼土粒子を微量含み、やや粘性がある。
6　暗褐色砂質土　焼砂を多量含む。
7　黒褐色土　焼土粒子を少量、炭化物を微量含む。
8　黒褐色土　焼土粒子、炭化物を少量含み、やや砂質。

C－C'

1　黒褐色土　焼土粒子を微量に含み、やや砂質。
2　黒褐色土　焼土粒子、炭化物少量含み、やや砂質。
3　黒褐色土　焼土粒子、炭化物を少量含み、非常に砂質。





0　2m　　0　1m

第315図　第11群遺物分布図

cmのピットを伴う。壁はほぼ垂直に立上がっている。断面観察によると焼砂、焼土粒子、炭化物を少量含む第１・３層の黒褐色土に挟まれてローム粒子を少量含む第２層の暗褐色土の堆積が見られる。

出土遺物は第１～４層中で鋳造遺物を検出した。

第４号鋳造土壙（第313図・314図）

本土壙は第11鋳造遺構群の南側に位置し、東側緩斜面のテラス部分に掘り込まれていた。南側には第10鋳造遺構群が存在する。本土壙の近接した位置には南に第10号井戸跡、東側に第30号溝跡、北側には第１・２号鋳込みを検出した。

形態は西側に掘り込まれた深い長方形の土壙を中心として東側に浅い掘り込みを持つ掘り方部分と南側に溝状に不整形をした浅い掘り込み部分から成る。更に、北側には第１・２号鋳込み跡が付設されており、第４号鋳造土壙と第１・２号鋳込み跡は一体の遺構と考えられる。また、作業面と考えられる部分から検出したピット１～５は新しい柱穴と考えられる。規模は中心の鋳造土壙が長軸1.30m、短軸1.03m、深さ22cmである。礫の据えられた部分の深さは13cmとやや浅い。底面中央部は箱型に深く鞴座の様相を窺わせる。東側の掘り方整地面は幅72cm、長さ2.15m で北側に鋳込み跡が掘り込まれている。更に、南側に溝状の掘り込みは長さ3.12m、幅0.35～1.12m である。

第一面（検出面）においては、中心施設の長方形をした掘り込みの第４号鋳造土壙を確認し、覆土は粘土、焼土塊・粒子、炭化物を多量に含む暗褐色の砂質土である。土壙周囲の北・東・南側には白色の粘土が幅20～30cm程張り込まれていた。東側部分の粘土には焼土の堆積する箇所が見られる。西側は粘土の張り込みは検出されず焼土の堆積層が帯状に確認された。

第二面（施設面）においては、鋳造土壙の覆土を取り除くと、西壁際に20～30cm程の礫が並べて据えた状態で検出された。東壁側には礫が認められなかったが遺構外の東側に礫が散在して検出され本土壙内に据えられていた可能性が考えられる。また、内部からも礫を固定し底面を整地するために貼り込まれた白色粘土を検出した。

第三面（掘り方面）においては、貼り込まれた白色粘土を取り除き地山面まで掘り上げた。周囲の粘土を張り込んだ掘り方部分は深さ10～13cm程の掘り込みをもち、底面はわずかに凹凸をもつ。

本鋳造土壙は長方形に浅く掘られた部分に白色粘土を張り込んだ整地作業面に粘土と礫で構築された鞴座をもち北側には容器鋳型を残存させる鋳込み場を持っている。しかも、東側の粘土面には残存はしないが焼土面を残すことからおそらくは溶解炉が設置されていたものと考えられる。

出土遺物は鋳造遺物を検出した。

第５号鋳造土壙（第311図）

本土壙は第10鋳造遺構群の南西側に位置する。東側緩斜面のテラス部分にあたり第６号鋳造土壙と重複する。西側には南北に伸びる浅い掘り込みの段がある。形態は円形である。東側に小ピットが切り合っている。規模は直径0.68m、深さ24cmである。断面観察によると第２・４層は焼砂、焼土粒子、炭化物を含む砂質土であることが注目されるが、鋳造土壙の性格については不明である。

出土遺物は炉壁片を少量検出した。

第６号鋳造土壙（第311図）

本土壙は第５鋳造土壙の西側に重複して検出された。形態は長方形と推定される。規模は長さ（0.57）m、

幅0.30m、深さ12cmである。覆土は焼土粒子を少量含む黒褐色土である。

出土遺物は検出されなかった。

第7号鋳造土壙（第311図）

本土壙は第2号鋳造土壙と第4号鋳造土壙の中間に位置する。形態は南北に長い不整型である。規模は長軸1.38m、短軸0.54m、深さ35cmである。覆土は第1層が焼砂、焼土塊、炭化物を含む黒褐色の砂質土で、第2層は焼土粒子を微量含む黒褐色土である。土壙の中央部分からは礫と炉壁片を検出し、その下面に焼土層を確認した。出土遺物は鋳造遺物を検出した。

第1・2号鋳込み跡（第313・314図）

第4号鋳造土壙の北壁に付設されて検出した。第1号鋳込み跡は西側に位置し、第1号を壊して第2号鋳込み跡を構築している。

第1号鋳込み跡からは容器と考えられる環状の形態をした鋳型片の一部が設置された状態で検出された。形態は円形の掘り込みと考えられる。規模は直径45cm、深さ18cmである。周辺には焼土が多く検出された。

第2号鋳込み跡からは容器鋳型片を少量検出した。形態は不整形ながらも全体としては円形をしている。底面の中央に僅かながら帯状の高まりをもつ。確認段階の状況は中心に焼土粒子を含む円形の堆積土の周囲を炭化物・粒子を多量に含んだ黒褐色の砂質土が環状に確認され、所々に焼土塊が認められた。規模は直径83cm、中心の焼土部分は60cmで、深さは25cmである。

遺物

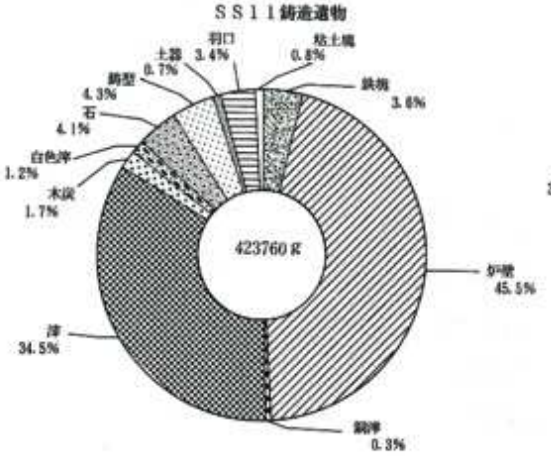
第11鋳造遺構群から検出した鋳造遺物は、全て分類計量した。その結果、鉄塊15508g、炉壁193392g、銅滓1092g、鉄滓146605g、木炭7066g、白色滓5135g、石17494g、鋳型16580g、土器2777g、羽口14512g、粘土塊3599gを計量した。この内、鋳型は容器3449g、梵鐘3146g、獣脚1609g、他の脚40g、仏具2429gを計量した。

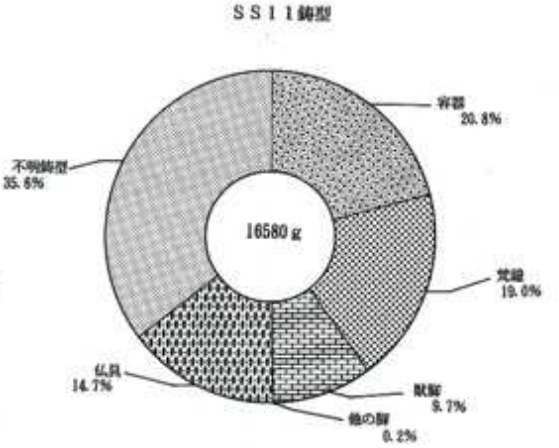
土器は1が在地産の手づくね土器皿である。2が常滑系の鉢、3が常滑系の甕である。いずれも本遺構群を覆っていた堆積層のグリッドから検出した。

道具は4の鉄製のカンナで「ハタマワシ」と考えられる。長さ28.0cm、幅3.0cm、厚さ0.8cmであった。全体に錆で覆われているためカンナ特有の刃部裏面にギザギザの目が確認できないものの先端の形状はやや尖っていることからハタマワシと考えられる。このハタマワシは中子のハタ部分が丸くなっていると製品の形がしまらないためハタマワシに黒味を少しのせ先端の側面を利用し、ハタの部分である角を整える道具である。中子削りに使う曲がりカンナや鋳型整形に使うつくろいベラ・ササベラなどの道具の一種である。

炉壁は5～10である。5・6・8は溶解炉内側の湯滓面は白色滓の付着が見られる。特に、8は表面と断面に緑青が吹き銅の溶解炉であることがわかる。また、7・9は湯滓面が黒色の強い滓が付き鉄塊の付着も見られる。しかし、9には白色滓の付着も認められることからこれらの炉壁も銅の溶解炉の可能性をもつ。10はレンガ状の粘土塊であり、湯滓面は認められない。形態は逆台形状で上面には二条の浅い沈線が弧を描く。何かの台と考えられるが不明である。一応、炉台と考え炉

第39表　第11鋳造遺構群遺物計量表(1)





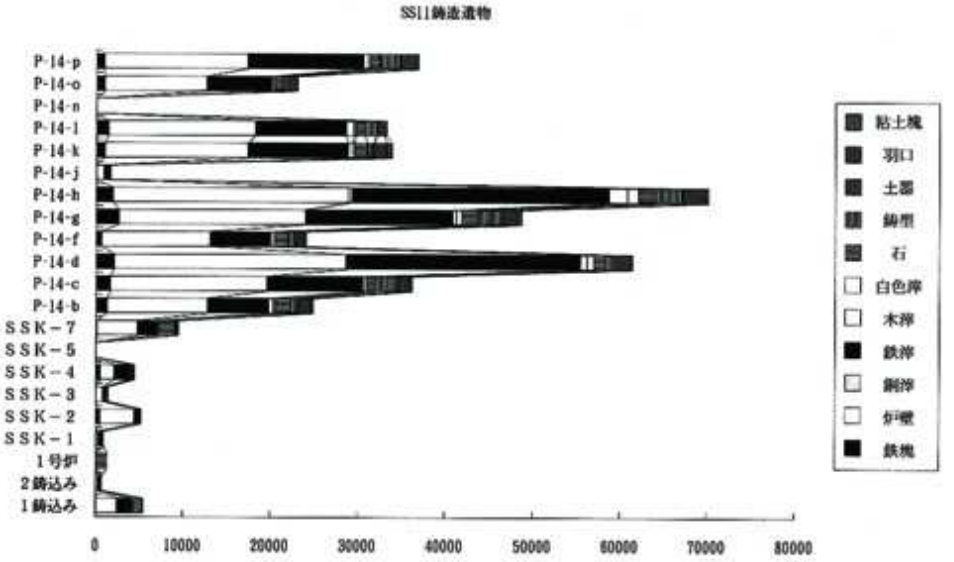
小番号	鉄　滓	炉　壁	銅滓	鉄滓	木炭	白色滓	石	鋳型	土器	羽口	粘土塊
1鋳込み	75	2377	0	1416	46	52	175	957	12	326	0
2鋳込み	51	202	0	304	80	17	15	62	12	0	0
1号炉	0	22	0	6	0	0	1304	0	0	0	0
ＳＳＫ－1	17	332	0	433	79	0	5	0	0	20	0
ＳＳＫ－2	505	3860	0	658	22	32	19	12	32	49	1
ＳＳＫ－3	0	815	0	196	10	20	35	42	281	38	0
ＳＳＫ－4	479	1612	0	1599	116	69	289	154	10	80	0
ＳＳＫ－5	0	48	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ＳＳＫ－7	109	4610	5	2241	34	201	1875	126	10	43	254
P-14-b	1284	11550	78	6843	533	186	1789	787	268	1264	303
P-14-c	1607	18024	125	10720	271	332	921	2490	279	1171	353
P-14-d	2042	26588	131	26633	786	796	1327	824	558	1560	237
P-14-f	601	12517	22	6770	194	362	1513	735	297	809	311
P-14-g	2579	21394	82	16786	460	647	1836	2404	319	1717	527
P-14-h	1899	27037	402	28351	2136	1305	2012	3070	152	2435	393
P-14-j	14	850	0	645	38	5	27	34	5	65	0
P-14-k	982	16448	109	11257	578	262	1384	750	71	1459	590
P-14-l	1399	16866	48	10270	890	274	1039	1192	252	789	265
P-14-n	15	19	0	30	0	0	14	0	0	7	2
P-14-o	954	11717	14	7276	247	258	891	624	99	974	0
P-14-p	896	16495	76	13121	546	317	1024	2317	120	1706	363
合計	15508	193392	1092	146605	7066	5135	17494	16580	2777	14512	3599

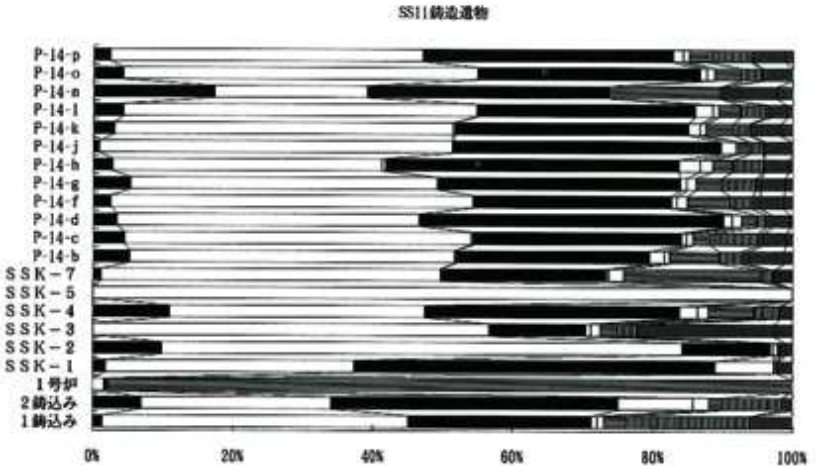
小番号	鍋	容器	梵鐘	獣脚	他の脚	仏具	不明鋳型	日用品小計	仏具小計	鋳型合計
1鋳込み	0	200	591	9	0	0	157	0	800	957
2鋳込み	0	57	0	0	0	0	5	0	57	62
ＳＳＫ－2	0	0	0	0	0	0	12	0	0	12
ＳＳＫ－3	0	0	0	40	0	0	2	0	40	42
ＳＳＫ－4	0	75	0	0	0	0	79	0	75	154
ＳＳＫ－7	0	0	0	0	0	6	120	0	6	126
P-14-b	0	32	312	152	0	44	247	0	540	787
P-14-c	0	639	435	32	0	640	744	0	1746	2490
P-14-d	0	264	28	91	0	75	366	0	458	824
P-14-f	0	0	369	0	0	37	329	0	406	735
P-14-g	0	377	466	192	40	0	1329	0	1075	2404
P-14-h	0	1040	266	727	0	270	767	0	2303	3070
P-14-j	0	6	0	0	0	0	28	0	6	34
P-14-k	0	81	94	92	0	285	198	0	552	750
P-14-l	0	323	226	39	0	219	385	0	807	1192
P-14-o	0	192	150	82	0	0	200	0	424	624
P-14-p	0	163	209	153	0	853	939	0	1378	2317
合計	0	3449	3146	1609	40	2429	5907	0	10673	16580

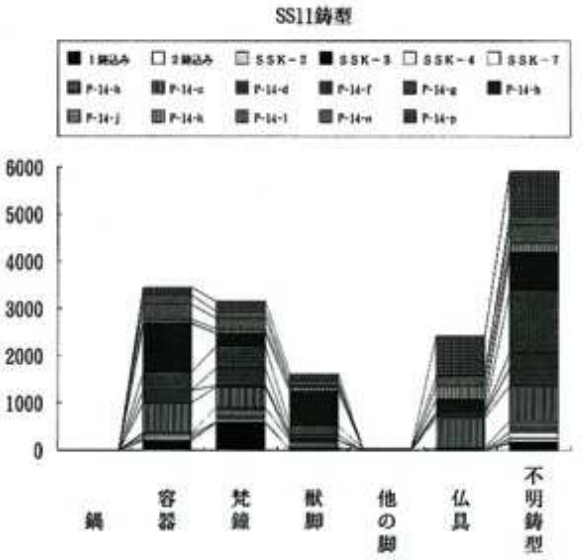
壁とした。

羽口は11～16である。11～13・15は円筒形の大型羽口である。14は推定直径4.1cmの小口径の溶解炉羽口である。16は鍛冶炉の羽口である。17は小口径の羽口先端部付近の破片である。先端の溶解部分は欠け、他の側面も破面である。穿孔部は、辛うじて残っている。胎土は緻密で１mm前後の

第40表　第11鋳造遺構群遺物計量表(2)







石粒が混じり、3㎜程の長さのスサや非常に細かい繊維痕が見られる。骨針(白色針状物質)も観察できる。外側は先端部から2.5cm程が発泡した表面となるが、ガラス状に深く溶解していない点と、骨針の存在から見て耐火度は比較的高い海性粘土を用いていると考えられる。色調は内面から黄褐色、赤褐色、薄い紫色の順に熱変化しており、青灰色に発泡した表面に達する。両側面の破面に向かって滓化した部分が認められ、使用時にはやや亀裂が入っている状況である。羽口片の元位置としては、正面から見て右側部分の先端からやや基部に向かった部分であろう。発泡した表層は最も厚いところで2㎜の厚さの黒色ガラス質滓層である。

このように、本群では、溶解炉に大小があった可能性を窺わせる大小の溶解炉羽口を検出した。又、鍛冶炉検出はないものの17の椀型鍛冶滓の出土と共に鍛冶炉羽口を検出したことは注目される。

18は黒鉛化木炭である。溶解炉内に投入された燃料の木炭が燃焼するときに木質部分が燃えつきないうちに木炭に溶解物が浸透し鉛状に変化する。色は黒～銀色である。非常に硬く簡単には割れない。表面は木炭の木目の痕が見られる。

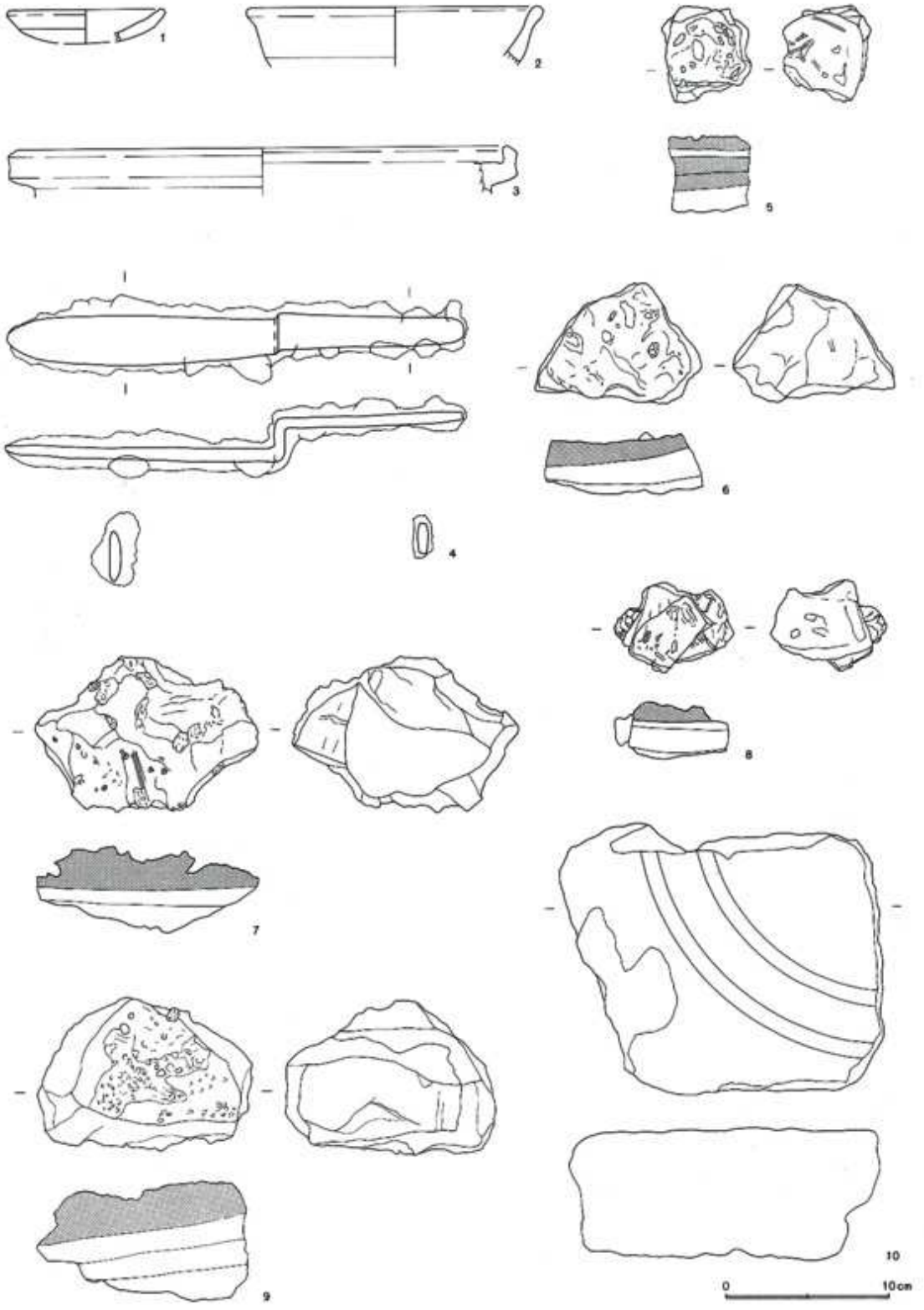
鉄滓は19・20である。19は厚い椀形をした塊状の遺物である。表面の各所に重層した2㎜以下の鉄滓片や焼土が見られ、青味がかった光沢をもち、1㎜以下の大きさのごく薄い鍛造剝片も混在する。全体の色調は褐色で、鍛造剝片がキラキラと輝いている。一見すると砂の塊状だが磁着は強く、滓片や鍛造剝片を多量に含む再結合滓であろう。上面はややくぼみ皮膜状に茶褐色の二次酸化面が形成されている。鍛造剝片は黒く無光沢の厚さ0.4㎜程のものから、0.1㎜以下の厚さの青い光沢のあるものまでが混在するが、後者が圧倒的に多い。粒状滓は径0.1㎜程の黒っぽいものがわずかに認められる。

20は炉壁に湯滓が付着した滓である。湯滓の色は黒色の地に濃い青色が部分的に付く変色滓で、器面は気泡状の凹凸がある。

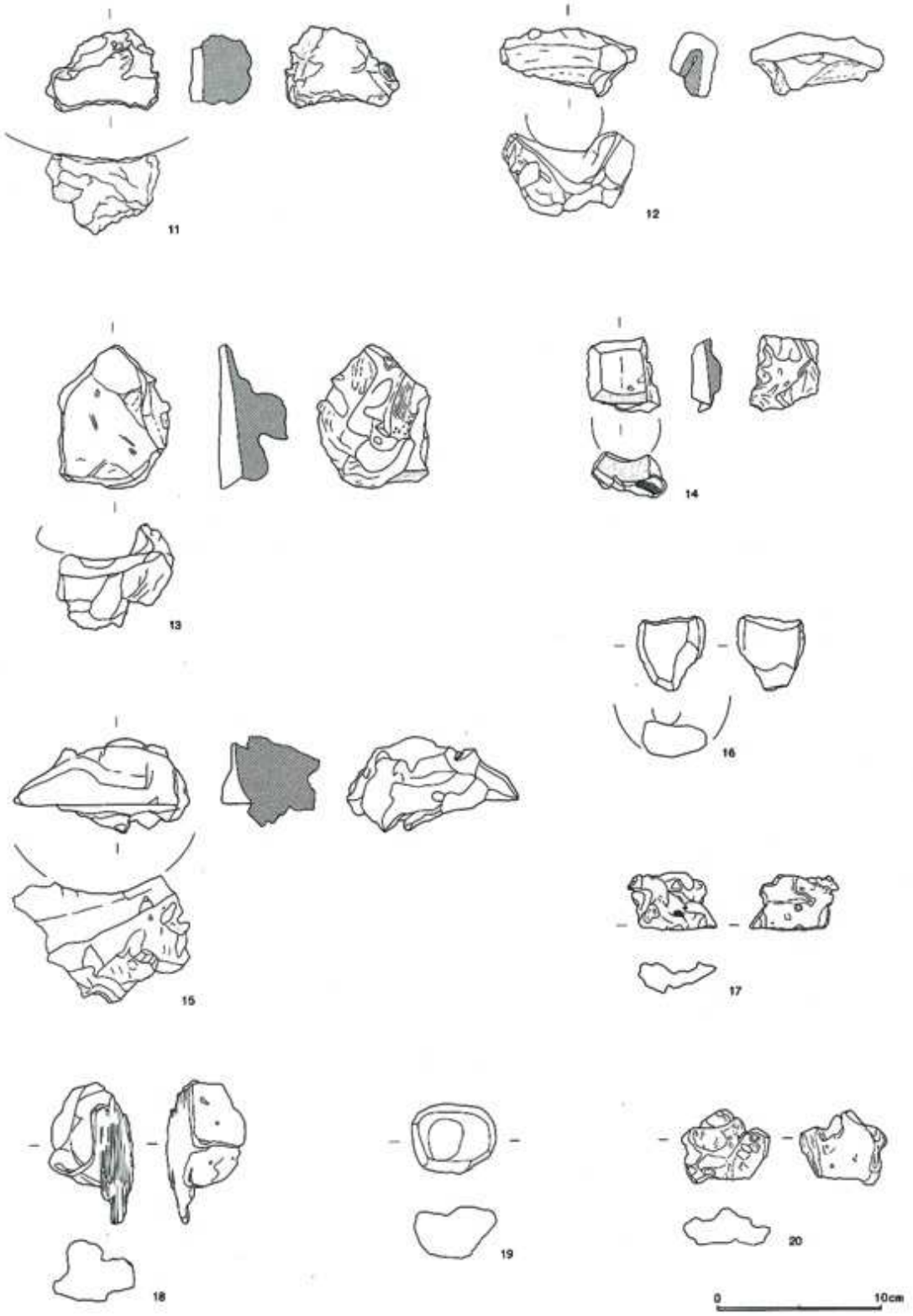
鋳型は容器、梵鐘、仏像、獣脚、磬、鈕、注ぎ口、飾り金具等を検出した。21～24は容器鋳型である。21は口縁部の端部で、器面は基型整形による。合わせ部分を残し、幅木部分から還元状態になり、黒味の付着が見られる。推定口径は45.4cmである。22は容器胴部の破片である。中央に幅5㎜の沈線をまわす基型整形である。23・24は容器鋳型であるが、口縁部上端も基型整形され仕上げ真土が塗られ還元状態である。製品を推定すれば鍔状の部分をもつ容器と考えられ、大型の香炉や護摩炉の可能性がある。

25～38は梵鐘鋳型の破片である。このうち、26～29は撞座鋳型であり、いずれも複弁八葉蓮華文で細かい蕊が中心に巡る。30は半鐘の龍頭片と考えられる。

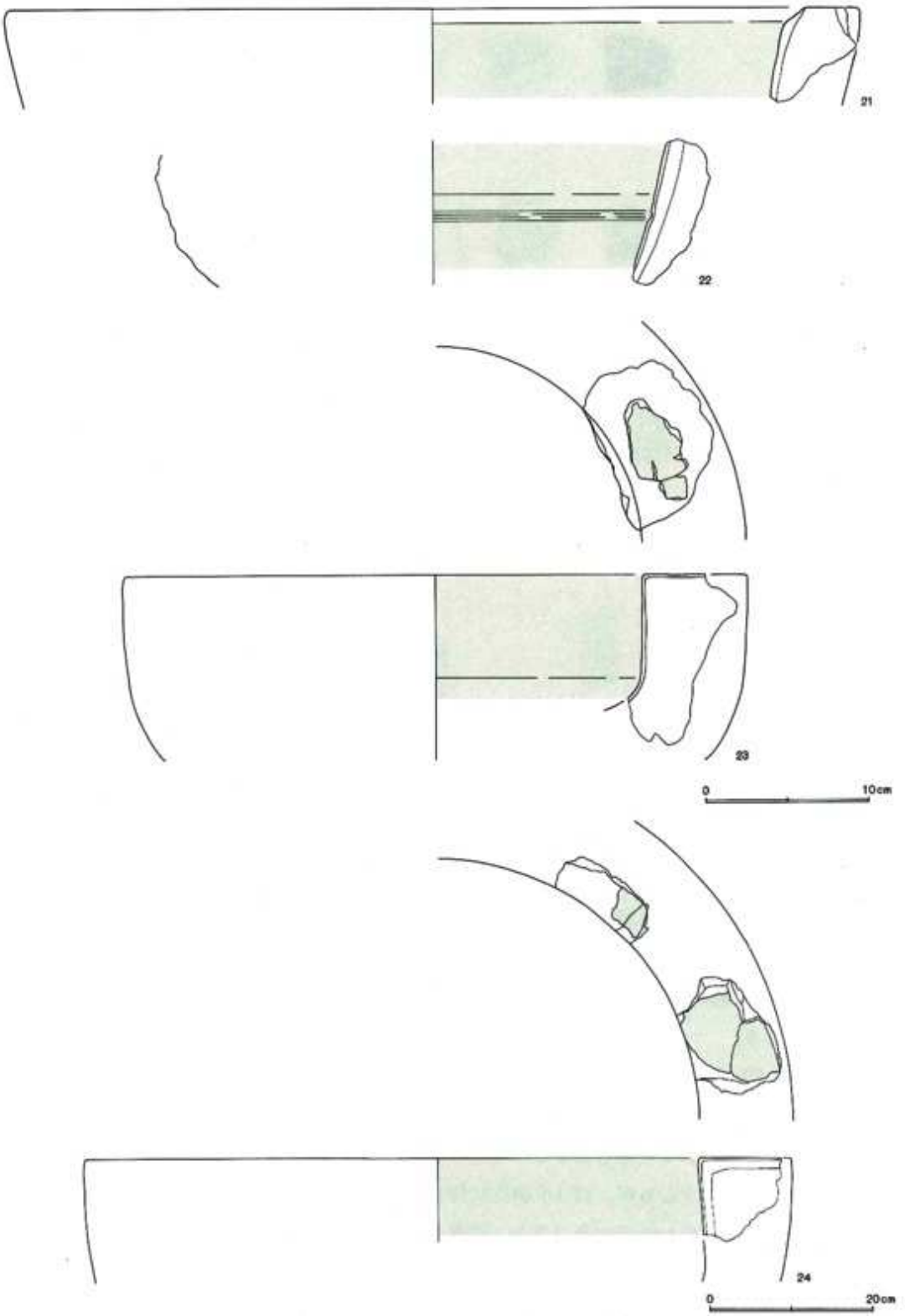
39～41は小仏像の鋳型である。39と40は合わせ型の正面と背面となり、合わせ部分は幅1.5cm前後あり、微妙な粘土の凹凸により固定される。像は范型によるものと考えられる。素材は粘土で造られ、細かな砂粒子を含む。鋳型面には仕上げ真土は見られず全体が同一の粘土である。湯口は台座部分に円錐状に付く。還元面はなく未使用品と考えられる。全長16.7cm、像高10.8cm、台座幅4.8cm、頭部幅1.9cm、像部幅4.1cmである。天王立像を表現した雌型像である。像容は頭部に髪を結い、正面に宝冠をつける。右手は肘を曲げ腰に手をあて、左手は肘を鋭角に曲げ胸の横に構える。両手とも持物を取るか、大袖をつけて着甲し、下半身に袴をつけ甲をつけて沓を履き、天衣をつけ



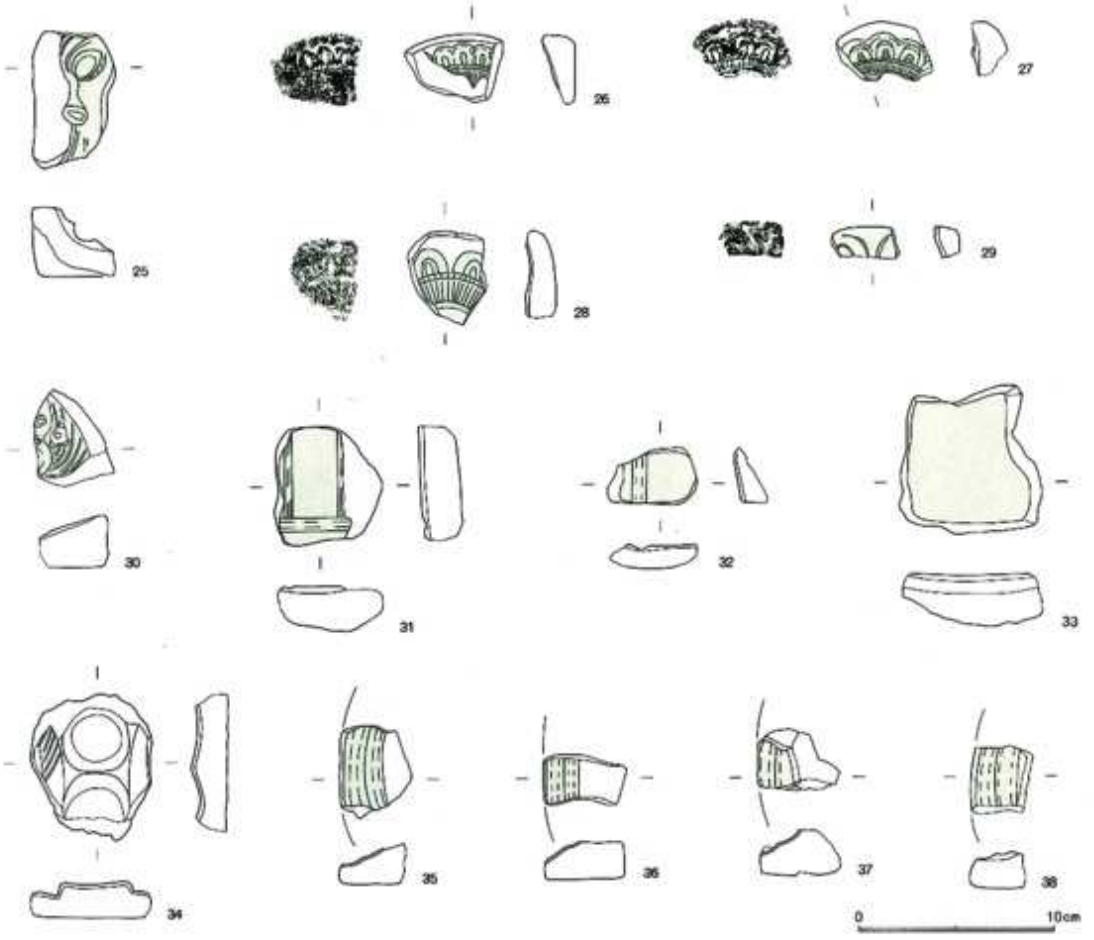
第316図　第11鋳造遺構群出土遺物(1)



第317図　第11鋳造遺構群出土遺物(2)



第318図　第11鋳造遺構群出土遺物(3)



第319図　第11鋳造遺構群出土遺物(4)

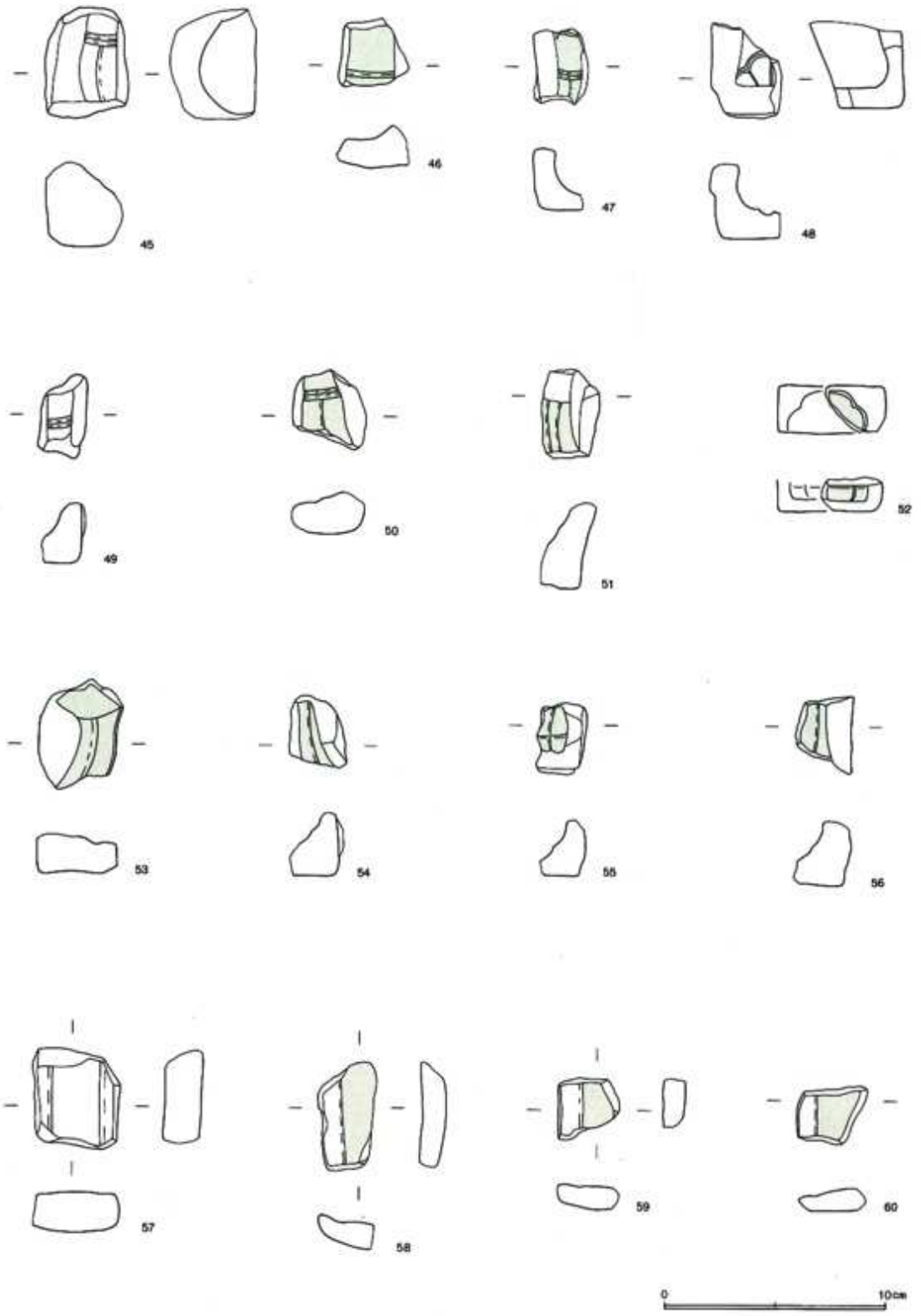
る。岩座上に腰を左にひねり足を大きく広げて立つ。四天王のうちの一体と考えられる。

41は菩薩立像の背面下半身である。衣をつけ、天衣を体側に沿って垂下させ、台座上に直立する。残存長さは9.3cm、幅5.6cm、厚さ2.2cmである。色調は明褐色で、鋳型面には還元面が見られず未使用と考えられる。

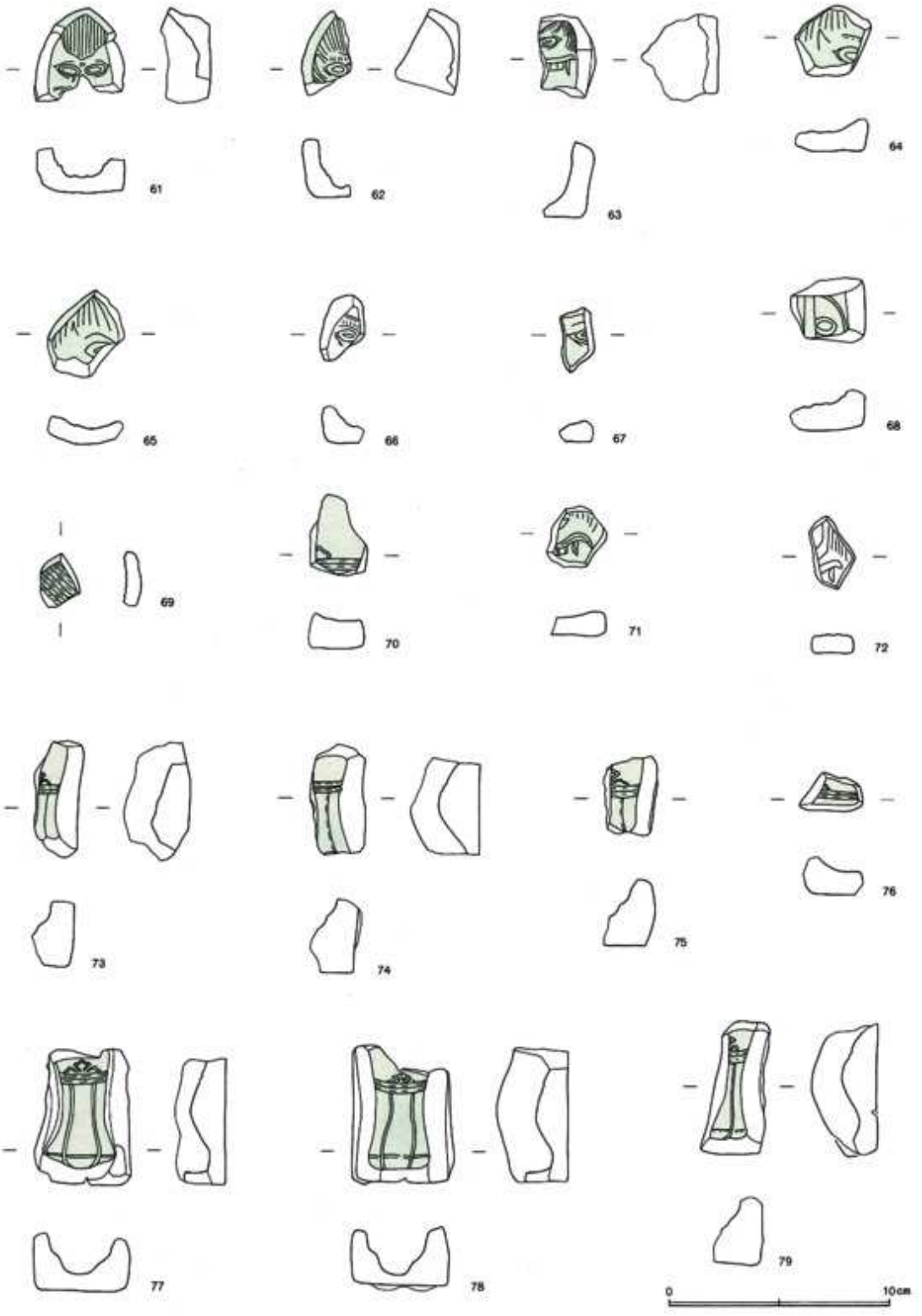
42・43、45～79は脚鋳型である。本遺構群からは獣脚式と猫足式の二種類を検出した。獣脚式は上部（頭部）を獅噛形に作り下部（脚部）を獣足とする。これに対し猫足式は断面を将棋の駒形に作り、下端をやや太くして外反させるものである。42・43は猫足式である。両者の形態は異なり、42は外反させ下端が太くなるが、43は直線的に伸びた脚に足が取りつく。45～79までは獣脚式であり、このうち57～60は合わせ型の蓋である。獣脚の形態は鬣が施され、左右に角が見られる。また、噛み締めた口もとの両側に牙をむきだしている。獣足部との境には二条の沈線が施され70・73～79には三又状の菱形文を形どり足部へと移行する。

80～82は磬の鋳型である。いずれも、同一個体と考えられ外縁を二条の沈線で区画する。80・81には耳の部分が残存する。径３㎜ほどの突起がみられ吊るすための穴を造り出している。還元面は

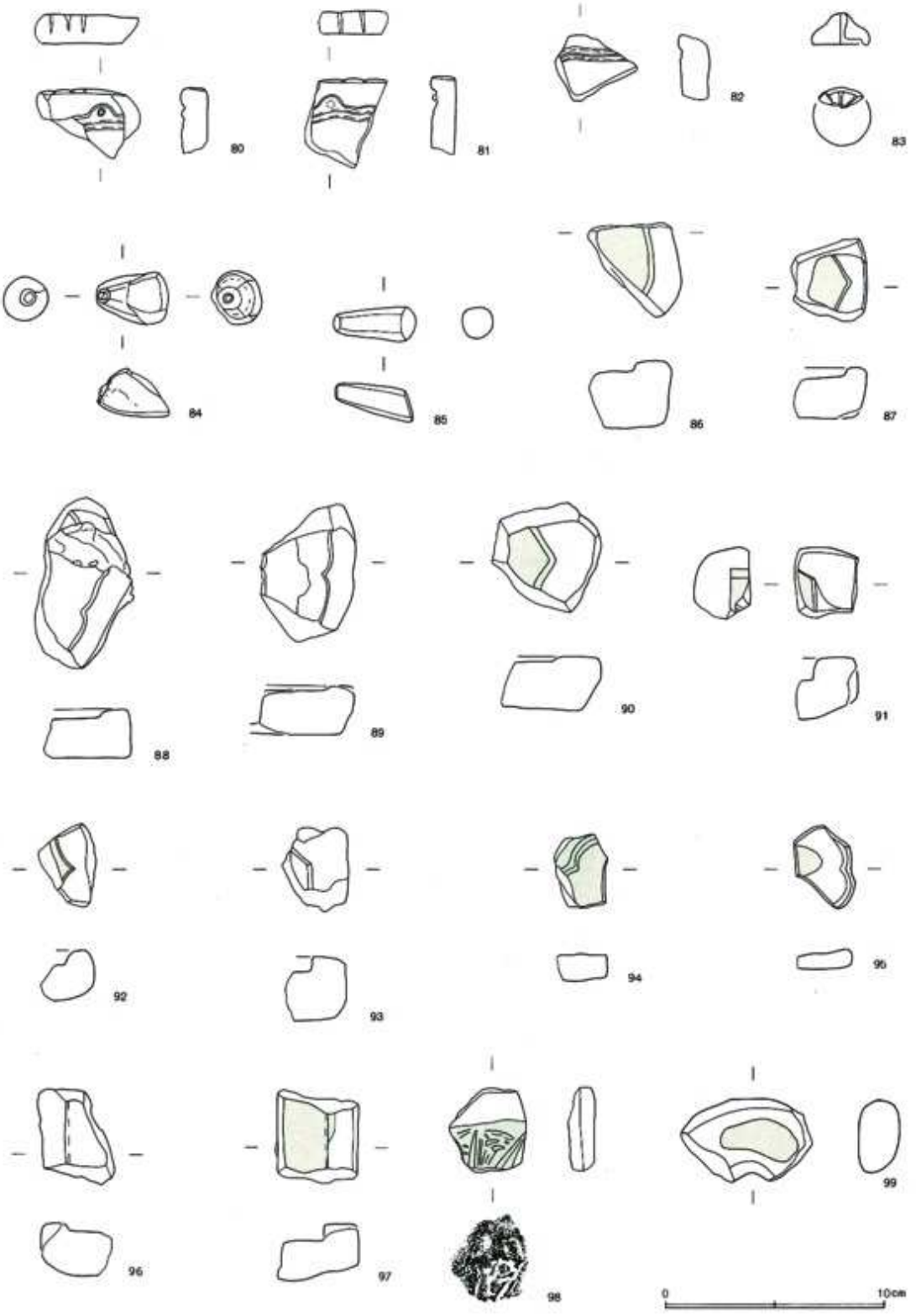
第320図　第11鋳造遺構群出土遺物(5)



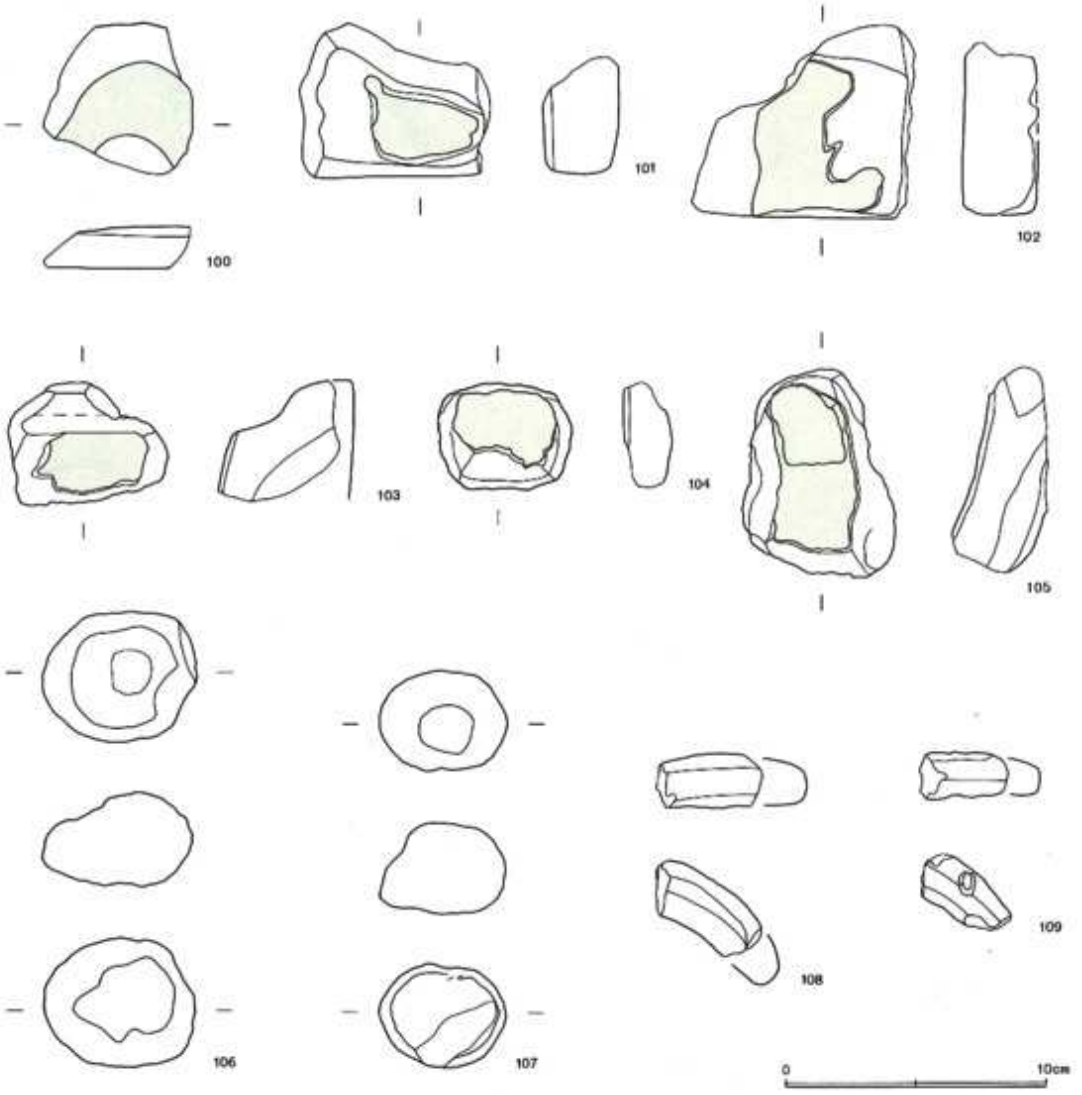
第321図　第11鋳造遺構群出土遺物(6)



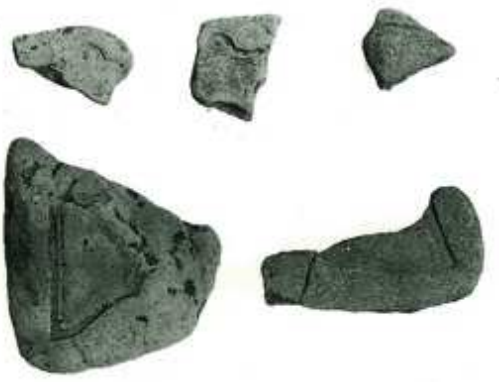
第322図　第11鋳造遺構群出土遺物(7)



第323図　第11鋳造遺構群出土遺物(8)

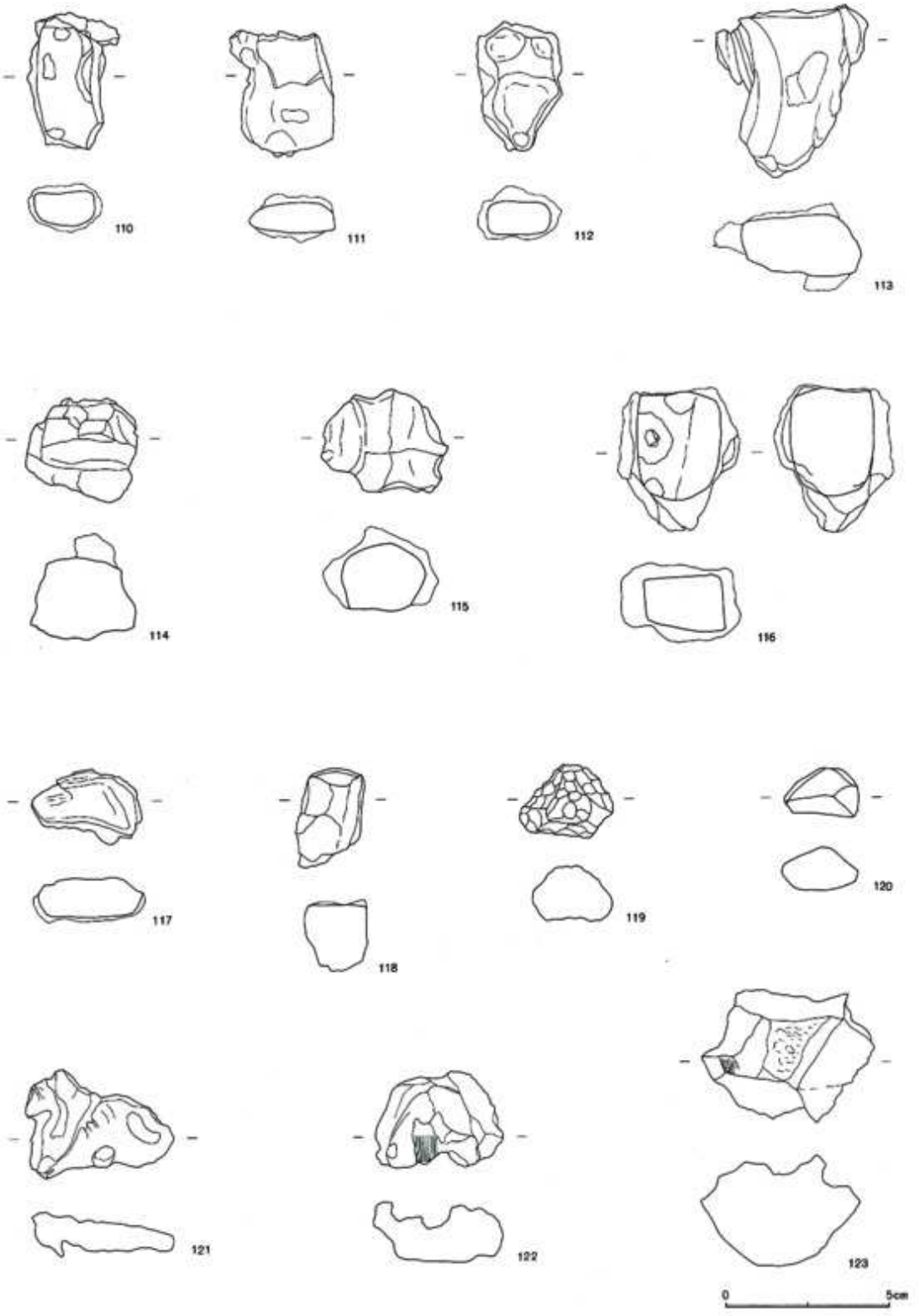


第324図　第11鋳造遺構群出土遺物(9)

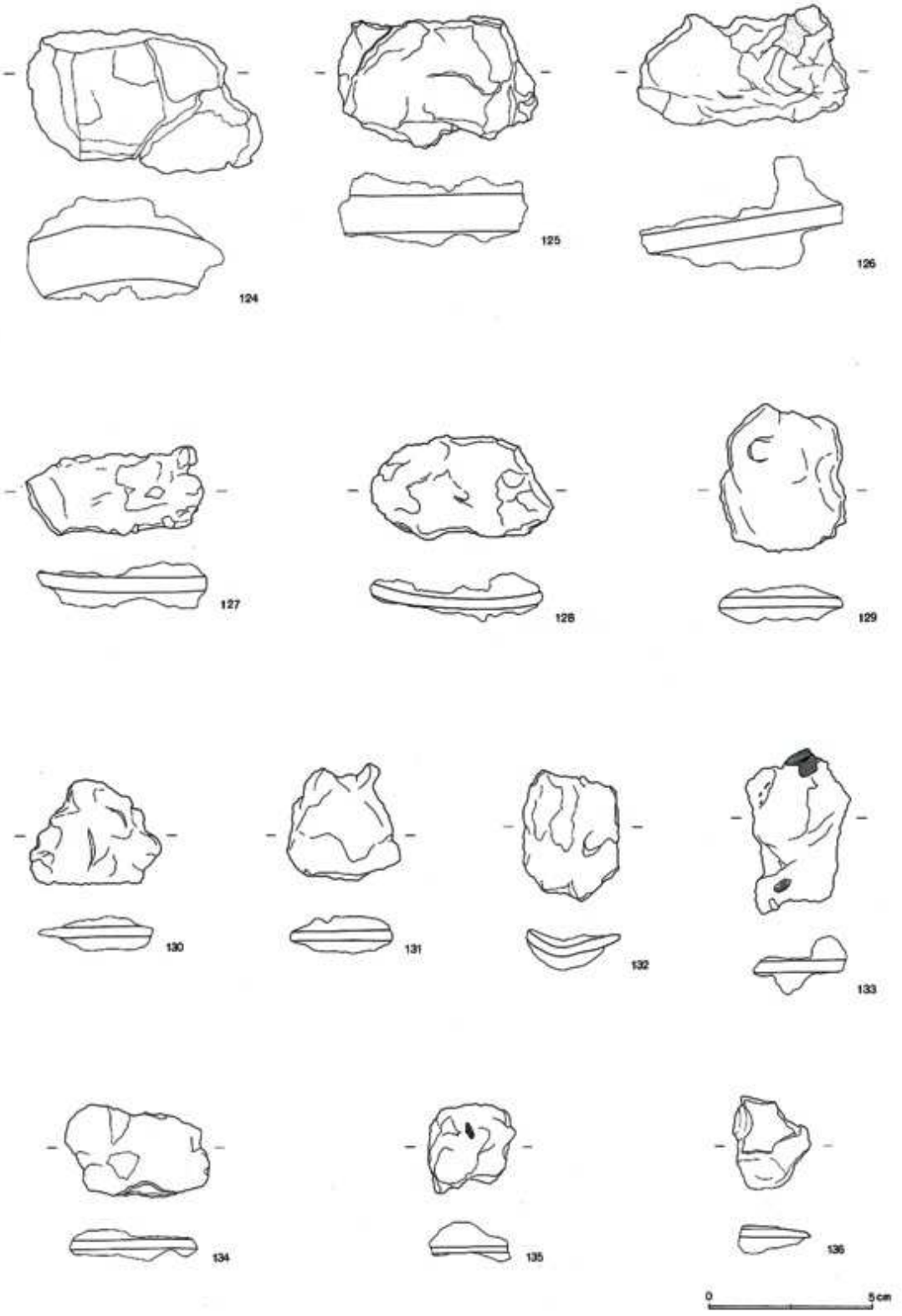


磬　鋳　型▶

金井遺跡B区から出土した仏具鋳型は多種にわたる。このうち、検出した梵音具（ボンオング）には梵鐘・磬がある。本群出土の磬は耳部分の破片であり上端面には三本の刻みによる合い印が残されていた。



第325図　第11鋳造遺構群出土遺物(10)



第326図　第11鋳造遺構群出土遺物(1)

なく未使用品と考えられる。きめの細かな粘土を素材とし砂粒子・小石をわずかに含む。表面は磬の形の外縁に合わせ部分を幅1.2cmもつ。底面は平坦であり、側面には縦方向の三本の刻み目があり下型と合わせるための合い印と考えられる。残存部分が小片のため全体は判断できないが素文の磬と見られる。

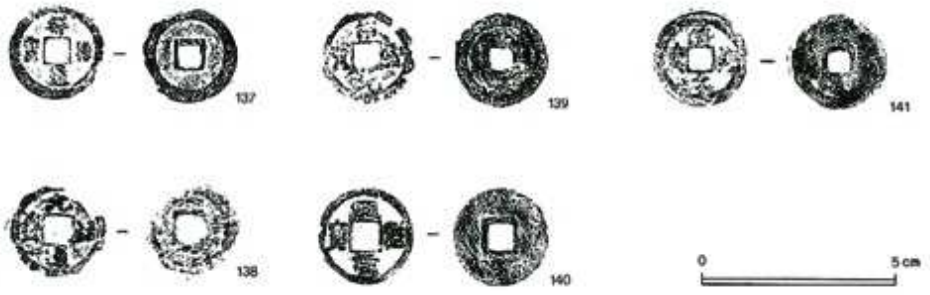
83～105は仏具の鋳型と考えられる。83はつまみと考えられる。84・85は注ぎ口の外型と中子で、還元面はなく未使用である。86～97は飾り金具の鋳型と見られるが、91・92は掘りが深く、角の部分が鋭角に直線的に開いている。また、96・97は直線的な部分の鋳型である。これらは、獣脚の付く盤の可能性も考えられる。98～105容器の鋳型片と考えられる。

道具は106～109である。106・107は半球状土製品、108・109は三叉状土製品である。

鉄塊は110～118と124～136であり、これらは、鉄塊と鋳造鉄製品の破片を含む。

銅滓は119～122であり、このうち120は銅塊である。また、123は椀形滓である。

古銭は５枚検出し、いずれも北宋銭である。137は祥符通寶（1008年）、138は元祐通寶（1086年）、139～141は紹聖通寶（1094年）である。



第327図　第11鋳造遺構群出土遺物(12)

第11群出土遺物観察表（第316～327図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	産地
1	手づくね	9.3	2.1		ABC	B	褐色	25%	P－14－c－3	在地
2	鉢	18.0	3.6		I	B	褐灰色	5%	P－14－o－5	常滑
3	甕	(30.0)	2.9		BDI	A	黒褐色	5%	Q－15－i－6	常滑

第11群出土鋳造遺物観察表　（第316～327図）

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
4	カンナ	28.0	3.0	0.8	350		SSK2№1	塊1
5	炉壁	5.8	5.2	4.6	122		P－14－b－4	炉3
6	炉壁	7.2	10.0	3.4	183		P－14－p－2	炉3
7	炉壁	9.3	13.1	4.7	415		P－14－c№2	炉1
8	炉壁	5.5	7.3	3.3	89		P－14－1－9	炉4
9	炉壁	9.0	13.0	7.2	595		P－14　Pit5	炉3
10	炉壁	19.1	15.9	7.9	2650		SSK2№4	炉3
11	羽口	4.2	6.5	3.6	107	直径（23.4）	第1号鋳込み	羽口
12	羽口	4.5	8.2	3.4	70		P－14－h－1	羽口
13	羽口	8.6	6.7	4.0	168		P－14－h－9	羽口

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
14	羽口	4.5	4.3	2.5	34	直径 4.1	P－14－h－8	羽口
15	羽口	6.6	10.0	5.5	193	直径（12.4）	P－14－p－9	羽口
16	羽口 鍛冶	4.4	4.0	1.9	30	直径（2.0）	P－14－d－3 分析資料№30	羽口
17	椀形滓	3.4	4.8	1.6	46		P－14－h－3	塊2
18	黒鉛化木炭	8.5	5.1	3.7	108		P－14－h 分析資料№44	木炭
19	滓 再結合滓	4.1	5.2	3.2	92.8		P－14－f－6 分析資料№42	滓1
20	鉄滓	4.3	5.3	2.1	32		P－14－d－3	他の滓
21	容器				84	口径45.4 器高5.7	P－14－o－4	鋳型
22	容器			3.1	606	胴径27.0 器高8.8	P－14－g－2 P－14－h－6	鋳型
23	容器	6.7	9.5	5.8	570	口径25.2 鍔の幅6.4	P－14－p－6	鋳型
24	容器				1555	直径64.0 鍔の幅11.5	Pit 5 №1,7	鋳型
25	梵鐘 龍頭	7.0	4.1	2.7	75		P－14－b	鋳型
26	梵鐘 撞座	3.5	5.0	1.6	25	直径 11.0	P－14－k－9	鋳型
27	梵鐘 撞座	3.0	4.6	1.8	22	直径10.8	P－14－k－5	鋳型
28	梵鐘 撞座	4.6	3.9	1.6	30	直径9.3	P－14－d－7	鋳型
29	梵鐘 撞座	1.6	3.3	1.3	10		P－14－b－2	鋳型
30	梵鐘 龍頭	4.8	4.0	2.6	47		P－14－p－8	鋳型
31	梵鐘 縦帯	6.0	5.4	2.2	71		P－14－l－5	鋳型
32	梵鐘 縦帯	2.9	4.5	1.4	17		P－14－p－4	鋳型
33	梵鐘	6.6	6.2	2.6	135		P－14－f－6	鋳型
34	梵鐘 龍頭	7.4	6.1	1.9	70		P－14－l－5	鋳型
35	梵鐘 ジョウ	4.7	3.7	2.0	31		P－14－k－7	鋳型
36	梵鐘 ジョウ	2.4	4.3	1.9	27		P－14－d－7	鋳型
37	梵鐘 ジョウ	3.1	4.2	2.3	27		P－14－k－8	鋳型
38	梵鐘 ジョウ	3.4	3.0	1.8	23		P－14－k－8	鋳型
39	仏像	16.6	9.3	2.5	390		P－14－c №3	鋳型
40	仏像	15.5	7.7	2.0	200		P－14－c №3	鋳型
41	仏像	9.3	5.0	1.2	100		P－14－c－1	鋳型
42	獣脚	4.8	3.4	2.0	25		SSK3	鋳型
43	獣脚	3.6	3.5	3.5	36		P－14－h－8	鋳型
44	仏具 不明	6.8	4.8	1.3	70		P－14－k－5	鋳型
45	獣脚	5.0	3.8	3.4	58		P－14－h－7	鋳型
46	獣脚	3.0	3.1	1.9	14		P－14－g－7	鋳型
47	獣脚	3.4	2.3	1.4	18		SSK3	鋳型
48	獣脚	4.0	4.0	1.8	32		P－14－h－6	鋳型
49	獣脚	3.8	2.1	1.8	14		P－14－g－7	鋳型
50	獣脚	3.1	3.4	1.8	17		P－14－p－9	鋳型
51	獣脚	4.0	2.6	1.8	29		P－14－k－5	鋳型
52	獣脚	2.1	2.7	1.5	8		P－14－p－6	鋳型
53	獣脚	4.5	3.6	1.7	32		P－14－p－5	鋳型
54	獣脚	3.0	2.7	2.1	14		P－14－o－8	鋳型
55	獣脚	3.2	2.2	1.9	12		P－14－h－9	鋳型
56	獣脚	3.6	2.5	2.3	18		P－14－p－6	鋳型
57	獣脚 合わせ	4.2	3.9	1.8	39		P－14－l－9	鋳型
58	獣脚 合わせ	4.9	2.6	1.2	16		P－14－l－8	鋳型
59	獣脚 合わせ	2.7	2.8	1.0	9		第1号鋳込み	鋳型
60	獣脚 合わせ	2.5	3.0	1.0	10		P－14－b－5	鋳型
61	獣脚	3.4	2.2	1.9	20		P－14－h－8 P－14－h－9	鋳型
62	獣脚	3.2	2.9	1.2	12		P－14－g－6	鋳型

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
63	獣脚	3.6	3.5	1.3	16		P－14－g－7	鋳型
64	獣脚	3.1	3.3	1.3	10		P－14－d－7	鋳型
65	獣脚	3.6	3.5	0.9	9		P－14－d－7	鋳型
66	獣脚	2.7	1.9	1.2	5		P－14－k－4	鋳型
67	獣脚	2.6	1.4	0.9	3		P－14－l－5	鋳型
68	獣脚	2.9	3.4	1.5	14		P－14－f－2	鋳型
69	獣脚	2.3	1.8	0.7	3		P－14－b－6	鋳型
70	獣脚	3.6	2.6	1.6	12		P－14－h－5	鋳型
71	獣脚	2.8	2.5	1.1	7		P－14－k－6	鋳型
72	獣脚	3.1	1.9	0.9	4		P－14－c－8	鋳型
73	獣脚	5.3	3.0	1.9	25		P－14－p－9	鋳型
74	獣脚	4.9	3.1	2.1	31		P－14－o－8	鋳型
75	獣脚	3.5	2.4	2.0	20		P－14－g－7	鋳型
76	獣脚	1.7	2.8	1.4	5		P－14－p－6	鋳型
77	獣脚	6.2	4.3	2.3	55		P－14－g－9	鋳型
78	獣脚	6.2	4.7	3.2	65		P－14－h－9	鋳型
79	獣脚	6.0	3.0	2.1	35		P－14－g－7	鋳型
80	仏具　磬	3.1	4.6	1.2	16		Pit 8	鋳型
81	仏具　磬	4.1	3.2	1.1	16		Pit 8	鋳型
82	仏具　磬	3.0	3.7	1.3	13		P－14－d－7	鋳型
83	仏具　つまみ	0.9	2.0	0.8	2		P－14－j－4	鋳型
84	鉄瓶　注口	3.2	2.2		12	注口径　0.6	P－14－h－4	鋳型
85	鉄瓶　注口中子	3.4		1.4	8		P－14－g－2	鋳型
86	仏具　飾り金具	3.9	4.2	3.0	43		P－14－l－2	鋳型
87	仏具　飾り金具	3.4	3.7	2.3	23		P－14－k－9	鋳型
88	仏具　飾り金具	4.2	7.7	2.2	73		P－14－p－4	鋳型
89	仏具　飾り金具	4.2	5.8	2.2	58		P－14－p－4	鋳型
90	仏具　飾り金具	4.9	5.0	2.5	50		P－14－d－6	鋳型
91	仏具　飾り金具	2.8	3.2	2.6	23		P－14－k－6	鋳型
92	仏具　飾り金具	2.6	3.8	2.1	20		P－14－p－8	鋳型
93	仏具　飾り金具	3.0	3.6	2.8	30		P－14－k－3	鋳型
94	仏具　金具合わせ	2.4	3.3	1.2	12		P－14－f	鋳型
95	仏具　金具合わせ	2.6	3.4	0.8	9		P－14－k－4	鋳型
96	仏具　不明	3.9	3.2	2.0	31		P－14－k－4	鋳型
97	仏具　不明	3.7	3.9	2.2	30		P－14－p－1	鋳型
98	仏具　不明	3.8	3.6	1.2	18		Pit40	鋳型
99	仏具　不明	3.6	5.9	1.8	38		P－14－l－2	鋳型
100	梵鐘　龍頭	5.7	5.8	1.6	54		P－14－k－9	鋳型
101	仏具　不明	5.9	7.3	2.9	118		P－14－h－4	鋳型
102	仏具　不明	7.4	8.3	2.9	151		P－14－h－4	鋳型
103	容器	4.6	5.6	2.7	76		P－14－o－8	鋳型
104	容器	2.1	4.0	1.8	32		P－14－p－6	鋳型
105	容器	5.9	3.1	(2.5)	115		P－14－l－2	鋳型
106	半球状土製品	4.9	5.7	3.6	70		P－14－g－5	土器
107	半球状土製品	3.7	4.9	3.5	55		P－14－f－6	土器
108	三叉状土製品		2.1		20		P－14－g　№2	土器
109	三叉状土製品		1.8		12		P－14－h－8	土器
110	鉄塊系遺物	4.1	2.4	1.4	34		P－14－k	塊1
111	鉄塊系遺物	3.2	2.8	1.4	32		P－14－p	塊1